

宮 後 遺 跡 部田野西原遺跡

一般国道245号道路拡幅事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成24年3月

茨城県常陸大宮土木事務所
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第354集

宮 後 遺 跡
部 田 野 西 原 遺 跡

一般国道245号道路拡幅事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成24年3月

茨城県常陸大宮土木事務所
財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、均衡ある地域発展と地域交流圏の形成を図るため、人・物・情報・技術等が活発に交流できる開発を目指しており、県内の高速交通網を早期に形成するとともに、アクセス道路や地域間を結ぶ国道などの道路整備が計画的・効率的に進められています。

国道245号は、水戸市を起点にひたちなか市、東海村を経て日立市に至る重要な幹線道路であり、慢性的な交通渋滞の解消、原子力災害関連の緊急避難道路、及びひたちなか地区開発の支援道路として、早期の4車線化が強く望まれている路線です。そのため、茨城県常陸大宮土木事務所は平成4年度から、工事をすすめてきました。しかしながら、この事業予定地内には宮後遺跡・部田野西原遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県常陸大宮土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成22年4月から6月の3か月間にわたってこれを実施しました。

本書は、宮後遺跡・部田野西原遺跡の平成22年度調査の成果を記録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県常陸大宮土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、ひたちなか市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成24年3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、茨城県常陸大宮土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成22年度に発掘調査を実施した茨城県ひたちなか市部田野2860番地ほかと所在する宮後遺跡と、茨城県ひたちなか市部田野1576番地の2ほかと所在する部田野西原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 両遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査
平成22年4月1日～6月30日

整理
平成23年11月1日～平成24年3月31日
- 3 両遺跡の発掘調査は調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長 仲村浩一郎 平成22年4月1日～6月30日
主任調査員 市村 俊英 平成22年4月1日～6月30日
主任調査員 長津 盛男 平成22年4月1日～6月30日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、調査員大久保隆史が担当した。
- 5 宮後遺跡から出土した銭貨の保存処理及び金属製品（耳環）の保存処理並びに成分分析調査については、株式会社吉田生物研究所に委託し、成分分析の調査結果については、付章として掲載した。

凡 例

- 1 宮後遺跡・部田野西原遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = +41,480 \text{ m}$ 、 $Y = +66,840 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」「B2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SA - 柱列跡 SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡 SF - 道路跡 SI - 竪穴住居跡 SK - 土坑

TP - 陥し穴 P - ビット PG - ビット群

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器 B - 馬歯




土層 K - 攪乱


- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として、60分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 赤彩・漆・焼土・施釉  炉・火床面  竈部材・粘土範囲・黒色処理

 柱痕跡・柱あたり

●土器 ○土製品 □石器・石製品 △金属製品 ---硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各総量で記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。計測値の単位はm、cm、kg、gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 竪穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 宮後遺跡	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 縄文時代の遺構と遺物	12
(1) 陥し穴	12
(2) 土坑	13
2 弥生時代の遺構と遺物	13
竪穴住居跡	13
3 古墳時代の遺構と遺物	16
竪穴住居跡	16
4 奈良時代の遺構と遺物	33
竪穴住居跡	34
5 平安時代の遺構と遺物	48
(1) 竪穴住居跡	48
(2) 土坑	57
6 その他の遺構と遺物	58
(1) 竪穴住居跡	58
(2) 掘立柱建物跡	60
(3) 道路跡	64
(4) 土坑	65
(5) 溝跡	67
(6) 柱列跡	69
(7) ビット群	72

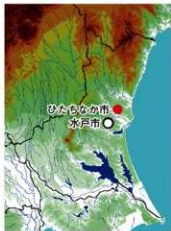
(8) 遺構外出土遺物	77
第4節 まとめ	86
第4章 部田野西原遺跡	93
第1節 調査の概要	93
第2節 遺構と遺物	93
1 平安時代の遺構と遺物	93
竪穴住居跡	93
2 土坑	96
第3節 まとめ	96
付 章	97
写真図版	PL 1～PL20
抄 録	

みやご へたのにしはら 宮後遺跡・部田野西原遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

宮後遺跡と部田野西原遺跡は、ひたちなか市の東部、
なかまるがわ ほんこうがわ
中丸川と本郷川の合流地点の北東部、標高26mの南北
に延びる台地の緩やかな斜面に立地しています。

両遺跡の調査は、国道245号の拡幅工事に伴い、遺跡
の記録保存を目的に、平成22年度に行いました。この報
告書は、その調査結果を収録したものです。



調査の内容

宮後遺跡からは縄文時代の陥し穴や土坑、弥生時代、古墳時代、奈良時代および平安時代の竪穴住居跡などが確認できました。宮後遺跡の北側に位置する部田野西原遺跡からは、平安時代の竪穴住居跡が確認できました。



宮後遺跡・部田野西原遺跡の遠景



古墳時代の一辺約8mの大形住居跡（第2号住居跡）



福島県域の特徴がみられる土器（第2号住居跡出土）



奈良時代の住居跡（第16号住居跡）に2基並んで作られた竈かまど



平安時代の銭貨「隆平永寶」（第17号住居跡出土）

調査の結果

宮後遺跡では、古墳時代と奈良時代の大形住居跡が確認できたほか、古墳時代では福島県域との交流を示す土器、奈良時代では硯、平安時代では銭貨など、一般的な集落ではみられない遺物が出土しました。これらのことから、当遺跡は各時代の有力者が住まっていた集落であることが言えます。



平安時代の住居跡（第1号住居跡）

部田野西原遺跡では、平安時代の竪穴住居跡が1軒確認できました。この住居跡の竈は、2基が並んでおり、宮後遺跡の第16号住居跡の竈と作り方が似ています。このことから、両遺跡の関連性がうかがえます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成17年2月1日、茨城県常陸大宮土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対し、一般国道245号道路拡幅事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成17年2月22日に宮後遺跡・部田野西原遺跡の現地踏査を行い、その後平成20年12月25日、平成21年3月5・6日、平成22年1月26日に宮後遺跡、平成20年1月22日に部田野西原遺跡の試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。

平成21年3月24日・平成22年2月15日に宮後遺跡、平成20年2月7日に部田野西原遺跡について、茨城県教育委員会教育長は茨城県知事あてに、事業地内に遺跡が所在すること、その取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成22年2月16日、茨城県常陸大宮土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対し、宮後遺跡・部田野西原遺跡について、文化財保護法第94条に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、両遺跡とも現況保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成22年2月23日に宮後遺跡・部田野西原遺跡について、工事着手前に発掘調査を実施するよう茨城県常陸大宮土木事務所長あてに通知した。

平成22年2月24日、茨城県常陸大宮土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道245号道路拡幅事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。

平成22年2月24日、茨城県教育委員会教育長は茨城県常陸大宮土木事務所長あてに、宮後遺跡・部田野西原遺跡の発掘調査範囲及び面積等について回答した。また、あわせて調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県常陸大宮土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、宮後遺跡・部田野西原遺跡の発掘調査を平成22年4月1日から6月30日まで実施した。

第2節 調査経過

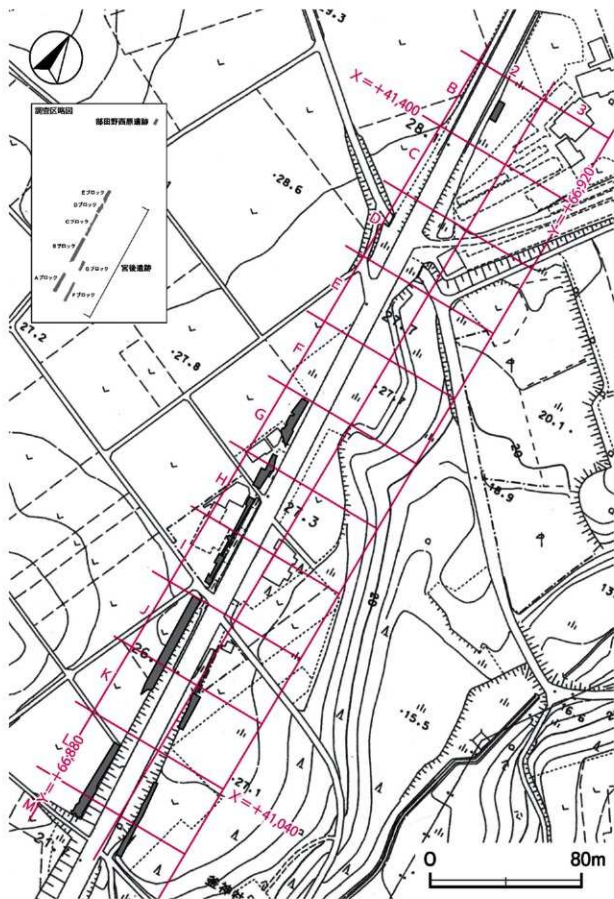
宮後遺跡・部田野西原遺跡の調査は、平成22年4月1日から6月30日まで実施した。以下、その概要を表で記載する。

宮後遺跡

工程	期間		
	4月	5月	6月
調査準備 表土除去 遺構確認	■		
遺構調査		■	■
遺物洗淨 写真整理	■	■	■
補足調査 撤収			■

部田野西原遺跡

工程	期間		
	4月	5月	6月
調査準備 表土除去 遺構確認	■		
遺構調査			■
遺物洗淨 写真整理			■
補足調査 撤収			■



第1図 宮後・部田野西原遺跡調査区設定図（ひたちなか市地形図2,500分の1より作成）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

宮後遺跡は、茨城県ひたちなか市部田野 2860 番地ほか、部田野西原遺跡は、茨城県ひたちなか市部田野 1576 番地の2ほかに所在している。

ひたちなか市は、茨城県の中央部からやや北東部に位置し、東は太平洋に臨み、北は那珂郡東海村、那珂市、西から南にかけて水戸市、南東は大洗町と接している。

市内には、栃木県那珂岳を源流とし茨城県の中央部を流れ太平洋に注ぐ那珂川や、この支流であり市内をほぼ南北に流れる中丸川・大川・本郷川が存在する。市内の地形は、これらの河川の堆積作用により形成された肥沃な沖積地と、那珂川の浸食作用による河岸段丘、太平洋沿いの砂丘、久慈川と那珂川に挟まれた那珂台地からなっている。

地質は、第三紀層（凝灰岩）の磯崎層・阿字ヶ浦層を基盤としている。その上部は粘土・砂によって形成されており、さらにその上部に第4紀層の見和層、砂礫からなる上市層、灰白色粘土からなる常総粘土層、関東ローム層が堆積している。

当遺跡は、中丸川と本郷川の合流点の北東部、南北に細く延びる台地上に立地しており、調査前の現況は宮後遺跡が畑地と荒蕪地で、部田野西原遺跡は畑地である。

第2節 歴史的環境

ひたちなか市域には、国指定史跡である虎塚古墳、馬渡埴輪製作遺跡（82）、県指定史跡である十五郎穴横穴群（50）を含め、数多くの遺跡が存在している¹¹。ここでは、宮後遺跡・部田野西原遺跡の周辺遺跡について触れていきたい。

旧石器時代の遺跡は、那珂川やその支流周辺の台地上に点在しており、調査事例の増加と共に資料数も増加している。那珂川左岸の三反田上高井遺跡（32）、本郷川左岸の後野遺跡（77）、大川左岸の西原遺跡から石器集中地点が、本郷川左岸の差込遺跡（106）から礫群が、本郷川右岸の向野C遺跡から礫群を伴う石器集中地点が確認されている。特に後野遺跡からは細石刃と船底形細石刃核が出土しており、太平洋沿岸部における北方系細石刃文化の南限として重要な資料となっている。

縄文時代の遺跡は、その多くが三反田丘陵上及び那珂川支流周辺の台地上に立地しており、県内有数の遺跡数を誇っている。全体の傾向としては、草創期の遺跡は少なく、早期以降遺跡数が増加し、後期後半から晩期にかけて激減している。本跡周辺においては、草創期を除く早期から晩期の集落遺跡が存在し、中丸川左岸の館出遺跡からは中期の住居跡、中丸川右岸の大田房貝塚（21）からは晩期の住居跡、三反田観塚貝塚（42）からは前期から後期の住居跡が確認されている。本郷川左岸の差込遺跡からは早期の住居跡、本郷川右岸の君ヶ台遺跡（64）、君ヶ台貝塚（65）、下原遺跡（55）からは中期の住居跡が確認されている。また、那珂川左岸の観塚西貝塚（40）（中期・後期）、三反田観塚貝塚（前期から後期）、道理山貝塚（23）（前期）、中丸川左岸の上ノ内貝塚（9）（中期）、上ノ内北貝塚（中期・後期）、宮前貝塚（7）（後期）、中丸川右岸の大田房貝塚（晩期）、本郷川右岸の君ヶ台貝塚（中期）などの貝塚も多く存在する。このほか、本郷川右岸の西谷津北遺跡（79）

からは今市・七本桜テフラ降灰直前の土坑、西谷津遺跡からは今市・七本桜テフラ降灰以前の陥し穴が確認されている²¹⁾。

弥生時代の遺跡の多くは、那珂川および那珂川の支流により形成された沖積地周辺の台地上に分布しており、県内で最多の遺跡数である。市域では、弥生時代中期前半からの遺跡が存在する。弥生時代全体を通して、中期後半から遺跡数が増加し、後期に入ると大規模な集落が営まれる傾向にある。中期前半の笱式土器は、本郷川左岸の部田野猪Ⅲ遺跡(105)をはじめとして数遺跡から採集されている。部田野猪Ⅲ遺跡に隣接する差込遺跡では、中期後半(足洗式期)の土壘墓群や土器棺墓が確認されており、注目される²²⁾。中丸川左岸の東中根遺跡群に属する大和田遺跡(57)からは、環状の溝に囲まれた堅穴住居跡が確認され、炭化物や多くの土器が出土している²³⁾。これらの土器は、後期前半の土器形式である東中根式土器の標識資料となっている。また、後期前半の住居跡は、同じく東中根遺跡群に属する指浜遺跡(53)、本郷川左岸の鷹ノ巣遺跡(107)からも確認されており、鷹ノ巣遺跡で確認された住居跡からは、57点ものガラス玉が出土している²⁴⁾。本郷川左岸の部田野山崎Ⅰ遺跡(102)では、後期後半(十王台式期)の住居跡が確認されている。

古墳時代前期の集落跡は、主として那珂川流域に形成されている。中期になると、集落跡は次第に本郷川や中丸川などの流域に進出し、さらに後期には面的な広がりを見せながら、集落跡が爆発的に増加している。那珂川左岸の三反田遺跡(39)、本郷川左岸の部田野山崎Ⅰ遺跡、部田野山崎Ⅱ遺跡、鷹ノ巣遺跡からは弥生土器と古墳時代前期の土師器が併存して出土しており、弥生時代から古墳時代への過渡期の様相を示している。那珂川左岸の三反田下高井遺跡は、前期の墓域及び中期から後期にかけての大集落跡で、方形周溝墓4基や中期の鍛冶工房跡5基、中期から後期の粘土採掘坑などが確認されている²⁵⁾。このほか、中丸川左岸の大和田遺跡で前期、本郷川上流の原の寺遺跡で中期、本郷川左岸の部田野山崎Ⅰ遺跡と鷹ノ巣遺跡で前期から後期、部田野山崎Ⅱ遺跡で前期・後期、本郷川右岸の西谷津遺跡では後期の住居跡が確認されている。また、中期から後期にかけてみられる集落の増加と、それに伴う生産基盤の拡大を背景として、市域には多くの古墳が築造されている。宮後遺跡・部田野西原跡の周辺には、那珂川左岸の三反田古墳群(34)、高井古墳群(36)、道理山古墳群(22)、中丸川左岸の笠谷古墳群(51)、部田野古墳群(13)、中丸川右岸の飯塚前古墳、宮前古墳群(31)、寺前前後円墳、本郷川右岸の鹿塚古墳群、本郷川左岸の馬渡古墳群(94)などがある。また、本郷川左岸には馬渡埴輪製作遺跡があり、5世紀後半から6世紀代の古墳に埴輪を供給していたことが分かっている。

律令期には、一部新川水系を除き、市域の大半が古代の那賀郡に属していた。那賀郡は22の郷に分かれており、宮後遺跡・部田野西原遺跡が所在する部田野地区は幡田郷に比定されている。奈良・平安時代の遺跡は那珂川水系に多く分布し、鉄器の普及に伴い新川水系にも集落が展開している。中丸川左岸の東中根遺跡群では8～10世紀の住居跡と版築状遺構が確認されている²⁷⁾。那珂川左岸の三反田下高井遺跡では8～10世紀の住居跡が確認され、円面硯、風字硯、緑釉陶器、緑釉緑彩文陶器、灰釉陶器、帯金具などが出土している²⁸⁾。本郷川左岸の鷹ノ巣遺跡では、奈良・平安時代の住居跡が確認され、奈良時代の住居跡からは「山田文マ子夜見」の宛書がある文字瓦が出土している²⁹⁾。このほか、本郷川左岸の山崎Ⅰ遺跡で8世紀末から9世紀初頭の住居跡、本郷川左岸の馬渡遺跡(86)で平安時代の住居跡が確認されている。生産遺跡としては、本郷川上流の原の寺瓦窯跡、本郷川右岸の後谷津遺跡(87)がある。原の寺瓦窯跡では、登窯、工房跡、粘土堆積遺構等が確認され、水戸市台渡庵寺等に瓦を供給していたことが分かっている。後谷津遺跡は長方形箱形埴を用いた製鉄遺跡で、福島県例から7世紀後半から8世紀前半頃に位置付けられている³⁰⁾。墓域としては、中丸川左岸の新堤横穴群(17)、本郷川右岸周辺の十五郎穴横穴群、中丸川左岸の部田野横穴群(10)がある。十五郎横穴群は、4つの支群からなり、その総数は300基を超えるものと考えられている。部田野横穴群は、宮後・

部田野西原遺跡の南方斜面地に存在したが、現在では消滅しており、詳細は不明である。

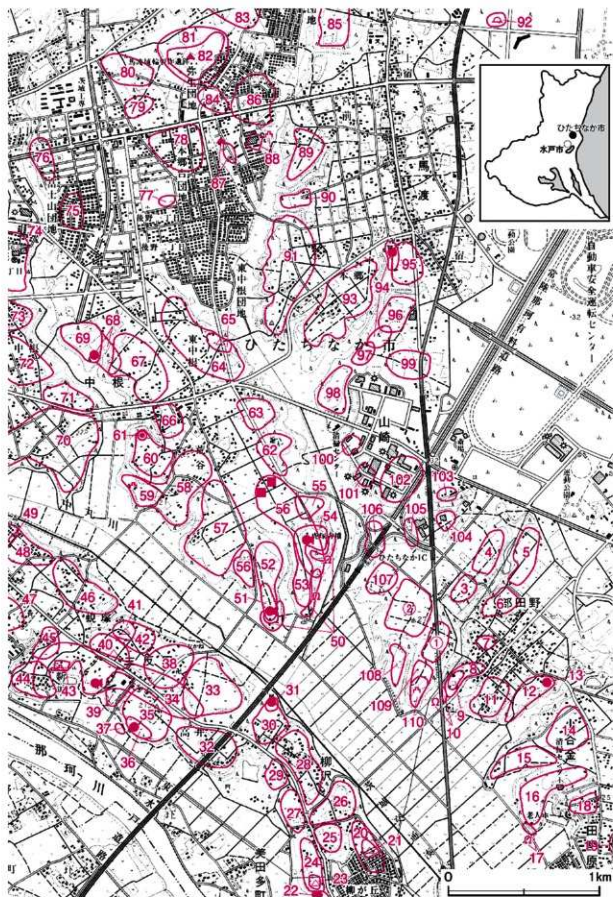
中世の遺跡は数少ないが、那珂川左岸の新平館跡（43）、中丸川左岸の中根城跡（59）、本郷川右岸の大山館跡（88）、本郷川左岸の尾ヶ谷館跡（110）が城館跡として知られており、いずれも台地の突端部に位置している。

註

- 1) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 色川順子はか『向野遺跡群』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2007年1月
- 3) 櫻村直行「一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 差込遺跡」『茨城県教育財団調査報告』第103集 1995年9月
- 4) ひたちなか市遺跡調査会「東中根遺跡群発掘調査報告書」2002年3月
- 5) 鈴木素行はか『鷹ノ巣遺跡-第2次調査の報告-』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2008年3月
- 6) 田所剛夫はか「一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 三反田下高井遺跡」『茨城県教育財団調査報告』第128集 1998年3月
- 7) 註4)に同じ
- 8) 註6)に同じ
- 9) 註5)に同じ
- 10) ひたちなか市教育委員会「後谷津製鉄遺跡-第2次調査報告書-」1996年3月

参考文献

- 井上義安はか『那珂湊市遺跡分布調査報告書』那珂湊市教育委員会 1976年10月
勝田市教育委員会『後野遺跡』1976年12月
勝田市史編纂委員会『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』1979年12月
勝田市史編纂委員会『勝田市史 原始・古代編』1981年9月
勝田市教育委員会『君ヶ台遺跡調査報告書』1980年3月
勝田市教育委員会『指込遺跡群発掘調査報告書』1990年3月
勝田市教育委員会『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』1992年3月
鈴木素行『久慈川・那珂川流域の貝塚-藤本弥城先史資料整理調査報告書Ⅷ-』財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 1994年3月
宮崎修士『常陸那珂右科道路事業地内埋蔵文化財調査報告書 山崎遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告第105集』1995年9月
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター「ひたちなかの文化財」2004年3月
ひたちなか市遺跡調査会「-1999年度 道路拡幅工事に伴う発掘調査概要-三反田観塚貝塚」2000年3月
茨城県考古学協会『茨城の考古学散歩』2010年5月



第2図 宮後遺跡・部田野西原遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院25,000分の1「ひたちなか」）

表1 宮後・部田野西原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
①	宮後遺跡		○	○	○	○		29	鍛冶屋遺跡					○	○	
②	部田野西原遺跡	○				○		30	坂ノ上遺跡			○	○			
3	石沢遺跡		○		○	○		31	宮前古墳群				○			
4	北西原遺跡		○		○	○		32	三反田下高井遺跡	○		○	○			
5	西浦見遺跡		○		○	○		33	柳沢原山遺跡	○	○	○	○			
6	中浦見遺跡		○		○			34	三反田古墳群				○			
7	宮前貝塚		○					35	上高井遺跡				○	○		
8	上ノ内遺跡		○		○	○		36	高井古墳群				○			
9	上ノ内貝塚		○					37	三反田上河原遺跡		○					
10	部田野横穴群					○		38	天王前遺跡				○	○		
11	部田野西富士山遺跡		○	○	○	○		39	三反田遺跡	○		○				
12	部田野富士山遺跡		○	○	○	○		40	蜆塚西貝塚	○						
13	部田野古墳群				○			41	三反田蜆塚遺跡			○	○	○		
14	小谷金東遺跡		○	○	○	○		42	三反田蜆塚貝塚	○						
15	小谷金遺跡		○	○	○			43	新平館跡						○	
16	新堤遺跡		○	○				44	新平遺跡			○	○	○	○	
17	新堤横穴群					○		45	飯塚前遺跡			○				
18	田宮原Ⅰ遺跡		○	○				46	給遺跡			○	○	○		
19	田宮原Ⅱ遺跡		○	○				47	内手遺跡				○	○		
20	柳沢十二所遺跡		○	○	○			48	三反田新堀遺跡		○	○	○			
21	大田房貝塚		○					49	新堀堀跡						○	
22	道理山古墳群				○			50	十五郎穴横穴群				○	○		
23	道理山貝塚		○					51	笠谷古墳群				○			
24	道理山遺跡	○	○	○	○			52	館出遺跡	○	○	○	○			
25	寺脇遺跡		○	○	○			53	指洪遺跡	○	○	○	○			
26	御所内Ⅰ遺跡			○	○			54	虎塚古墳群				○			
27	御所内Ⅱ遺跡			○	○	○		55	下原遺跡	○						
28	前方遺跡			○	○			56	笠谷遺跡	○	○					

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
57	大和田遺跡		○	○	○	○		84	向野B遺跡	○	○					
58	東中根清水遺跡				○	○		85	馬渡上宿西遺跡				○	○		
59	中根城跡						○	86	馬渡遺跡	○						
60	東中根堂山遺跡			○				87	後谷津遺跡					○		
61	福島藩士の墓						○	88	大山館跡						○	
62	北谷遺跡			○	○	○		89	馬渡中宿西遺跡		○	○	○			
63	中根北谷北遺跡		○	○	○	○		90	馬渡下宿西遺跡				○			
64	君ヶ台遺跡	○	○	○	○	○		91	本郷西遺跡		○	○	○			
65	君ヶ台貝塚		○					92	大沼経塚						○	
66	野沢前遺跡			○				93	本郷東遺跡		○	○	○			
67	石光遺跡		○		○	○		94	馬渡古墳群				○			
68	中根中区古墳群					○		95	西下宿南遺跡				○	○		
69	中根中区遺跡					○		96	前原C遺跡				○	○		
70	西中根遺跡		○					97	前原B遺跡			○	○	○		
71	宮前遺跡				○	○		98	前原A遺跡	○	○					
72	柴田遺跡		○					99	西並木下遺跡	○		○	○			
73	枯松戸遺跡				○	○		100	山崎遺跡	○						
74	中根塙遺跡				○	○		101	部田野山崎II遺跡	○	○					
75	中根富士山遺跡		○					102	部田野山崎I遺跡	○	○	○	○			
76	深谷津遺跡		○					103	部田野猪II遺跡	○	○					
77	後野遺跡	○						104	部田野猪I遺跡	○						
78	西谷津遺跡		○		○	○		105	部田野猪III遺跡	○	○					
79	西谷津北遺跡		○		○	○		106	差洪遺跡	○	○					
80	向野E遺跡		○		○	○		107	鷹ノ巣遺跡	○	○	○	○			
81	向野A遺跡		○					108	釜神上遺跡			○	○			
82	馬渡埴輪製作遺跡				○			109	尼ヶ柵遺跡	○	○	○				
83	向野D遺跡		○		○	○		110	尼ヶ柵館跡						○	

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴1基、土坑1基を確認した。以下、遺構について記述する。

(1) 陥し穴

第1号陥し穴（第4図）

位置 調査区中央部のI2h4区、標高265mの台地緩斜面部に位置している。

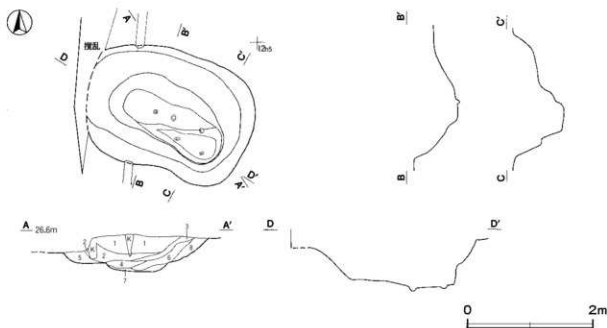
規模と形状 西部が調査区域外に延びているため、短径は1.97mで、長径は2.71mしか確認できなかった。平面形は楕円形で、長径方向はN-67°-Wである。深さは73cmで、短径・長径方向ともに壁は外傾して立ち上がり、短径方向の断面形は漏斗状を呈している。底面はほぼ平坦で、南東部が12cmほどくぼんでいる。逆茂木の跡と想定されるピット5か所を確認した。

覆土 8層に分層できる。第1層は、均質な粒子が堆積していることから自然堆積である。第2～8層は、ブロック状の堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 褐色	白色粒子多量、黄褐色粒子中量、ローム粒子・赤色粒子少量	5 明褐色	ローム粒子中量、赤色粒子・黄褐色粒子少量、白色粒子微量
2 黄褐色	黄褐色粒子・白色粒子中量、ローム粒子・赤色粒子少量	6 明褐色	赤色粒子中量、ローム粒子・黄褐色粒子・白色粒子少量
3 明褐色	赤色粒子・黄褐色粒子・白色粒子中量、ローム粒子少量	7 褐色	ローム粒子多量、赤色粒子・黄褐色粒子・白色粒子微量
4 明褐色	黄褐色粒子中量、ローム粒子・赤色粒子・白色粒子少量	8 明褐色	ローム粒子中量、赤色粒子少量、黄褐色粒子・白色粒子微量

所見 遺物は出土していないが、埋め戻しの土に今市・七本桜軽石粒子と考えられる赤色粒子、黄褐色粒子、白色粒子が含まれていることや、それらを含む層が自然堆積していることから、今市・七本桜テフラの降灰後間もない時期に埋没したものと推定され、縄文時代草創期と考えられる。



第4図 第1号陥し穴実測図

(2) 土坑

第17号土坑 (第5図)

位置 調査区北部のH24区、標高269mの台地緩斜面部に位置している。

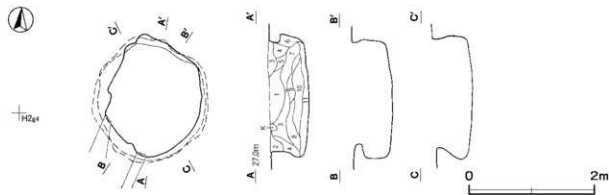
規模と形状 開口部は長径2.00m、短径1.64mの楕円形で、長径方向はN-2°-Wである。深さは64cmで、底面はほぼ平坦であり、壁は内彎して立ち上がっている。

覆土 11層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

1	黒色	ローム粒子少量、焼土粒子・白色粒子微量	7	黒色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8	黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
3	褐色	焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量	9	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	10	褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量
5	黒色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	11	褐色	ローム粒子多量
6	褐色	ロームブロック多量、白色粒子微量			

所見 フラスコ状土坑である。時期は、遺構の形状から縄文時代中期と考えられるが、遺物が出土していないため、詳細は不明である。



第5図 第17号土坑実測図

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡1軒を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

堅穴住居跡

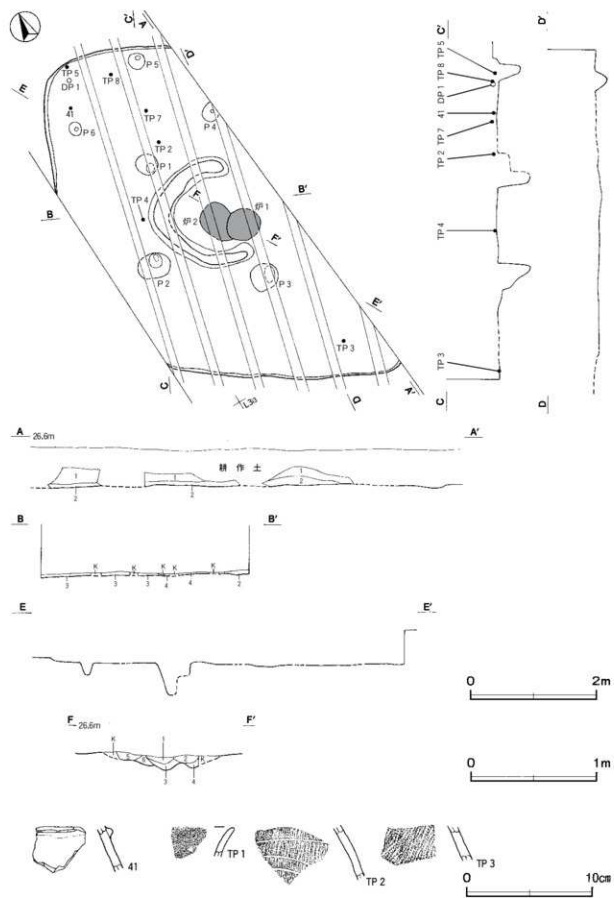
第12号住居跡 (第6・7図)

位置 調査区南部のL3h3区、標高26.2mの台地緩斜面部に位置している。

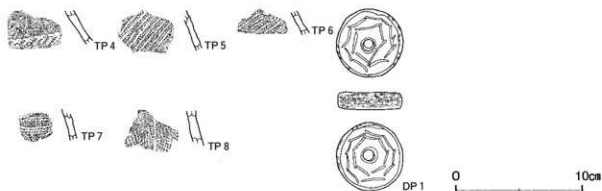
規模と形状 長軸5.60m、短軸5.10mほどの隅丸長方形で、長軸方向はN-59°-Wと推定される。壁高は4cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。炉1・炉2を取り囲む馬蹄形の高まりが確認できた。

炉 2か所。炉1は中央部に位置し、長径58cm、短径51cmの円形で、床面より10cmほどくぼんだ地床炉である。炉2は中央部、炉1の北西部に位置し、南東部が炉1と重複している。長径66cm、短径49cmの楕円形で、床面より4cmほどくぼんだ地床炉である。炉1・炉2ともに炉床は赤変硬化している。第1～4層は炉1、第5～6層は炉2の掘方への埋土である。土層の切り合い関係から、炉1は炉2を掘り込んで構築されたと考えられる。



第6图 第12号住居跡・出土遺物実測図



第7図 第12号住居跡出土遺物実測図

伊土層解説

- | | |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1 黒色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 2 明赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック少量 | 5 明赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量 |
| 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量 | 6 にぶい赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量 |

ピット 6か所。P 1～P 3は深さ49～53cmで、規模と配置から主柱穴である。P 4～P 6は深さ20～33cmで、性格不明である。

覆土 4層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 黒色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 弥生土器片13点(壺)、土製品1点(紡錘車)、石器1点(剥片)、瑪瑙石片1点(29g)が出土している。また、混入した縄文土器片2点(深鉢)も出土している。TP 4は南部の床面、TP 3は東部、41・TP 2・TP 5・TP 7・TP 8・DP 1は北西部の覆土下層から出土している。TP 1・TP 6は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代中期後半(足洗式期)と考えられるが、土器の多くが細片のため、詳細は不明である。

第12号住居跡出土遺物観察表(第6・7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
41	弥生土器	壺	-	(48)	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	頸部に突帯		覆土下層	20%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴	備考	出土位置	備考
TP 1	弥生土器	壺	長石・石英・赤色粒子	褐色	2本同時施文具による沈線文 □首部縄文施文		覆土中	PL15
TP 2	弥生土器	壺	長石・石英・針状鉱物	にぶい褐色	附加条1種縄文施文後、1本沈線による渦巻文		覆土下層	PL15
TP 3	弥生土器	壺	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	附加条1種縄文		覆土下層	PL15
TP 4	弥生土器	壺	長石・石英・針状鉱物	にぶい赤褐色	附加条1種縄文 上位無文		床面	PL15
TP 5	弥生土器	壺	長石・石英・細礫	明赤褐色	附加条1種縄文		覆土下層	PL15
TP 6	弥生土器	壺	長石・石英・針状鉱物	にぶい褐色	附加条1種縄文		覆土中	PL15
TP 7	弥生土器	壺	長石・石英・細礫	赤褐色	踏点文		覆土下層	PL15
TP 8	弥生土器	壺	長石・石英・針状鉱物・赤色粒子	褐色	附加条1種縄文		覆土下層	PL15

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 1	紡錘車	5.3	1.4	0.9	46.4	長石・石英	表・裏面漆黒文 頸部刻文	覆土下層	PL17

3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡5軒を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

堅穴住居跡

第2号住居跡（第8～10区）

位置 調査区南部のL2区6区、標高26.0mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、南北軸は8.20mで、東西軸は4.04mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は44～50cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、壁際を除く部分が踏み固められている。貼床は、不定形に掘りくぼめた部分にロームブロック・黒色土ブロックを含む褐色土を埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っており、間仕切り溝が北西部に1条（a）、南西コーナー部に2条（f・g）確認できた。また、西壁下には間仕切り溝に挟まれるように根太を設置した溝が4条（b・c・d・e）確認できた。間仕切り溝の深さは14～15cm、根太を設置した溝の深さは10～18cmである。

竈 北壁に付設されている。東部が調査区域外に延びているため、焚口部から煙道部までは144cmで、燃焼部幅は46cmしか確認できなかった。袖部は、黄褐色粘土ブロック・炭化物・白色砂粒を含む第11～13層を積み上げて構築されている。火床部は床面より19cmほどくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に10cm掘り込まれ、火床部から緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土層解説

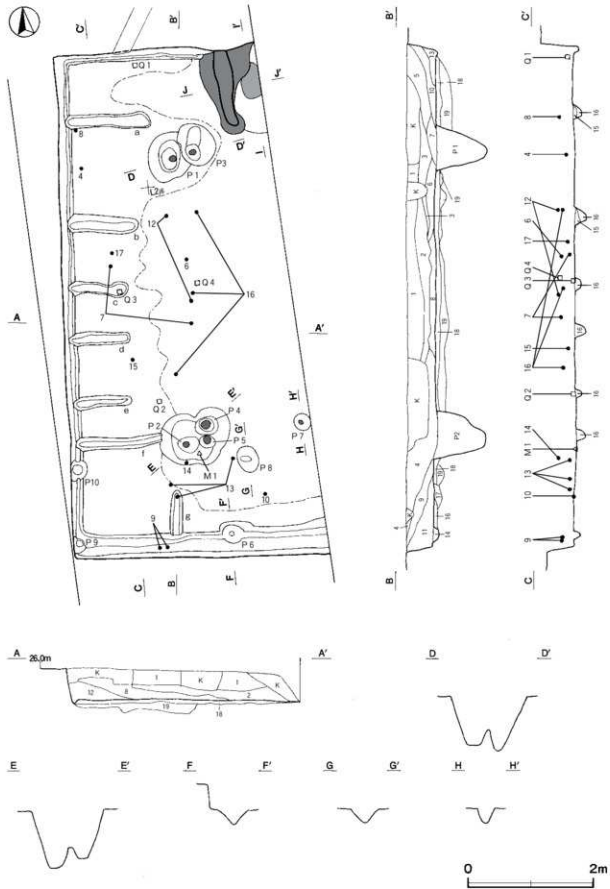
1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、黄褐色粘土粒子微量	7 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量、黄褐色粘土粒子微量
2 黒褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・黄褐色粘土ブロック・炭化物少量	8 暗褐色	焼土ブロック多量、炭化物中量、ロームブロック少量、黄褐色粘土粒子微量
3 黒褐色	黄褐色粘土ブロック多量、白色砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9 黒褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子・黄褐色粘土粒子少量、ローム粒子微量	10 濃い黄褐色	焼土ブロック多量
5 黒褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・黄褐色粘土ブロック・炭化物微量	11 黒褐色	白色砂粒中量、黄褐色粘土ブロック少量、炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
6 赤褐色	焼土ブロック多量、白色砂粒微量	12 黒褐色	黄褐色粘土ブロック少量、焼土ブロック・白色砂粒微量
		13 濃い黄褐色	黄褐色粘土ブロック多量、白色砂粒中量

ピット 10か所。P1～P5は深さ80～90cmで、規模と配置から主柱穴である。P1・P3及びP2・P4・P5は、それぞれ立て替えが想定されるが、新旧関係は確認できなかった。P6は深さ27cmで、主柱穴との位置関係や硬化面の範囲から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7～P10は深さ20～26cmで、性格不明である。

覆土 14層に分層できる。第1・2層は、均質な粒子が堆積していることから、自然堆積である。第3～14層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。第15・16層は根太を取り去った後の覆土である。第17層は根太設置時の埋土である。第18・19層は、貼床の構築土である。

土層解説

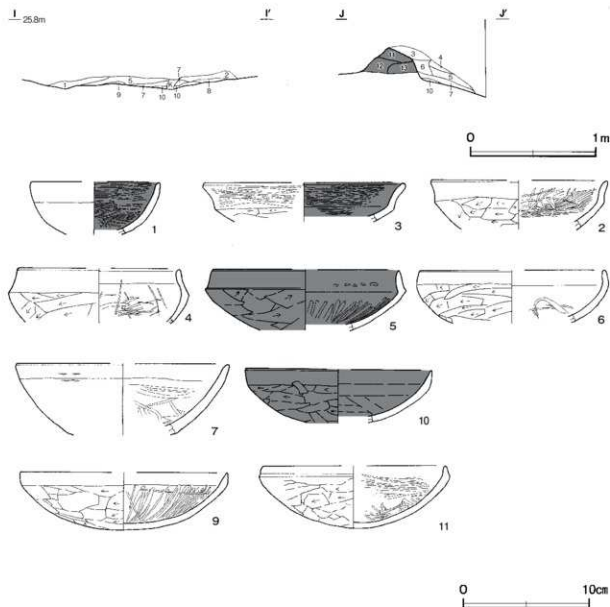
1 黒色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量、黄褐色粘土ブロック微量
2 黒色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	11 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、黄褐色粘土ブロック微量	12 黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
4 黒色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	13 黒褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量、黄褐色粘土ブロック微量	14 褐色	ロームブロック中量
6 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック・黄褐色粘土粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック少量
7 黒褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量、黄褐色粘土粒子微量	16 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
8 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	17 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
9 黒色	ロームブロック微量	18 黒褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量
		19 褐色	ロームブロック中量、黒色土少量



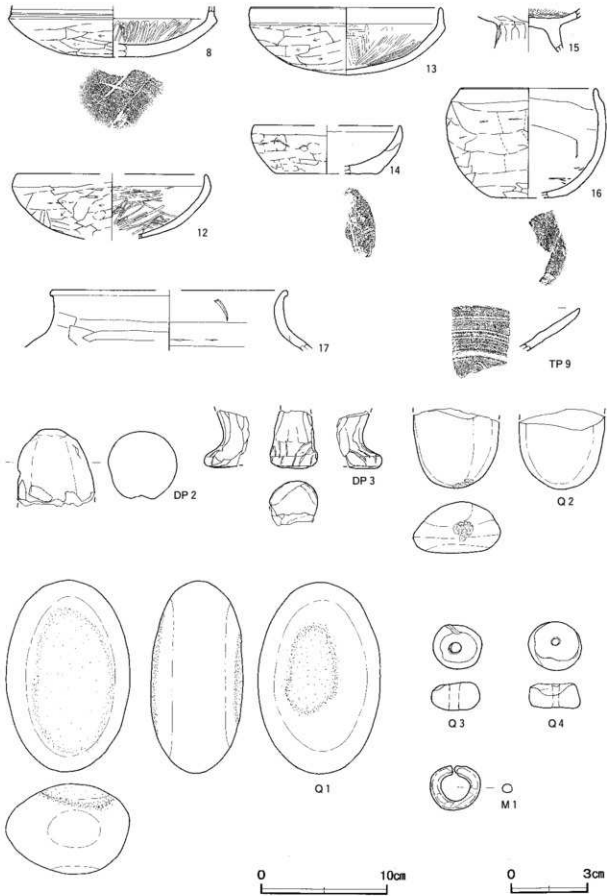
第8図 第2号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 2709 点 (坏 328、高坏 1、鉢 1、甕 2,378、手握土器 1)、器種不明須恵器片 1 点、土製品 3 点 (支脚 2、不明 1)、石器 2 点 (磨石、敲石)、石製品 2 点 (白玉)、鉄製品 2 点 (耳環、不明)、焼成粘土塊 3 点が、覆土中層から下層を中心に散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器片 149 点 (深鉢)、弥生土器 83 点 (壺) も出土している。DP 2 は P 2 の覆土中から出土している。M 1 は P 5 の上面から出土している。10 は南部の床面と覆土中層から出土した破片が接合したものである。15・17・Q 3 は西部、Q 2 は南西部、4・Q 1 は北西部の覆土下層から出土している。13 は南部・南西部の覆土下層と壺の覆土中から出土した破片が接合したもので、破砕の後に分けて投棄されたものと考えられる。7 は西部の覆土下層、16 は中央部・北部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。6・Q 4 は中央部、9・14 は南西部、8 は北西部の覆土中層から出土している。12 は西部と北西部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。1・2・3・5・11・DP 3・TP 9 は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から 6 世紀後葉に比定できる。



第9図 第2号住居跡・出土遺物実測図



第10図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第9・10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	杯	[30.4]	(42)	-	長石・石英・ 針状鉱物	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラミギキ 口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 外面黒色処理	覆土中	5%
2	土師器	杯	[14.0]	(39)	-	長石・石英・ 繊維・黑色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ 口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 外面黒色処理(漆)が残る	覆土中	5%
3	土師器	杯	[15.8]	(31)	-	長石・石英・ 針状鉱物・黑色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ 口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 外面黒色処理(漆)が残る	覆土中	5% PL.9
4	土師器	杯	[12.8]	(4.4)	-	長石・石英・ 繊維	褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土下層	10%
5	土師器	杯	[15.0]	(49)	-	長石・石英・ 針状鉱物・外部黒色粒子	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ 口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 外面黒色処理(漆)	覆土中	20%
6	土師器	杯	[14.6]	(42)	-	長石・石英・ 針状鉱物・外部黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土中層	10%
7	土師器	杯	[17.0]	(57)	-	長石・石英・ 針状鉱物	褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラミギキ 外面横ナデ	覆土下層	10%
8	土師器	杯	-	(41)	-	長石・石英・ 針状鉱物	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土中層	30%
9	土師器	杯	[16.6]	46	-	長石・石英・ 針状鉱物	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土中層	40% PL.9
10	土師器	杯	[14.4]	(42)	-	長石・石英・ 針状鉱物・外部黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土中層	35% PL.8
11	土師器	杯	[14.5]	50	-	長石・石英・ 針状鉱物・外部黒色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土中層	20%
12	土師器	杯	[15.0]	(52)	-	長石・石英・ 針状鉱物	褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土中層	20% PL.8
13	土師器	杯	[15.2]	54	-	長石・石英・ 針状鉱物	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土中層	15% PL.9
14	土師器	杯	[11.7]	39	[8.0]	長石・石英・繊維	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土下層・ 覆土中層	95% PL.9
15	土師器	高杯	-	(35)	-	長石・石英・ 針状鉱物・外部黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ	覆土下層	5%
16	土師器	鉢	30.6	8.8	[6.2]	長石・石英・ 針状鉱物・外部黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ 内面ヘラミギキ 工具痕	覆土中層	60% PL.9
17	土師器	甕	[18.6]	(48)	-	長石・石英・ 針状鉱物・外部黒色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面横ナデ	覆土下層	20%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP.9	原形器	不明	長石・黒色粒子	褐色	種南状工具による沈降・流状文	覆土中	PL15

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP.2	支脚	3.5	6.2	(6.2)	(200)	長石・石英	ナデ調整	P.2覆土中	

番号	器種	高さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP.3	脚盤*	(4.6)	3.8	(3.6)	44.9	長石・石英・繊維	ヘラケズリ残ナデ 下位に複数の沈降	覆土中	PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q.1	磨石	15.2	9.8	7.1	1510	砂岩	両面に磨面	覆土下層	PL18
Q.2	磨石	(6.4)	6.9	4.1	(217)	砂岩	敲打痕1か所	覆土下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q.3	白瓦	$\frac{1.3}{1.4}$	0.8	0.3	2.5	滑石	全面研磨 双方方向の穿孔	覆土下層	PL18
Q.4	白瓦	$\frac{1.4}{1.5}$	0.7	0.2	2.3	滑石	全面研磨 双方方向の穿孔	覆土中層	PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M.1	耳環	1.8	1.8	0.47	5.2	鈎	表面研磨	P.5上面	PL19

第3号住居跡(第11～16図)

位置 調査区南部のL.2d5区、標高26.0mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、南北軸は6.61mで、東西軸は4.77mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は15～27cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、西部を除いて踏み固められている。貼床は、不定形に掘りくぼめた部分にロームブロックや黒色土ブロックを含む暗褐色土・黒色土・褐色土を埋土して構築されている。壁下には隙溝が巡っており、西壁下に根太を設置した溝が5条確認できた。根太を設置した溝の深さは、13～19cmである。

竈 2か所。竈1は北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで132cmで、燃焼部幅は50cmである。袖部は、焼土ブロック・明褐色砂質粘土ブロックを含む第24・25層、黄褐色砂質粘土ブロックを含む第26層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に38cm掘り込まれ、火床部から外挿して立ち上がっている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変硬化している。第27～32層は火床部及び煙道部の構築土である。火床部の構築土からは切石が出土しており、補強材として使用されたものと考えられる。竈2は竈1の1.2mほど東部に位置し、火床部や袖部は遺存しておらず、焼土ブロック・炭化物・黄褐色粘土ブロック等を含む土によって埋め戻されていた。廃絶時期については不明であるが、竈1の遺存状態と竈2が取り壊された後に埋め戻されていたことを考慮すると、竈2は竈1構築以前のものである可能性が高い。

竈1土層解説

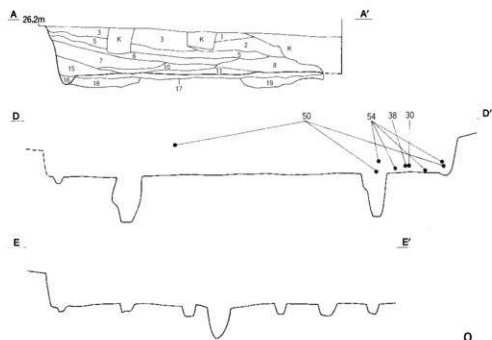
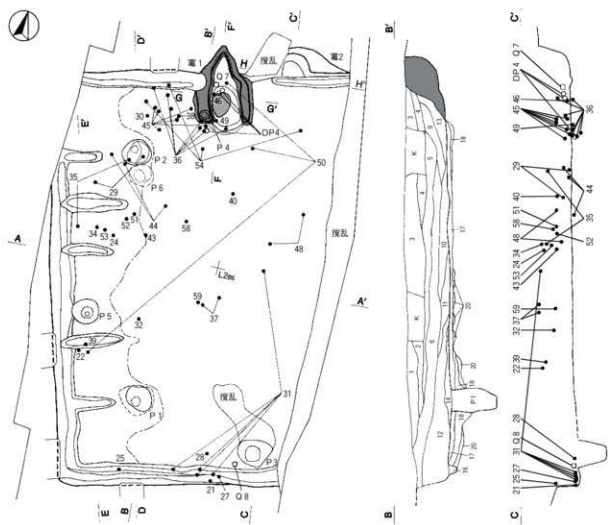
1 赤褐色	焼土ブロック多量	16 赤褐色	焼土ブロック多量
2 黒色	黄褐色砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	17 極暗褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子・黄褐色砂質土粒子微量
3 黒褐色	黄褐色砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量	18 黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
4 黒色	焼土ブロック中量、黄褐色砂質粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	19 近い暗褐色	焼土ブロック・黄褐色砂質粘土ブロック多量、炭化粒子微量
5 黒褐色	黄褐色砂質粘土ブロック・炭化物少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	20 暗赤褐色	焼土粒子多量、黄褐色砂質土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
6 黒褐色	炭化材中量、焼土ブロック・ローム粒子少量	21 暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、明褐色砂質粘土ブロック微量
7 黒褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、黄褐色砂質粘土ブロック・ローム粒子微量	22 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、黒色土ブロック微量
8 褐色	黄褐色砂質土粒子多量	23 褐色	黄褐色砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
9 黒褐色	炭化物中量、焼土ブロック・黄褐色砂質粘土ブロック少量、ロームブロック微量	24 明褐色	明褐色砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック微量
10 褐色	黄褐色砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量	25 明赤褐色	焼土ブロック多量、明褐色砂質粘土ブロック少量
11 極暗褐色	焼土ブロック中量、黄褐色砂質粘土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量	26 黄褐色	黄褐色砂質土土ブロック多量
12 明褐色	明褐色砂質土粒多量、焼土ブロック・炭化粒子微量	27 極暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化物中量、ローム粒子・黄褐色砂質土粒子微量
13 黒褐色	焼土ブロック少量、黄褐色砂質粘土ブロック・炭化物・ローム粒子微量	28 暗褐色	黄褐色砂質土粒子多量、焼土粒子中量、黄白色粘土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
14 褐色	黄褐色砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量	29 赤褐色	焼土ブロック多量
15 暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量、ローム粒子・黄褐色砂質土粒子微量	30 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子微量
		31 黒褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック微量
		32 黒褐色	黒色土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量

竈2土層解説

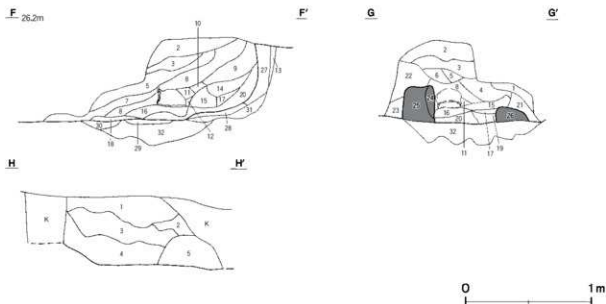
1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、黄褐色粘土ブロック・炭化物微量	4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・黄褐色砂質粘土ブロック・炭化物少量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	5 黒色	炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・黄褐色粘土粒子微量
3 黒色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量		

ピット 6か所。P1・P2は深さ73cmで、規模と配置から主柱穴である。P3は深さ44cmで、主柱穴との位置関係から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4は竈の焚口付近に位置していることから、竈の補強材を埋置した痕跡と考えられるが、詳細は不明である。P5は深さ50cmで、性格不明である。P6は床下から確認しており、性格不明である。

覆土 16層に分層できる。第1～16層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されており、中央部の覆土中から、多量の焼土と炭化材を確認した。第17～20層は貼床の構築土である。第18～20層上面には平坦面が築かれている。



第 11 图 第 3 号住居跡実測图 (1)

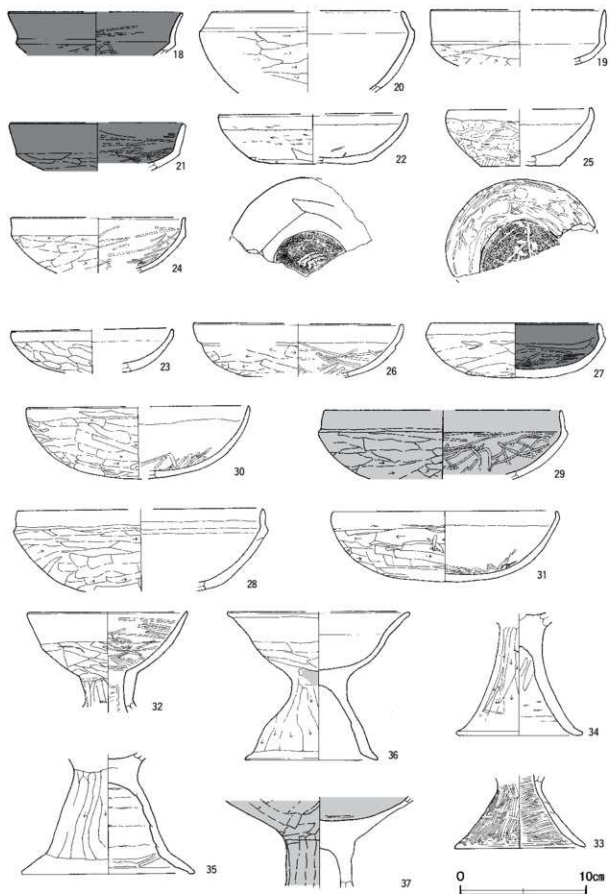


第12図 第3号住居跡実測図(2)

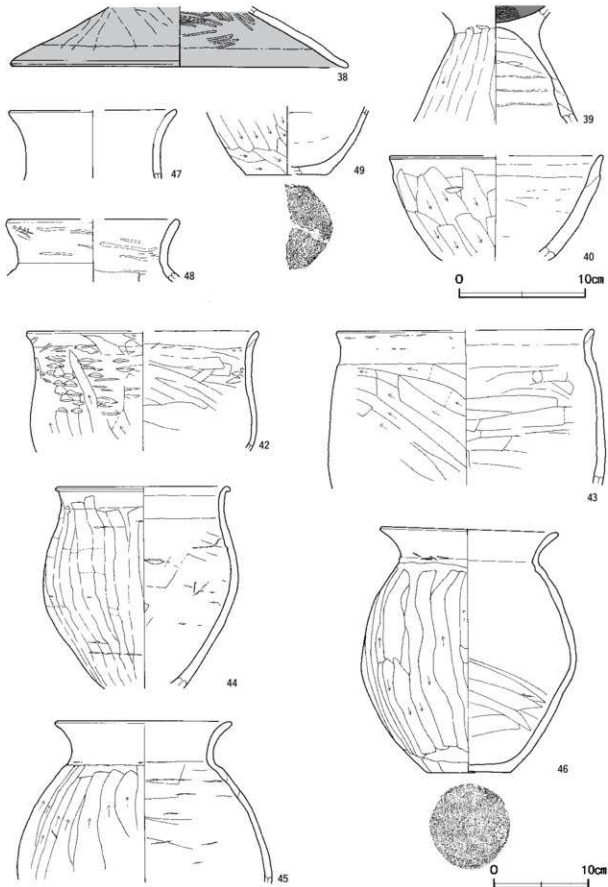
土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|--------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 11 黒色 | ロームブロック・炭化材少量 |
| 2 黒色 | ロームブロック少量・焼土ブロック・炭化物微量 | 12 黒褐色 | ローム粒子少量・炭化物・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 細礫中量・焼土ブロック・炭化物少量 | 13 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化材・黄褐色砂質土ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 14 黒褐色 | ロームブロック少量・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・細礫中量・炭化物少量 | 15 黒色 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 黒色 | ローム粒子少量・炭化物・焼土粒子微量 | 16 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 17 暗褐色 | ロームブロック・黒土ブロック中量 |
| 8 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量・焼土粒子微量 | 18 黒褐色 | ロームブロック多量 |
| 9 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量・炭化物微量 | 19 黒褐色 | ロームブロック極多量・焼土ブロック多量 |
| 10 黒色 | ロームブロック・焼土ブロック少量・炭化物微量 | 20 褐色 | ロームブロック多量 |

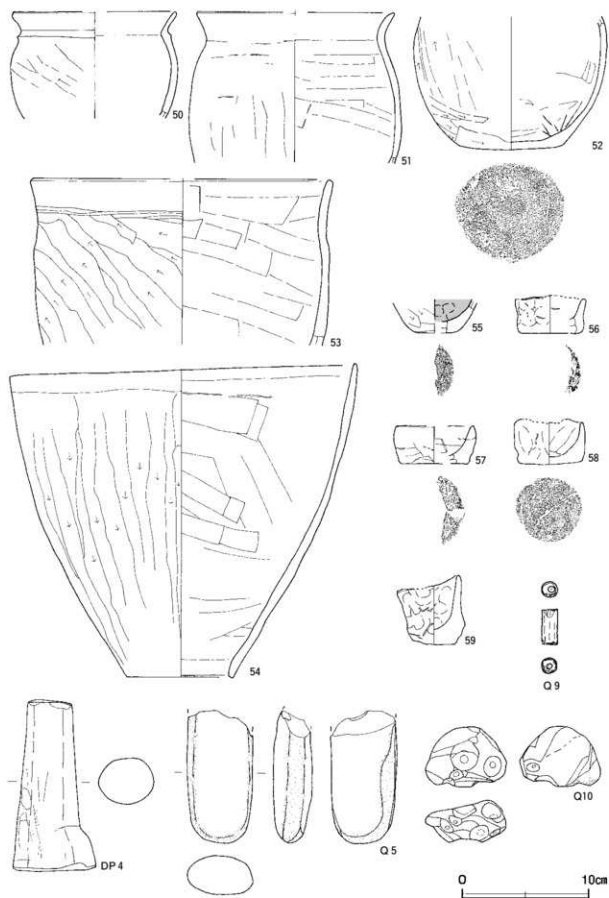
遺物出土状況 土師器片6,586点(坏360, 高坏90, 器台1, 鉢1, 甕6,088, 甗31, 小形甕7, 手捏土器5, 器種不明3), 土製品1点(支脚), 石器4点(磨石), 石製品2点(管玉, 不明), 焼成粘土塊14点が, 覆土中層から床面にかけて北半部と出入り口付近を中心に出土している。また, 混入した縄文土器片24点(深鉢), 弥生土器片153点(甕)も出土している。49は竈火床部の構築土中から出土しており, 36は貼床の構築土中と竈火床部の構築土中から出土した破片が接合したものである。これらは, 竈や貼床の補強材として使用された可能性がある。54・DP4は竈周辺の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。50は北部の床面・竈の覆土下層・西部の覆土上層から出土した破片が接合したもので, 破片同士が最大4.4mの距離を置いて出土しており, 破砕の後に分けて投棄された可能性がある。44は北西部の床面から出土した破片が接合したものである。46・Q7は竈, 38は北部, 21・27・28・Q8は南部の覆土下層から出土している。31は南部, 29は北西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。48は中央部と東部, 45は北部と北西部の覆土中層から下層にかけて出土した破片が接合したものである。58・59は中央部, 40は北部, 25は南西部, 32・43・51・52・53は西部, 30は北西部の覆土中層から出土している。37は中央部, 22・24・34・39は西部の覆土上層から出土している。35は北西部と西部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。20は竈の覆土中, 18・19・23・26・33・42・47・55・56・57・Q5・Q6・Q9・Q10は覆土中から, それぞれ出土している。



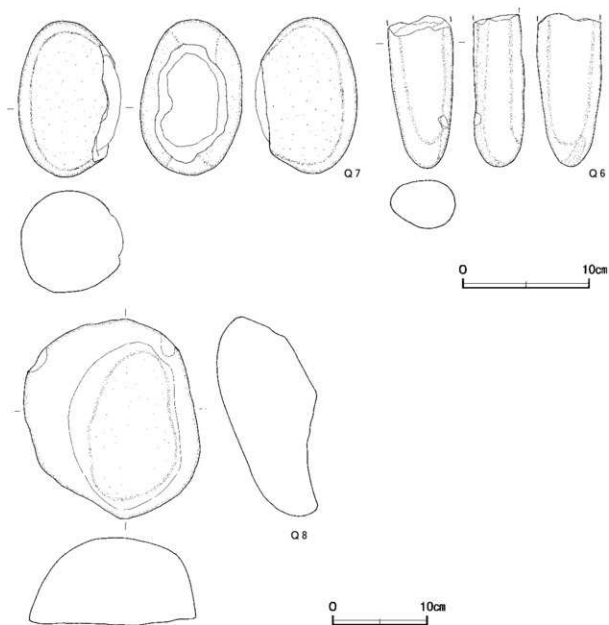
第13图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)



第 15 图 第 3 号住居跡出土遺物実測図 (3)



第16図 第3号住居跡出土遺物実測図(4)

所見 中央部の覆土中から、多量の焼土と部材の一部と考えられる炭化材が確認できたことから、廃絶に伴い部材を焼却し、それらを埋め戻した可能性がある。また、床下に平坦面が築かれていることから、床面の貼り替えが行われた可能性がある。時期は、出土土器から6世紀後葉に比定できる。

第3号住居跡出土遺物観察表(第13～16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
18	土器	杯	[14.0]	(3.5)	-	長石・石英・ 針状鉱物	灰黄陶	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ後、ナ デ 体部内面ヘラミガキ 外・内面黒色色澤(漆)	覆土中	5%
19	土器	杯	[13.9]	(4.5)	-	長石・石英・細礫	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ後、 ナデ	覆土中	20%
20	土器	杯	[15.4]	(6.5)	-	長石・石英・細礫	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ 縦貫後の2次焼成跡	覆土中	15%
21	土器	杯	[14.0]	(3.8)	-	長石・石英・ 赤色粘土	黒褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ後、ナ デ 体部内面ヘラミガキ 外・内面黒色色澤(漆)	覆土下層	10%
22	土器	杯	[15.0]	4.0	[5.8]	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ 内面ニ具眼 底面下部に黒質した厚膜・ヘラケズリ	覆土上層	25%
23	土器	杯	[13.0]	(3.4)	-	長石・石英・ 細礫・赤色粘土	褐灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ	覆土中	10%
24	土器	杯	[14.0]	(4.4)	-	長石・石英・砂礫	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ後、 ナデ 内面ヘラミガキ	覆土上層	20% PL. 8

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
25	土師器	杯	[11.4]	4.5	[6.4]	長石・石英・ 針状炭素・繊維 赤色砂子・針状炭素	ぶいね	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面指頭痕・ヘラミダシ	覆土中層	40% PL. 8
26	土師器	杯	[16.8]	(4.3)	-	長石・石英・ 赤色砂子・針状炭素	ぶいね	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ 体部内面ヘラミダシ	覆土中	30% PL. 9
27	土師器	杯	13.4	4.4	-	長石・石英	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ 体部内面ヘラミダシ	覆土下層	85% PL. 8
28	土師器	杯	[19.7]	(6.5)	-	長石・石英・繊維 赤色砂子・針状炭素	ぶいね	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ	覆土下層	30%
29	土師器	杯	[19.0]	(3.5)	-	長石・石英・繊維 赤色砂子・針状炭素	灰褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ 体部内面ヘラミダシ	覆土下層	30% PL. 9
30	土師器	杯	[17.8]	5.8	-	長石・石英・ 繊維・針状炭素	ぶいね	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ	覆土中層	40% PL. 9
31	土師器	杯	18.0	5.7	-	長石・石英・繊維 赤色砂子・針状炭素	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ 体部内面ヘラミダシ	覆土下層	50% PL. 9
32	土師器	器台	12.8	(8.2)	-	長石・石英・ 繊維・針状炭素	明褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ	覆土中層	60% PL.10
33	土師器	高杯	(5.8)	[10.4]	-	長石・石英・繊維	橙	普通	外・内面ヘラミダシ後、ナデ	覆土中	5%
34	土師器	高杯	-	(9.8)	10.0	長石・石英・ 繊維・赤色砂子	明赤褐色	普通	器部外面ヘラクスリ後、器部内、内面横ナデ 器部内面工具痕	覆土上層	40% PL.10
35	土師器	高杯	-	(9.6)	13.8	長石・石英・繊維	明赤褐色	普通	器部外面ヘラクスリ後、器部外・内面横ナデ 器部内面工具痕	覆土上層	40% PL.10
36	土師器	高杯	[14.5]	11.8	10.6	長石・石英・ 繊維・針状炭素	ぶいね	普通	口縁部外・内面横ナデ 器部外面ヘラクスリ後、ナデ 器部内面ヘラミダシ	儀禮墓土・ 灰床層墓土	40% PL.10
37	土師器	高杯	-	(7.2)	-	長石・石英・ 小礫・繊維	ぶいね	普通	器部外面ヘラクスリ後、ナデ 器部内面横ナデ 器部内面ヘラクスリ後、ナデ 器部内面横ナデによる強いナデ	覆土上層	3% 墓土層・ B4 PL.10
38	土師器	高杯	-	(4.9)	[16.8]	長石・石英・ 小礫・繊維	ぶいね	普通	器部外面ヘラクスリ後、ナデ 器部内面ヘラミダシ、器部外・内面横ナデ	覆土下層	20% 器土 10% 儀禮墓土
39	土師器	高杯	-	(9.4)	-	長石・石英・繊維	ぶいね	普通	器部内面ヘラミダシ、器部外面ヘラクスリ後、ナデ 器部内面ヘラミダシ、器部外内面横ナデによるナデ	覆土上層	20% PL.10
40	土師器	杯	[17.2]	(8.3)	-	長石・石英・ 繊維・針状炭素	ぶいね	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ	覆土中層	25% PL. 9
42	土師器	甕	[24.0]	(12.5)	-	長石・石英・ 小礫・繊維	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ	覆土中	20% PL.11
43	土師器	甕	[27.0]	(16.4)	-	長石・石英・繊維	ぶいね	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ 体部内面ヘラミダシ	覆土中層	10%
44	土師器	甕	18.0	(21.0)	-	長石・石英・ 繊維・針状炭素	ぶいね	普通	口縁部外面横ナデ 口縁部内面ヘラナデ 器部外面ヘラクスリ後、ナデ 器部内面ヘラミダシ後、ナデ	灰床	70% PL.11
45	土師器	甕	18.1	(17.0)	-	長石・石英・繊維	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ	覆土中層・ 覆土下層	40% PL.11
46	土師器	甕	18.3	25.9	8.5	長石・石英・繊維	赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 器部外面ヘラクスリ 器部内面ヘラミダシ	儀禮土下層	60% PL.11
47	土師器	小形甕	[13.4]	(3.5)	-	長石・石英・繊維 針状炭素・赤色砂子	黒	普通	外・内面横ナデ	覆土中層	5%
48	土師器	小形甕	[13.4]	(3.5)	-	長石・石英・繊維 針状炭素・赤色砂子	明赤褐色	普通	外・内面横ナデ後、ヘラミダシ 器部内面ヘラナデ	覆土中層・ 覆土下層	5%
49	土師器	小形甕	-	(3.5)	[6.4]	長石・石英・繊維	ぶいね	普通	外側ヘラクスリ 内面ヘラナデ後、ナデ	儀禮墓土	40%
50	土師器	小形甕	[13.0]	(8.5)	-	長石・石英・ 小礫・繊維	明褐色	普通	外・内面横ナデ	儀禮墓土層 覆土上層	20%
51	土師器	小形甕	[15.8]	(12.0)	-	長石・石英・繊維	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ 体部内面ヘラミダシ後、ナデ 器部内面ヘラミダシ後、ナデ	覆土中層	20%
52	土師器	小形甕	-	(10.6)	8.0	長石・石英・繊維	ぶいね	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ 器部内面ヘラミダシ後、ナデ 器部内面ヘラミダシ後、ナデ	覆土中層	40%
53	土師器	甕	[23.7]	(13.2)	-	長石・石英・ 繊維・針状炭素	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ 器部内面ヘラミダシ後、ナデ	覆土中層	20%
54	土師器	甕	27.6	25.0	8.5	長石・石英・ 繊維・赤色砂子	赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラクスリ後、ナデ 器部内面ヘラミダシ	覆土中層・ 灰床	70% PL.11
55	土師器	平段土師	-	(2.7)	[3.0]	長石・石英・繊維	橙	普通	外側ヘラクスリ後、ナデ 内面指頭痕	覆土中	30%
56	土師器	平段土師	[5.4]	(3.0)	[4.8]	長石・石英・ 針状炭素	ぶいね	普通	口縁部外・内面指頭痕	覆土中	20% PL. 8
57	土師器	平段土師	[6.0]	3.0	[5.2]	長石・石英・ 繊維・針状炭素	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土中層	30% PL. 8
58	土師器	平段土師	[5.3]	3.6	5.0	長石・石英	ぶいね	普通	外・内面横ナデによるナデ	覆土中層	90% PL. 8
59	土師器	平段土師	4.9	5.5	3.2	長石・石英・繊維	ぶいね	普通	外・内面・底部指頭痕	覆土中層	80% PL. 8
番号	器種	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考			
DP 4	支脚	3.6	6.6	13.6	383	長石・石英・ 赤色砂子	ヘラクスリ後、ナデ	覆土下層・ 灰床	PL.17		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考		
Q 5	磨石	(10.6)	5.2	3.2	(291)	ホムンフェルス	縦線部に磨痕	覆土中			
Q 6	磨石	(12.1)	5.0	4.0	(364)	安山岩	縦線部に磨痕	覆土中			
Q 7	磨石	12.5	3.2	8.2	1131	ホムンフェルス	全面磨面	儀禮土下層			
Q 8	台石	21.1	17.6	10.5	4790	ホムンフェルス	端部に敲打痕	覆土下層			
Q 10	不明	4.8	6.4	3.3	80.8	泥岩	貝葉穴を有す	覆土中			
番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考			
Q 9	管玉	2.8	1.2	7.2		碧玉	一方向からの穿孔	覆土中	PL.18		

第8号住居跡 (第17・18図)

位置 調査区南部のM3b3区、標高25.6mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第10・13号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため、南北軸は4.70mで、東西軸は0.94mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形、主軸方向は $N-10^{\circ}-W$ と推定される。壁高は20cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、硬化面は確認できなかった。貼床は、平坦に掘りくぼめた部分にロームブロックを含む黒褐色土を埋土して構築されている。壁下には壁溝が巡っている。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置し、長径49cm、短径42cmの楕円形で、深さは28cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 2か所。P1・P2は、深さ22cm・40cmで、配置から主柱穴である。

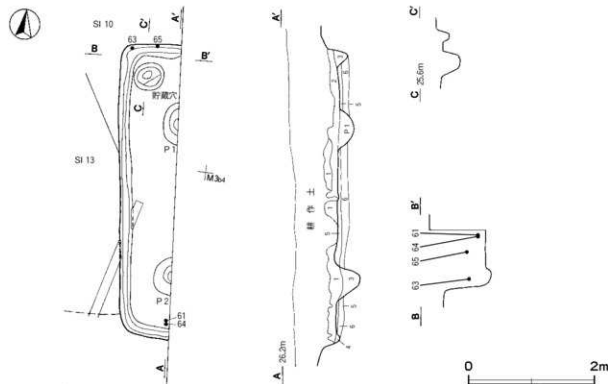
覆土 4層に分層できる。第1～4層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第5・6層は、貼床の構築土である。

土層解説

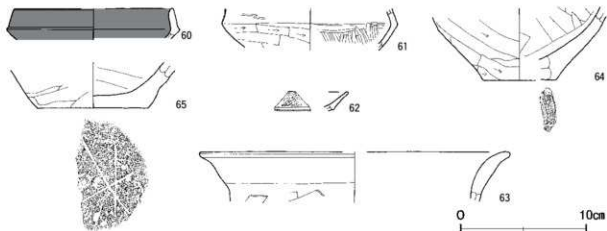
- | | | | |
|-------|---------------------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・灰黄褐色粘土ブロック・焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・黄褐色砂質粘土ブロック少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片108点(坏5、甕103)、須恵器片1点(甕)、貝類3点が出土している。また、混入した縄文土器片4点(深鉢)、弥生土器片4点(甕)も出土している。61・64は南部の覆土下層、63・65は北西コーナー部の覆土中層、60・62は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から、第10号住居跡より新しい時期の6世紀後葉に比定できる。



第17図 第8号住居跡実測図



第18図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
60	土師器	環	[22.6]	(2.5)	-	長石・石英・雲母	黒	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラケズリ後、ナデ 外・内面黒色装束 (漆)	覆土中	5%
61	土師器	環	-	(3.3)	-	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外面ヘラケズリ後、ナデ 内面ヘラミガキ	覆土下層	5%
62	灰土器	蓋	-	(1.5)	-	長石	褐色	良好	網罟状工具による波状文	覆土中	5%
63	土師器	壺	[24.4]	(4.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面磨ナデ 肩部外面ヘラケズリ	覆土中層	5%
64	土師器	小形壺	-	(5.8)	[5.8]	長石・石英・細砂	明赤褐色	普通	外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ 底部ヘラケズリ	覆土下層	5%
65	土師器	小形壺	-	(3.6)	8.6	長石・石英・赤色粘土	明赤褐色	普通	外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ 底部工具痕	覆土中層	5%

第10号住居跡 (第19・20図)

位置 調査区南部のM3a3区、標高25.8mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第13号住居跡を掘り込み、第8号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南部を第8号住居に掘り込まれており、大部分が調査区域外に延びているため、南東・北西軸は2.80m、南西・北東軸は2.01mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形、長軸方向はN-27°-Wと推定される。壁高は50cmで、ほぼ直立している。

床 北部から南部にかけて緩やかに傾斜している貼床で、南部の床面は北部の床面より25cmほど低くなっている。硬化面は確認できなかった。貼床は、平坦に掘りこぼれた部分にロームブロックを含む明褐色土を埋土して構築されている。南西壁の一部を除いて、壁下には壁溝が巡っている。

ピット P1は72cmで、規模と配置から主柱穴である。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第5層は、貼床の構築土である。

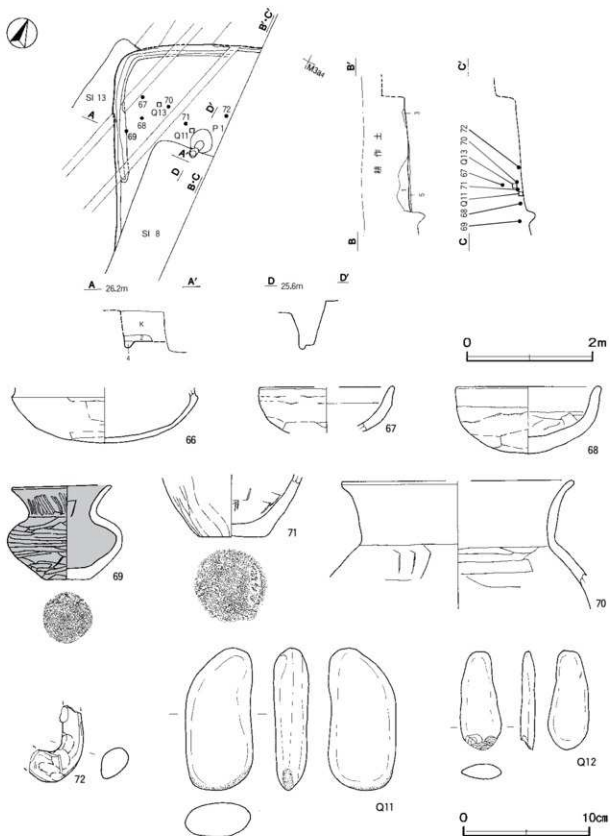
土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------|
| 1 黒色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 明褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | | |

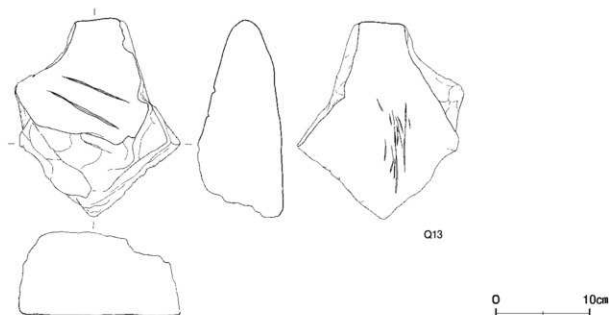
遺物出土状況 土師器片305点(環28、高環9、壺265、甌2、小形壺1)、石器2点(磨石、敲石)、石製品1点(砥石)が、覆土下層を中心に出土している。また、混入した縄文土器片4点(深鉢、弥生土器片29点(壺)も出土している。68・69・71・72・Q11は覆土下層、70・Q13は覆土中層、67は覆土上層、66・

Q 12 は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から、第8号住居よりも古い時期の6世紀後葉に比定できる。



第19図 第10号住居跡・出土遺物実測図



第20図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第19・20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
66	土器部	坏	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ後	覆土中	15%
67	土器部	坏	[11.0]	(3.6)	-	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ後	覆土上層	95%
68	土器部	坏	11.4	5.4	-	長石・石英・雲母・針状鉱物	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ後	覆土上層	95% PL 8
69	土器部	小形壺	7.8	7.6	3.8	長石・石英	赤褐	普通	外面ヘラケズリ・ヘラミガキ 内面ナデ	覆土下層	95% PL11
70	土器部	壺	[18.6]	(10.2)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラケズリ後	覆土中層	5%
71	土器部	小形壺	-	(3.0)	5.2	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	体部外面ヘラケズリ後 ナデ 体部内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ後 ナデ	覆土下層	10%
72	土器部	把手	-	(6.2)	-	長石・石英・細礫	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 外・内面単純	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 11	礫石	11.3	5.5	2.8	273	安山岩	磨面1面	覆土下層	
Q 12	礫石*	7.9	3.3	1.2	44.3	不明	端部融行による欠損	覆土中	
Q 13	砥石	21.0	17.7	9.1	3200	砂岩	上面研磨による溝2条 下面複数の浅い研ぎ痕	覆土中層	PL18

第13号住居跡（第21図）

位置 調査区南部のM3 b3区、標高25.9mの台地緩斜面部に位置している。

確認状況 北西部を除いて耕作により削平されていたため、覆土や床面は確認できなかった。

重複関係 第8・10号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北西部を除いて耕作により削平されていたため詳細は不明であるが、南北軸は柱穴の位置から5.5mほどと推定される。東西軸は、調査区域外に延びているため不明である。平面形は方形もしくは長方形、南北軸方向はN-5°-Eと推定される。北西部の壁高は26cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

ピット 3か所。P1・P2は深さ26cm・16cmで、配置から主柱穴である。P3は深さ24cmで、主柱穴との位置関係から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

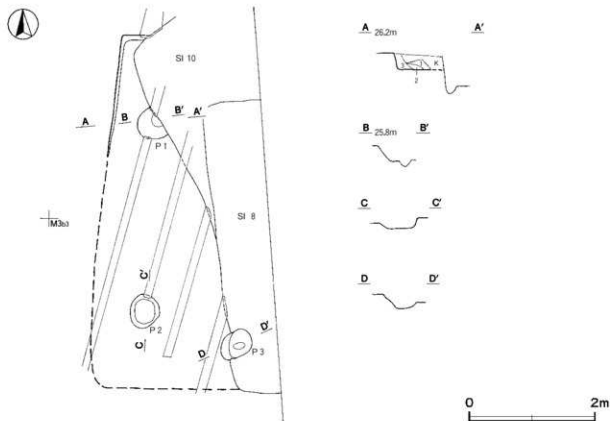
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量 3 黒色 ロームブロック中量
2 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片7点(壺)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。また、混入した弥生土器片4点(壺)も出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から、6世紀中葉以前の古墳時代と考えられるが、土器が細片のため、詳細は不明である。



第21図 第13号住居跡実測図

表2 古墳時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模 長軸×短軸 (m)	壁高 (cm)	床面	構造	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	重複関係 (古→新)	
								土坑	出入口	ドット	石・土					石礎
2	L 2.06	[方形、長方形]	N-5°-E	8.20 × (4.04)	44~50	平坦	全周	5	1	4	礎1	-	人瓦	土師器片、重葺器片、 文庫、磨石、殿石、 白土、瓦脚、 鏡石、埴土	6世紀後葉	
3	L 2.05	[方形、長方形]	N-14°-W	6.61 × (4.77)	15~27	平坦	全周	2	1	3	礎2	-	人瓦	土師器片、瓦脚、 鏡石、埴土	6世紀後葉	
8	M 3.33	[方形、長方形]	N-10°-W	4.70 × (0.94)	20	平坦	全周	2	-	-	-	-	人瓦	土師器片、貝類	6世紀後葉	SI13→SI10→ 本跡
10	M 3.40	[方形、長方形]	N-27°-W	(2.80) × (2.01)	50	緩斜	一部	1	-	-	-	-	人瓦	土師器片、磨石、 殿石、鏡石	6世紀後葉	SI13→本跡 →2号
13	M 3.33	[方形、長方形]	N-5°-E	(5.50) × -	26	平坦	-	2	1	-	-	-	人瓦	土師器片	6世紀中葉 以前	本跡→SI10→ SI 8

4 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡5軒を確認し、このうち1軒には建て替えが確認できた。以下、遺構及び遺

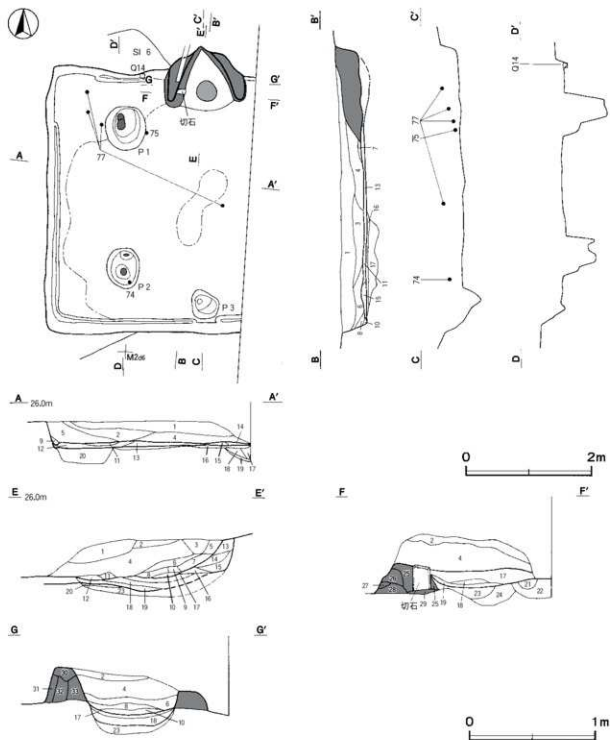
物について記述する。

竪穴住居跡

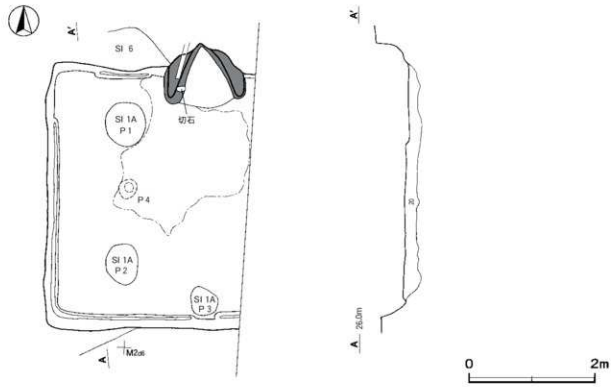
第1A号住居跡 (第22・24図)

位置 調査区南部のM2c6区、標高25.7mの台地緩斜面部に位置している。

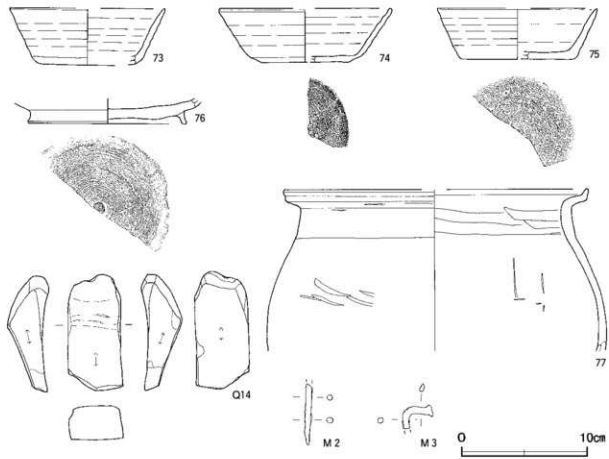
確認状況 本跡の掘方調査の際に、埋め戻された間層を挟んで第1B号住居跡の床面が確認された。両遺構とも軸方向が同一であることから、第1B号住居跡から本跡へと建て替えが行われたものと判断した。



第22図 第1A号住居跡実測図



第23図 第1B号住居跡実測図



第24図 第1A号住居跡出土物実測図

重複関係 第6号住居跡を掘り込んでおり、第1B号住居跡から建て替えられている。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、南北軸は4.24mで、東西軸は3.32mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は14～38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、壁際と中央部を除く部分が踏み固められている。貼床は、第1B号住居跡の床面にロームブロック・焼土ブロックを含む暗褐色土や極暗褐色土を埋土して構築されている。北西部及びP3の南部を除く壁下に壁溝を確認した。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで102cmで、燃焼部幅は78cmである。袖部は、第1B号住居跡のものを続けて使用している。火床部は第1B号住居跡の竈火床部を皿状に掘りくぼめた部分に第19層を埋土して構築されており、床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。第1～18層は、本跡発掘後の覆土である。火床部の構築土である第19層は、本跡の貼床構築土（第13層）と併行して堆積していることから同時に埋土されたものと考えられ、住居の建て替えに伴い、竈火床部を作り替えた可能性が高い。

竈土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・黄褐色粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	12 暗褐色	黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量
2 暗褐色	黄褐色粘土ブロック・ローム粒子・灰白色粘土粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	13 黒褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量	14 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・灰白色粘土ブロック・炭化粒子・細礫微量
4 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・黄褐色粘土粒子微量	15 暗褐色	灰白色粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・細礫微量
5 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量	16 不鮮黄褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・灰白色粘土粒子微量
6 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、黄褐色粘土粒子微量	17 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・黄褐色粘土粒子微量
7 黒褐色	焼土ブロック多量、炭化材・ローム粒子微量	18 黒褐色	ロームブロック・黄褐色粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
8 不鮮褐色	粘土ブロック多量	19 黒褐色	黄褐色粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
9 赤褐色	焼土ブロック多量		
10 不鮮褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック中量、炭化粒子少量		
11 黒褐色	焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量		

ピット 3か所。P1・P2は深さ72cm・58cmで、配置から主柱穴である。P1・P2ともに柱あたり痕が2か所ずつ確認できたことから、柱の立て替えが行われた可能性がある。P3は深さ33cmで、主柱穴との位置関係から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層に分層できる。第1～10層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第11～15層は、貼床の構築土である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量	8 暗褐色	炭化物・ローム粒子少量、焼土ブロック微量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物・灰白色粘土粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
4 黒褐色	焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	12 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	13 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
7 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・灰白色粘土粒子・細礫微量	14 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
		15 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片705点(壺)、須恵器片35点(坏28、高台付坏1、蓋1、盤2、瓶2)、石製品1点(砥石)、瑪瑙剥片2点(3.9g・4.5g)、鉄製品2点(鐵、不明)、焼成粘土塊2点が、覆土上層から床面にかけて散在した状態で出土している。また、混入した縄文土器片41点(深鉢)、弥生土器片55点(壺)、古墳時代の土師器片48点(坏43、高坏5)も出土している。Q14は北西部、75は北西部の覆土下層から出

土している。74は南西部の覆土中層から出土している。77は北西部の覆土上層から中層と中央部の覆土中層から出土した破片が接合したもので、破片同士が最大2.8mの距離を置いて出土しており、破砕の後に分けて投棄された可能性がある。73・76・M2・M3は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から、8世紀後葉に比定できる。

第1B号住居跡（第23図）

位置 調査区南部のM2c6区、標高25.7mの台地緩斜面部に位置している。

確認状況 第1A号住居跡の掘方調査の際に、埋土された間層を挟んで本跡の床面の確認できた。両遺構とも軸方向が同一であることから、本跡から第1A号住居へと建て替えが行われたものと判断した。

重複関係 第6号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、南北軸は4.24mで、東西軸は3.32mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、長軸方向はN-3°-Wである。壁高は37～50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦な貼床で、中央部から竈周辺にかけて踏み固められている。貼床は、不定形に掘りくぼめた部分にロームブロック・焼土ブロック・黒色土ブロックを含む褐色土や黒褐色土、黒色土を埋土して構築されている。

竈 袖部は、不定形に掘りくぼめた部分にロームブロックや数種類の粘土ブロックを含む第25～33層を積み上げて構築されており、左袖部には補強材として泥岩の切石が用いられている。火床部は、袖部構築後に第21～24層を埋土して構築されている。第20層には多量の灰が含まれており、作り替えが行われる以前の竈の火床部と考えられる。

覆土層解説

20 黒褐色	灰多量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	27 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・灰白色粘土ブロック・炭化粒子少量
21 黒褐色	にぶい褐色砂質粘土ブロック・焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子微量	28 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
22 黒褐色	ロームブロック・黒色土ブロック中量、焼土粒子微量	29 黒褐色	焼土ブロック多量、黄褐色粘土粒子中量、ローム粒子微量
23 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック・炭化粒子少量	30 黒褐色	灰白色粘土粒子少量、ロームブロック・黄褐色粘土ブロック微量
24 黒褐色	黒色土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	31 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
25 暗褐色	黄褐色粘土ブロック・焼土ブロック・灰白色粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	32 褐色	ロームブロック多量
26 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・灰白色粘土粒子微量	33 褐色	灰白色粘土ブロック多量、ロームブロック中量

ビット P4は本跡の床下から確認できた。深さ26cmで、性格不明である。

覆土 第16～20層は、貼床の構築土である。

土層解説（第1A号住居跡土層図に掲載）

16 褐色	ロームブロック多量、黒色土ブロック少量	19 褐色	ロームブロック中量
17 黒褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック・炭化物少量	20 黒褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
18 黒褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック・炭化粒子少量		

遺物出土状況 土師器片43点（壺）、須恵器片2点（坏）が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。また、混入した弥生土器片2点（壺）、古墳時代の土師器片4点（坏）も出土している。

所見 時期は、本跡から建て替えられた第1A号住居の時期から8世紀後葉以前と考えられるが、土器がいずれも細片のため、詳細は不明である。

第1A号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
73	煎忠器	杯	[12.4]	4.5	[7.4]	長石・石英・ 計状炭素・面輝	にふい相	良好	底部手持ちヘラケズリ		覆土中	10%
74	煎忠器	杯	[13.8]	4.3	[7.0]	長石・石英・ 計状炭素	灰	良好	体部下縁回転ヘラケズリ 底部多方向の手持ち ヘラナデ		覆土中層	20% PL12
75	煎忠器	杯	[12.8]	4.1	[9.0]	長石・石英・面輝	灰白	良好	底部回転ヘラケズリ		覆土下層	40% PL12
76	煎忠器	盤	-	(2.1)	[12.6]	長石・石英・ 計状炭素・面輝	灰ナガツブ	良好	底部回転ヘラケズリ後、 高台貼り付け		覆土中	20% PL12
77	土師器	壺	[24.3]	(13.0)	-	長石・石英・ 赤鉄・赤色粒子	にふい相	普通	口縁部外・内面横ナデ 外・内面ヘラナデ		覆土中層・ 覆土上層	20% PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 14	硝石	9.2	4.3	3.2	134	凝灰岩	砥面4面		覆土下層 PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 2	不明	(5.0)	0.5	0.4	(3.1)	鉄	上部欠損 断面円形		覆土中 PL19
M 3	不明	(2.0)	2.5	0.4	(2.5)	鉄	断面不整形		覆土中 PL19

第5号住居跡（第25～27図）

位置 調査区南部のK2c5区、標高25.9mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第1号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため、南北軸は7.12mで、東西軸は4.00mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、南北軸方向はN-18°-Wである。壁高は50～54cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、東壁際の一部及び北東・南東コーナー部を除いた広い範囲が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。貼床は、不定形に掘りくぼめた部分にロームブロック・焼土ブロック・ローム粒子を含む褐色土・暗褐色土・黒色土を埋土して構築されている。東壁下には、P1・P2・P3へ延びる間仕切り溝が3条確認できた。間仕切り溝の深さは14～20cmである。

ピット 5か所。P1～P3は深さ54～68cmで、配置から主柱穴である。P4・P5は深さ56cm・16cmで、主柱穴との位置関係から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

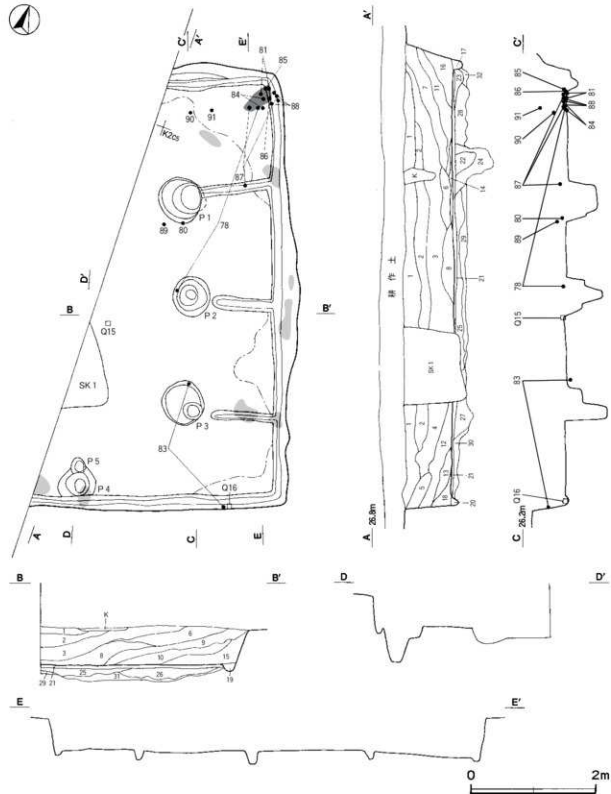
覆土 20層に分層できる。第1層は、焼土ブロックを含んでいるが、均質な粒子が堆積していることから、自然堆積である。第2～20層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されており、覆土下層から床面にかけて、焼土塊・焼土ブロックを確認した。第21～32層は、貼床の構築土である。第22～31層上面には平坦面が築かれている。

土層解説

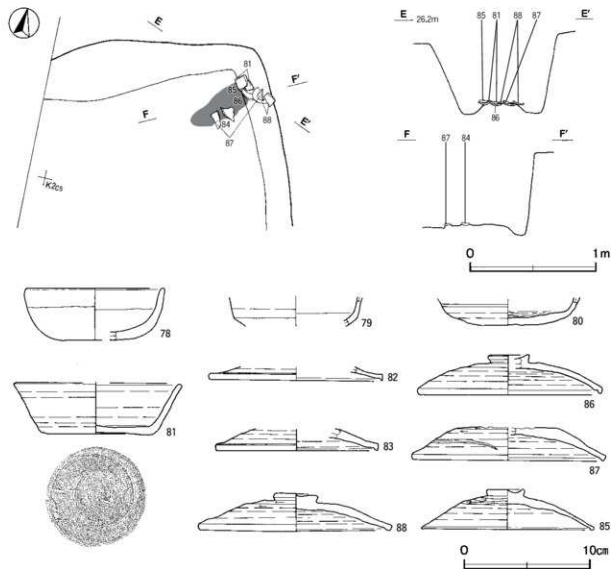
1	黒	色	ローム粒子少量	焼土ブロック・炭化粒子微量	15	黒	色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒	褐色	ローム粒子中量		16	黒	暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
3	黒	褐色	ロームブロック中量	焼土ブロック微量	17	黒	色	ロームブロック中量
4	黒	褐色	ロームブロック中量		18	黒	色	ロームブロック・焼土ブロック微量
5	黒	褐色	ローム粒子中量	焼土粒子・炭化粒子微量	19	黒	色	ローム粒子少量
6	黒	褐色	ロームブロック中量	焼土粒子微量	20	黒	色	ロームブロック多量
7	暗	褐色	ロームブロック中量	炭化物・焼土粒子微量	21	暗	褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
8	黒	褐色	ロームブロック少量		22	黒	色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
9	黒	褐色	ロームブロック中量	焼土ブロック・炭化物微量	23	黒	褐色	ロームブロック中量
10	黒	褐色	ロームブロック少量	焼土粒子・炭化粒子微量	24	暗	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
11	黒	褐色	ロームブロック・焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック・炭化物少量	灰白色結土粒子微量	25	暗	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量
12	黒	褐色	ロームブロック少量	焼土粒子・炭化粒子微量	26	暗	褐色	ロームブロック中量
13	黒	褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	炭化粒子微量	27	黒	褐色	ローム粒子多量
14	黒	褐色	ロームブロック多量	炭化物・焼土粒子微量	28	黒	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
					29	暗	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量

- 30 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量
 31 褐色 ロームブロック多量

- 32 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量



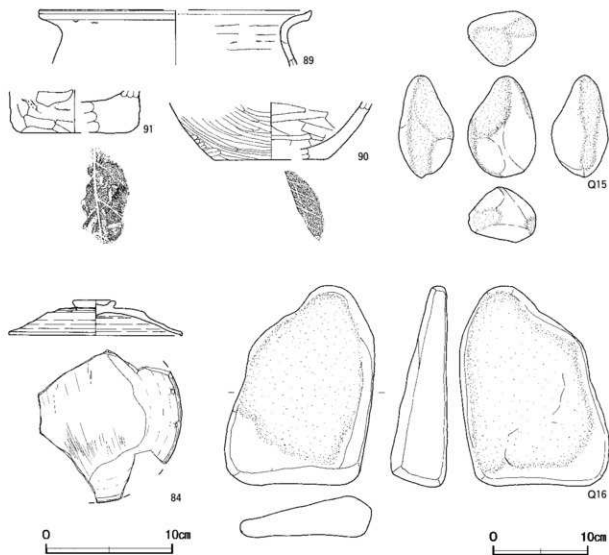
第25図 第5号住居跡実測図



第26図 第5号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 288 点（坏 3，甕 285），須恵器片 35 点（坏 11，蓋 15，甕 9），石器 2 点（磨石）が，覆土上層から下層にかけて，散在した状態で出土している。また，混入した縄文土器片 9 点（深鉢），弥生土器片 8 点（壺）も出土している。83 は P 3 の覆土上層と南西部壁際の覆土中層から出土した破片が接合しており，破砕の後に分けて投棄された可能性がある。Q 16 は南西部の壁溝から出土している。Q 15 は中央部，80・89 は東部の覆土下層から出土している。78・81・84～88 は北東コーナー部の覆土下層，粘土ブロックを多く含む覆土の上面からまとまった状態で出土しており，一括して廃棄されたものと考えられる。また，このうち 78 は P 2 の覆土上層，87 は北東部の覆土下層から出土した破片との接合関係が確認でき，破砕の後に分けて投棄された可能性がある。90 は北西部の覆土中層，91 は北西部の覆土上層，79・82 は覆土中から，それぞれ出土している。

所見 覆土下層から床面にかけて確認した焼土塊及び焼土ブロックは，総じて壁際付近に位置しており，埋め戻しの早い段階で投棄されたものと考えられる。また，床下に平坦面が築かれていることから，床面の貼り替えが行われた可能性がある。時期は，出土土器や重複関係から，8 世紀前葉に比定できる。



第27図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表 (第26・27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
78	土師器	坏	11.0	4.1	-	灰石・石英・ 黒色鉄粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	P2層上土層	80% PL12
79	須恵器	坏	-	(23)	-	灰石・石英・黒曜 鉄粒子	灰オリーブ	良好	ロケロナデ	覆土中	5%
80	須恵器	坏	-	(21)	(90)	灰石・石英・ 黒色鉄粒子	灰オリーブ	良好	体部下端回転ヘラケズリ	覆土下層	10%
81	須恵器	坏	[13.4]	4.1	8.0	灰石・石英・ 針状黒物・黒色鉄粒子	灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ後 ナデ 底部回転ヘ ラケズリ	覆土下層	65% PL12
82	須恵器	蓋	[14.0]	(1.1)	-	灰石・針状黒物	灰黄	良好	ロケロナデ	覆土中	5%
83	須恵器	蓋	[13.0]	(1.7)	-	灰石・黒曜・ 針状黒物	黄灰	良好	天井部回転ヘラケズリ	P2層上土層 覆土中層	30%
84	須恵器	蓋	[13.8]	2.8	-	灰石・石英・針状黒 物・黒曜・黒色鉄粒 子	灰	良好	天井部回転ヘラケズリ	覆土下層	90% PL13
85	須恵器	蓋	[13.8]	3.2	-	灰石・石英・針状黒 物・黒曜・黒色鉄粒 子	黄灰	良好	天井部回転ヘラケズリ後、手持ちヘラケズリ	覆土下層	40% PL13
86	須恵器	蓋	[14.5]	3.2	-	灰石・石英・ 針状黒物・黒色鉄粒 子	黄灰	良好	天井部回転ヘラケズリ 内面に擦痕	覆土下層	45% PL13
87	須恵器	蓋	[15.3]	(2.5)	-	灰石・石英・ 針状黒物・黒色鉄粒 子	黄灰	良好	天井部回転ヘラケズリ つまみ剥落	覆土下層	40% PL13
88	須恵器	蓋	15.2	3.1	-	灰石・石英・ 針状黒物・黒色鉄粒 子	灰	良好	天井部回転ヘラケズリ 内面に擦痕	覆土下層	90% PL13
89	土師器	甕	[21.8]	(4.4)	-	灰石・石英・ 黒曜・黒色鉄粒子	明黄灰	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土下層	5%
90	土師器	甕	-	(16)	(90)	灰石・石英・黒曜	にぶい橙	普通	外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
91	土師器	甕	-	(33)	(90)	灰石・石英・ 黒色鉄粒子	にぶい橙	普通	外面ヘラケズリ後 ナデ 内面強いヘラナデ	覆土上層	5%

番号	砂 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 15	礫石	106	72	58	453	砂岩	側面2面	覆土下層	
Q 16	礫石*	21.0	15.7	6.0	1896	砂岩	上面観察により平滑化	壁溝	

第 14 号住居跡 (第 28 図)

位置 調査区中央部の I 2e5 区、標高 25.9 m の台地緩斜面部に位置している。

確認状況 西部から南東部にかけては、攪乱を受けていたため覆土や床面は確認できなかった。

規模と形状 短軸は 3.30 m で、長軸はピットの配置や壁溝の位置から、3.80 m ほどと推定される。平面形は長方形で、主軸方向は N-35°-W である。壁高は 40 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。北コーナー部周辺及び南東壁の一部で、壁下に壁溝を確認した。

貯蔵穴 北コーナー部に位置し、長径 65 cm、短径 48 cm の楕円形で、深さは 19 cm である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

竈 北西壁や北寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 100 cm で、燃焼部幅は 52 cm である。袖部は、焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック・炭化物等を含む第 18～22 層を積み上げて構築されている。火床部は、袖部構築後に第 16・17 層を埋土して構築され、床面より 5 cm ほど高まっており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 30 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

1 黒 褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・粘土ブロック微量	12 黒 褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量
2 黒 褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子・繊維微量	13 褐 色	黄褐色粘土粒子中量、焼土粒子微量
3 黒 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子少量	14 黒 褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量
4 浅黄褐色	灰白色粘土粒子少量、焼土ブロック少量	15 白・黄褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量
5 灰黄褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量	16 極暗褐色	焼土ブロック微量
6 明黄褐色	灰白色粘土粒子少量	17 暗 赤 色	焼土ブロック少量
7 暗 褐色	粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量	18 黄 褐色	黄褐色粘土ブロック多量、繊維少量、炭化粒子微量
8 黒 褐色	粘土ブロック少量、焼土粒子微量	19 黄 褐色	黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック微量
9 黄 橙 色	明黄褐色粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・繊維微量	20 暗 褐色	黄褐色粘土粒子中量
10 黄 褐色	黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック中量	21 黄 褐色	黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック少量
11 黒 褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量	22 明黄褐色	明黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量

ピット 3か所。P 1・P 2 は深さ 22 cm・20 cm で、配置から主柱穴である。P 3 は深さ 32 cm で、主柱穴との位置関係から、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 3 の西部には床面に若干のくぼみがあり、柱の抜き取りによる痕跡と考えられる。

覆土 18層に分層できる。第 1～18層は、ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

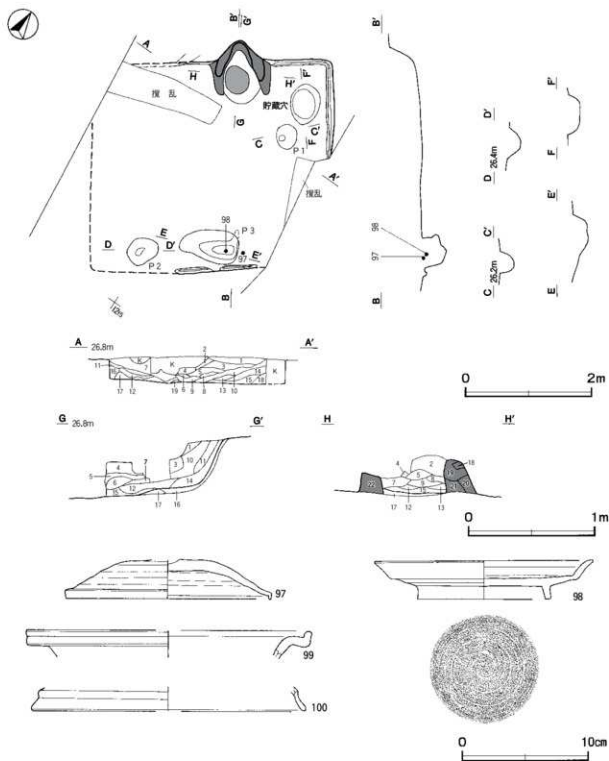
第 19層は、黄褐色粘土ブロックを多量に含んでいることから、竈袖部の構築土の一部とみられる。

土層解説

1 暗 褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	10 黒 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐色	ロームブロック少量	11 暗 褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
3 黒 褐色	ロームブロック中量	12 黒 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 明黄褐色	明黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック・白色粒子少量	13 暗 褐色	黄褐色粘土ブロック中量、焼土粒子少量
5 黄 褐色	黄褐色粘土ブロック・白色粒子少量、焼土ブロック微量	14 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
6 黒 褐色	黄褐色粘土ブロック中量、焼土ブロック微量	15 黒 褐色	黄褐色粘土ブロック少量
7 黒 褐色	ロームブロック少量、黄褐色粘土ブロック・焼土粒子微量	16 黒 褐色	ロームブロック少量
8 黒 褐色	黄褐色粘土ブロック多量	17 暗 褐色	ロームブロック・黄褐色粘土ブロック少量、炭化粒子微量
9 黒 褐色	焼土ブロック少量、黄褐色粘土ブロック微量	18 暗 褐色	ロームブロック中量
		19 橙 色	黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片 12 点（堿）、須恵器片 6 点（杯 1、蓋 3、盤 1、不明 1）が出土している。また、混入した弥生土器片 1 点（壺）も出土している。97 は P 3 付近の床面、98 は P 3 の覆土上層、99・100 は P 3 の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉に比定できる。



第 28 図 第 14 号住居跡・出土遺物実測図

第 14 号住居跡出土遺物観察表 (第 28 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
97	須恵部	壺	36.2	(31)	-	長石・石英・ 針状炭素	黄灰	良好	大井部回転ヘラケズリ つまみ剥落	床面	90% PL13
98	須恵部	壺	47.2	31	106	長石・石英・ 針状炭素	灰	良好	底部回転ヘラケズリ	P3覆土層	90% PL12
99	土師部	壺	(22.4)	(22)	-	長石・石英・ 赤褐色粘土	にぶ黄褐色	普通	外・内面横ナデ	P3覆土中	5%
100	須恵部	壺	(21.8)	(19)	-	長石・石英	灰	良好	口ロナデ	P3覆土中	5%

第 16 号住居跡 (第 29 ~ 31 図)

位置 調査区北部の G 2 区。標高 269 m の台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 南西部及び東部は調査区域外に延びており、南北軸は 4.52 m、東西軸は 4.22 m しか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向は N-5°-W である。壁高は 60 ~ 68 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦で、全面が硬化している。北東コーナー部から東壁にかけて、壁下に壁溝を確認した。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置し、長径 102 cm、短径 58 cm の楕円形で、深さは 26 cm である。底面は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈 2 か所。北壁に併設されている。これらの新旧関係は不明であるが、竈 1・竈 2 も袖部が遺存していることから、住居の廃絶まで併用されていたものとみられる。竈 1 の規模は、焚口部から煙道部まで 62 cm で、燃焼部幅は 23 cm である。右袖部は、焼土ブロック・黄褐色砂質粘土ブロック・黄褐色砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子等を含む第 6 ~ 13 層を積み上げて構築されている。また、両袖部の焚口からは泥岩の切石 (切石 a・b・c) が出土しており、補強材として用いられたと考えられる。切石 b・c は同一個体であり、切石 c は廃絶時に倒壊したものと考えられる。火床部は皿状に掘りくぼめた部分に第 15 層を埋土して構築され、床面より 8 cm ほど高まっており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 10 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。竈 2 の規模は、焚口部から煙道部まで 94 cm で、燃焼部幅は 51 cm である。袖部は、不定形に掘りくぼめた部分に、ロームブロック・焼土ブロック・黄褐色砂質粘土ブロック・黄褐色粘土ブロックを含む第 7・14・19 ~ 28 層を積み上げて構築されている。火床部は、袖部構築後に第 16 ~ 18 層を埋土して構築され、床面より 6 cm ほど高まっており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 47 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

1 にぶ黄褐色 黄褐色粘土ブロック多量	15 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量	16 暗赤褐色 焼土ブロック多量
3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック少量	17 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
4 黒褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量	18 にぶ黄褐色 黄褐色砂質粘土ブロック多量、炭化物少量、焼土ブロック微量
5 黒褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量	19 にぶ黄褐色 黄褐色砂質粘土ブロック多量
6 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	20 黒褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
7 黄褐色 黄褐色砂質粘土ブロック多量	21 にぶ黄褐色 黄褐色粘土粒子多量
8 黒褐色 ロームブロック・黄褐色砂質粘土ブロック少量、焼土ブロック微量	22 にぶ黄褐色 黄褐色砂質粘土ブロック多量
9 暗褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量	23 にぶ黄褐色 黄褐色粘土ブロック多量
10 黒褐色 ローム粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量	24 にぶ黄褐色 黄褐色粘土ブロック多量、繊維少量
11 にぶ黄褐色 黄褐色砂質粘土ブロック多量	25 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
12 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	26 暗褐色 ローム粒子中量
13 褐色 ローム粒子中量	27 暗褐色 ロームブロック中量
14 暗褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	28 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

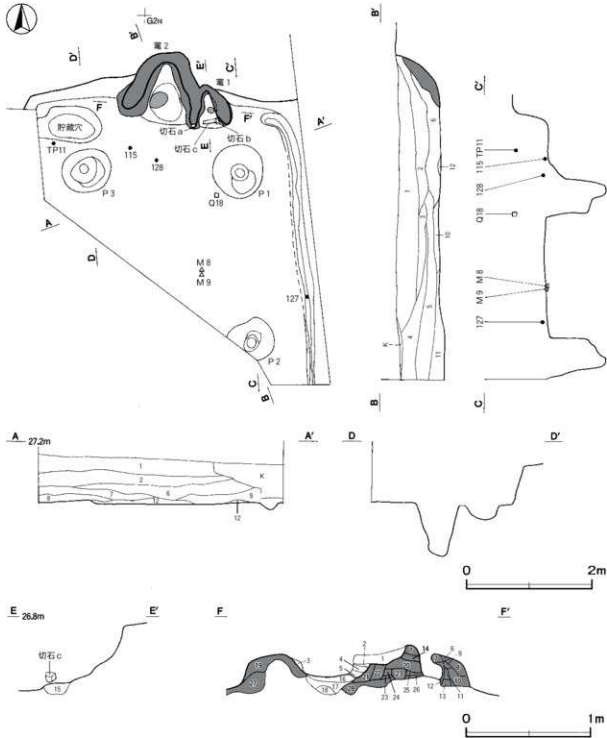
ピット 3 か所。P1 ~ P3 は深さ 86 ~ 94 cm で、配置から主柱穴である。

覆土 12 層に分層できる。第 1 ~ 11 層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻され

ている。第12層は、黄褐色粘土ブロックを多量に含んでいることから、竈袖部の構築土の一部とみられる。

土層解説

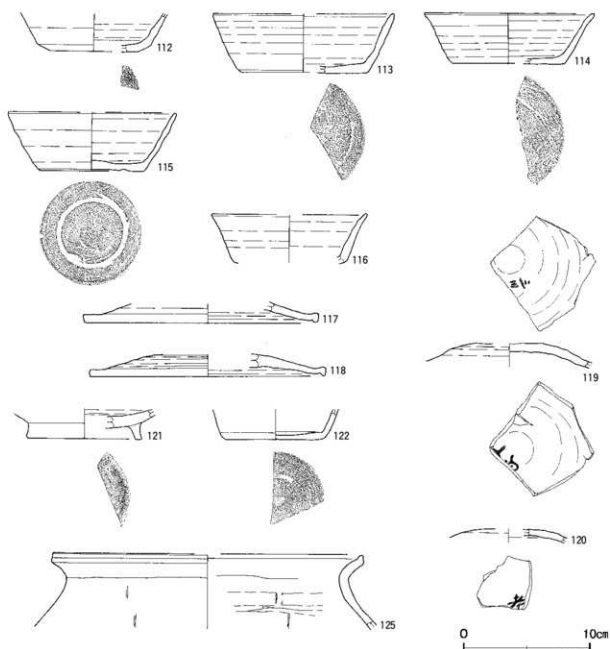
- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量 | 8 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 9 黒褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 10 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | 11 黒色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 黒色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 | 12 に近い黄褐色 黄褐色粘土ブロック多量 |



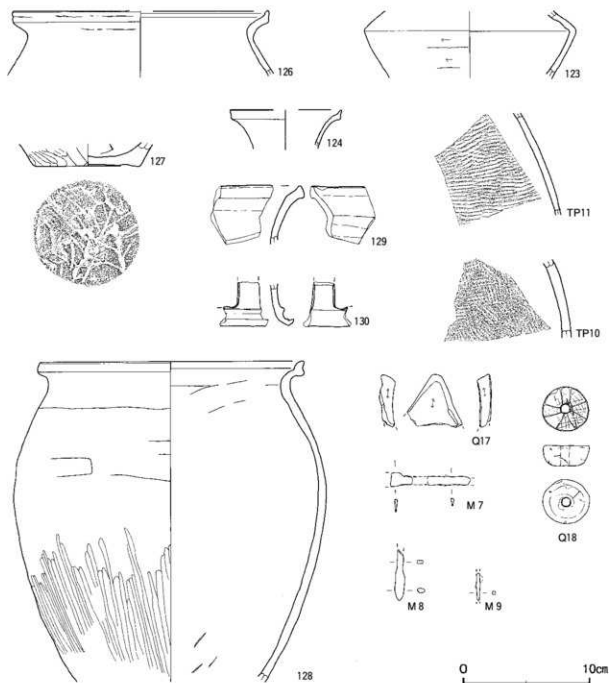
第29図 第16号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片 713 点 (坏 9, 甕 704), 須恵器片 237 点 (坏 178, 高台付坏 2, 盤 3, 蓋 21, 瓶 4, 甕 28, 円面硯 1), 不明土製品 1 点, 石製品 2 点 (砥石, 紡錘車), 鉄製品 3 点 (刀子 1, 不明 2), 焼成粘土塊 6 点が, 覆土中層から下層を中心に散在した状態で出土している。また, 混入した縄文土器片 4 点 (深鉢), 弥生土器片 3 点 (壺), 古墳時代の土師器片 1 点 (坏) も出土している。123 は貼床の構築土中から出土している。116 は貯蔵穴, TP10 は P 1 の覆土中から出土している。M 8・M 9 は中央部の床面から出土している。115・128 は北部, 127 は南東部の覆土下層から出土している。TP11 は北西部, Q 18 は北東部の覆土上層から出土している。112・114・117・122・125・126・130 は覆土下層, 113・118・119・120・121・124・129・Q 17 は覆土中層, M 7 は覆土中から, それぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀中葉に比定できる。



第 30 図 第 16 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第31図 第16号住居跡出土遺物実測図(2)

第16号住居跡出土遺物観察表(第30・31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
112	須恵器	坏	[3.1]	[7.2]	-	灰石・石英・ 針状鉱物・単色胎子	黄灰	良好	ロクロナデ	覆土下層	5%
113	須恵器	坏	[14.4]	4.7	[10.0]	灰石・石英・ 針状鉱物	黄灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ後、ナデ 気部回転ヘラケズリ後、ナデ	覆土中層	20%
114	須恵器	坏	[13.5]	(4.0)	[9.0]	灰石・石英	灰	良好	底部多方向の手持ちヘラケズリ	覆土下層	30%
115	須恵器	坏	[13.4]	4.6	8.2	灰石・石英・ 褐色胎子	灰白	良好	体部下端無調整 気部回転ヘラケズリ	覆土下層	60% PL12
116	須恵器	高台付坏	[12.4]	(3.9)	-	灰石・石英・ 針状鉱物	灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ	野成穴覆土中	5%
117	須恵器	壺	[8.4]	(1.6)	-	灰石・石英・ 針状鉱物・曲線	灰	良好	ロクロナデ	覆土下層	10%
118	須恵器	壺	[8.7]	(1.7)	-	灰石・石英・ 針状鉱物	灰	良好	天井部回転ヘラケズリ	覆土中層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
119	瓶	瓶	—	(220)	—	長石・石英・針状鉱物	黄灰	良好	大肩部回転ヘラケズリ ツマミ潤滑 外面磨き「三目」 内面磨き「□□」	覆土中層	20% PL13
120	瓶	瓶	—	(11)	—	長石・石英・針状鉱物	灰黄	良好	大肩部回転ヘラケズリ 内面磨き「茶」※	覆土中層	5% PL13
121	瓶	瓶	—	(24)	(90)	長石・石英・針状鉱物	灰	良好	底部回転ヘラケズリ	覆土中層	10%
122	瓶	瓶	—	(24)	(79)	長石・石英・針状鉱物・黒色粒子	黄灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ後、ナデ 底部回転ヘラケズリ	覆土下層	10% PL12
123	瓶	瓶	—	(53)	—	長石・針状鉱物	灰	良好	外面回転ヘラケズリ後、ナデ	船床境地土	5%
124	瓶	長頸瓶	[90]	(31)	—	長石・石英	灰オリーブ	良好	口縁部外・内面横ナデ	覆土中層	5%
125	土師器	甕	[24.6]	(5.9)	—	長石・石英・赤褐色・黒色粒子	明赤黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 肩部内面ヘラケズリ後、ナデ	覆土下層	5%
126	土師器	甕	[20.3]	(5.2)	—	長石・石英・赤褐色・黒色粒子	明赤黒	普通	外・内面摩耗	覆土下層	5%
127	土師器	甕	—	(1.7)	8.6	長石・石英・赤褐色・黒色粒子	にぶ・赤黒	普通	外面ヘラミガキ、ヘラナデ後、ナデ	覆土下層	10%
128	土師器	甕	25.0	(25.6)	—	長石・石英・赤褐色・黒色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 肩部外・内面ヘラケズリ後、ナデ 体部下ヘラミガキ	覆土下層	50% PL12
129	土師器	甕	—	—	—	長石・石英・赤褐色・黒色粒子	黄灰	良好	口縁部外・内面横ナデ 肩部外・内面ヘラケズリ後、ナデ 体部下ヘラミガキ	覆土中層	5%
130	土師器	円形甕	—	(3.5)	—	長石・石英・黒曜	灰	良好	溝し孔2ヵ所以上	覆土下層	5% PL13

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP10	瓶	甕	長石・石英	灰	外面縦・横段の平行印き 内面ナデ	P1 覆土中	
TP11	瓶	甕	長石・石英・黒色粒子	黄灰	外面横段の平行印き 内面横文の角負裁	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 17	底石	(42)	4.4	1.2	(16.0)	凝灰岩	紙面3面	覆土中層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 18	紡錘車	3.7	1.7	0.8	38.1	滑石	下面に放射状・格子状の縦割	覆土上層	PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 7	刀子	(64)	1.2	$\frac{0.2}{0.5}$	(3.8)	鉄	刃部・基部欠損 背面 刃部・基部断面三角形	覆土中	PL19
M 8	不明	(42)	0.7	$\frac{0.3}{0.4}$	(2.9)	鉄	上部欠損 断面長方形	床面	PL19
M 9	不明	(22)	0.4	0.3	(0.7)	鉄	上部・下部欠損 断面円形	床面	PL19

表3 奈良時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模	器高 (cm)	坪数	坪溝	内部施設	覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)				出入口 土間				備考
1A	M 2-6	方形 長方形	N-3°-W	4.24 × (3.32)	14-38	半間	ほぼ全周	2 1 - 1	1人	土師器片、須恵器片、底石、鏡石、鉄鏝	8世紀後半	SI 6 → SI 1 B → 本跡
1B	M 2-6	方形 長方形	N-3°-W	4.24 × (3.32)	37-50	半間	ほぼ全周	- - 1	1人	土師器片、須恵器片	8世紀後半	SI 6 → 本跡 → SI 1 A
5	K 2-6	方形 長方形	N-18°-W	7.12 × (4.00)	30-54	半間	全周	3 2 - -	-	自然土 土師器片、須恵器片、鏡石	8世紀前半	本跡 → SK 1
14	1 2-6	方形 長方形	N-35°-W	[3.8] × 3.30	40	半間	一部	2 1 -	1人	土師器片、須恵器片	8世紀後半	
16	G 2-4	方形 長方形	N-5°-W	(4.52) × (4.22)	60-68	半間	一部	3 - -	1人	土師器片、須恵器片、底石、紡錘車、刀子	8世紀中葉	

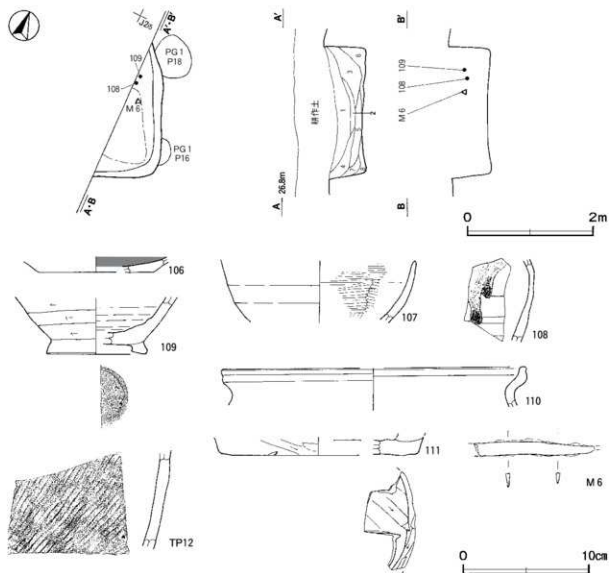
5 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡4軒、土坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第7号住居跡(第32図)

位置 調査区中央部のJ 215区、標高26.6mの台地緩斜面部に位置している。



第32図 第7号住居跡・出土遺物実測図

重複関係 第1号ピット群P16・P18を掘り込んでいる。

規模と形状 南東コーナー部を除き調査区域外に延びていたため、南北軸は2.12m、東西軸は0.80mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、南北軸方向はN-25°-Wである。壁高は59～66cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。

覆土 8層に分層できる。黒色土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | 黒色土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・黒色土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 黒色土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | 焼土ブロック中量、黒色土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 黒色土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・細礫少量、炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、灰白色粘土ブロック・黒色土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量 | | |
| 5 黒色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、黒色土ブロック・炭化粒子・灰白色粘土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片46点(杯9、甕37)、須恵器片10点(杯1、蓋1、瓶3、甕3、瓶2)、鉄製品1点(刀子)が出土している。また、混入した弥生土器片2点(甕)、古墳時代の土師器片1点(甕)も出土している。108、109、M6は南東部の覆土中層から、106・107・110・111・TP12は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から、9世紀中葉に比定できる。

第7号住居跡出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
106	土師器	杯	-	(12)	[9.1]	長石・石英・細礫	にぶい相	普通	体部下端回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	内面ヘラミガキ	覆土中	5%
107	土師器	杯	-	(5.0)	-	長石・石英	-	普通	普通	内面ヘラミガキ	覆土中	5%
108	須恵器	瓶	-	-	-	長石・細礫	青黄トビ 紅トビ 紅トビ	良好	自然軸	-	覆土中層	5% 109と同一個体
109	須恵器	瓶	-	(4.5)	[8.0]	長石・細礫	-	良好	体部下端回転ヘラケズリ	底部回転ヘラケズリ	覆土中層	2% 108と同一個体
110	土師器	甕	[28.0]	(3.2)	-	長石・石英	にぶい相	普通	普通	外・内面横ナデ	覆土中	5%
111	須恵器	瓶	-	(1.5)	[16.0]	長石・石英・ 柱状鉄屑	-	褐色	良好	体部外面ヘラケズリ 底部外面一方のヘラケズリ	覆土中	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴はか	出土位置	備考
TP12	須恵器	甕	長石・石英・黒色粒子	灰黄褐色	外面横位の平行叩き	内面ナデ	覆土中

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M6	刀子	(9.7)	1.2	0.3	(6.9)	鉄	刃部・基部欠損 刃部断面三角形	覆土中層	PL19

第9号住居跡(第33・34図)

位置 調査区南部のM3d3区、標高25.9mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 南北軸は3.74mで、東西軸は3.6mほどと推定される。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-13°-Eである。壁高は12cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、西部及び南東コーナー部を除く部分が踏み固められている。貼床は、不定形に掘りくぼめた部分にロームブロック・焼土ブロック・黒色土ブロックを含む褐色土を埋して構築されている。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置し、長径85cm、短径68cmの楕円形で、深さは22cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈 北壁に付設されている。煙道部から右袖部にかけてが調査区域外に延びており、左袖部は耕作による攪乱を受けていたため、規模は焚口部から煙道部までは93cm、燃焼部幅は35cmしか確認できなかった。袖部は、ロームブロック・灰白色粘土ブロック・泥岩片・焼土ブロックを含む第16～21層を積み上げて構築されており、左袖部には補強材として泥岩の切石が用いられている。火床部は不定形に掘りくぼめた部分に、第10～15層を埋土して構築されており、床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部は確認できた部分での計測で壁外に43cm掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------------------|--------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 | 灰白色粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | 炭化物中量、焼土ブロック・ローム粒子少量、灰黄褐色粘土粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | 灰白色粘土粒子多量 | 9 黒褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量、灰黄褐色粘土粒子微量 |
| 3 明赤褐色 | 灰白色粘土粒子多量 | 10 黒褐色 | 灰黄褐色粘土粒子微量、ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | 灰黄褐色粘土ブロック多量、炭化物・焼土粒子微量 | 11 黒褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 5 黒褐色 | 焼土ブロック中量、灰黄褐色粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 12 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子微量 | 13 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 7 明赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化物・ローム粒子少量、黄褐色粘土粒子微量 | | |

- | | | | |
|-----------|-----------------------------|-----------|--|
| 14 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量 | 19 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 15 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 20 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 16 灰白色 | 灰白色粘土ブロック多量 | 21 褐色 | ロームブロック・灰白色粘土ブロック・細礫少量、
焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 17 にぶい黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 22 にぶい黄褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 18 暗褐色 | 混岩片中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 23 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |

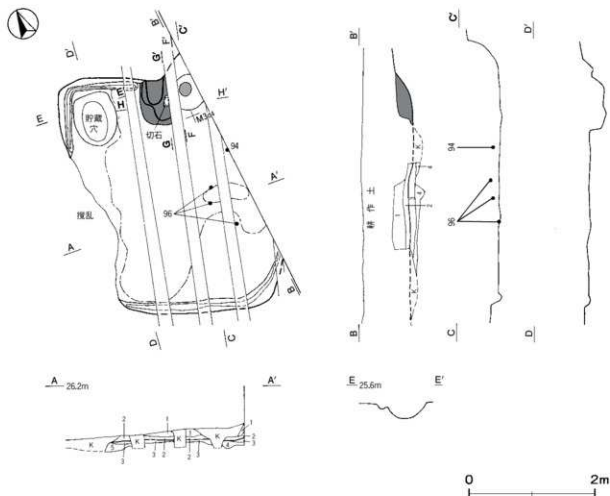
覆土 2層に分層できる。均質な粒子が堆積していることから、自然堆積である。第3～5層は、貼床の構築土である。

土層解説

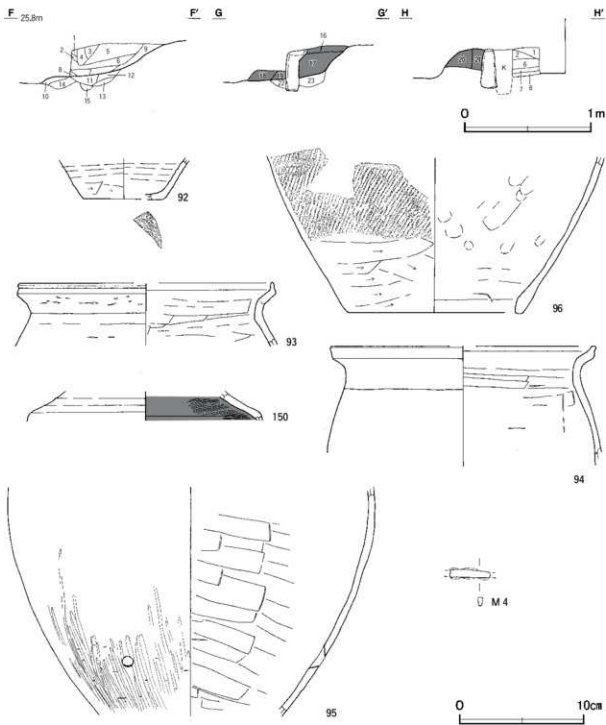
- | | | | |
|-------|---------------------------------|------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・黒色土粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・黒色土ブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 121点（坏1、蓋カ1、甕118、瓶1）、須恵器片 20点（坏5、蓋2、甕13）、鉄製品 1点（刀子）、椀状滓 1点、焼成粘土塊 1点が出土している。また、混入した縄文土器片 7点（深鉢）、弥生土器片 9点（甕）、古墳時代の土師器片 2点（坏）も出土している。94は北東部の覆土下層から出土している。96は中央部と東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。92・93・95・150・M4・M5は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉に比定できる。



第33図 第9号住居跡実測図



第34図 第9号住居跡・出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表 (第34図)

番号	種別	形種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
92	土師器	坏	-	(3.3)	(6.4)	長石・石英・ 褐色粘土	黄灰	良好	体部下端回転ヘラケズリ 底部手持ちヘラケズリ	覆土中	5%
150	土師器	甕	[18.4]	(2.4)	[18.4]	長石・石英・ 黄緑・赤色粘土	橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土中	5%
93	土師器	甕	[20.0]	(5.1)	-	長石・石英・ 黄緑・赤色粘土	橙	普通	口縁部外・内面磨ナデ 頸部内面ヘラナデ 体部内面ヘラナデ後 ナデ	覆土中	5%
94	土師器	甕	[21.2]	(9.5)	-	長石・石英・ 黄緑・赤色粘土	明赤陶	普通	口縁部外・内面磨ナデ 頸部内面ヘラナデ 体部内面ヘラナデ後 ナデ	覆土下層	10%
95	土師器	甕	-	(18.2)	-	長石・石英・ 黄緑・赤色粘土	黄陶	普通	内面ヘラミガキ後 ナデ 内面ヘラナデ 体部 下段に外面からの焼成後穿孔1ヶ所	覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
96	須恵形	甌	-	(12.5)	(14.0)	長石・石灰	褐色	良好	体部内面ヘラナデ・指部によるナデ 下部ヘラナスリ跡、ナデ	覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	刀子	(3.3)	0.8	0.4	(2.5)	鉄	刃部・基部欠損 基部断面長方形	覆土中	PL19
M5	銅片	(2.5)	(2.6)	(2.5)	(23.9)	鉄	破片	覆土中	PL19

第15号住居跡 (第35図)

位置 調査区北部のH2a4区、標高27.1mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外へ延びているため、南北軸は3.81mで、東西軸は3.82mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は50～64cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、不定形に掘りこぼれた部分に、ロームブロック・焼土ブロック・炭化材・黒色土ブロック・粘土ブロックを含む褐色土・暗褐色土・黒色土を埋土して構築されている。北東部を除く壁下に壁溝を確認した。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで112cmで、燃焼部幅は60cmである。袖部は、黄褐色粘土ブロックを含む第25・26層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第23・24層は火床部の構築土である。

覆土層解説

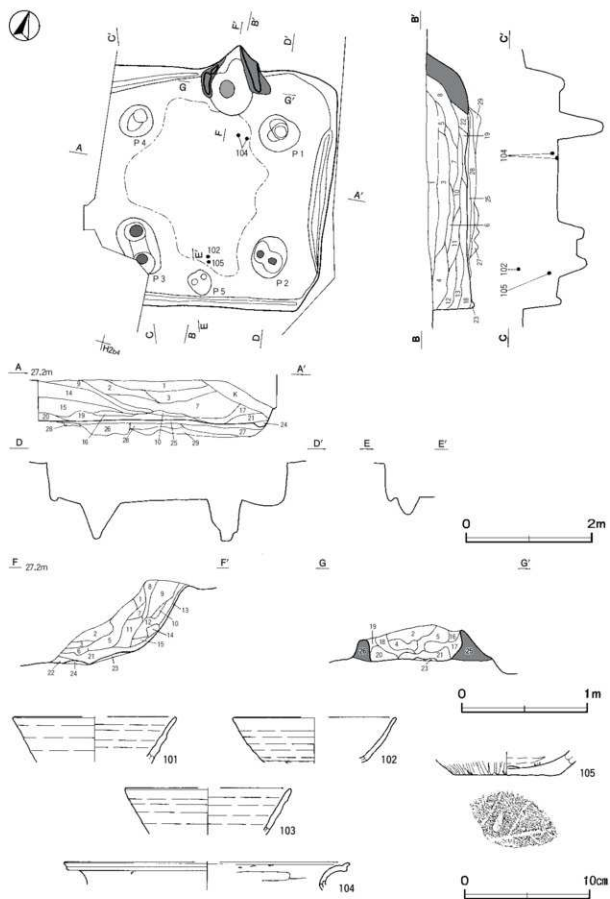
1	黒	色	ロームブロック・炭化物微量	13	褐	色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2	黒	褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	14	褐	色	ロームブロック多量
3	暗	褐色	灰白色粘土ブロック中量、焼土粒子微量	15	黒	褐色	焼土粒子少量、炭化物微量
4	暗	褐色	ロームブロック多量	16	黒	褐色	焼土粒子・白色粒子微量
5	黄	褐色	黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック・灰白色粘土ブロック・炭化粒子微量	17	褐	色	焼土ブロック中量、黄褐色粘土ブロック少量
6	暗	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	18	黒	褐色	焼土ブロック・白色粒子微量
7	灰	黄褐色	黄褐色粘土ブロック多量、細礫微量	19	暗	赤褐色	焼土ブロック多量
8	暗	赤褐色	焼土ブロック多量	20	黒	褐色	焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック少量、炭化物微量
9	に	ぶ	黄褐色	21	黒	褐色	焼土ブロック多量
10	黄	褐色	黄褐色粘土ブロック多量	22	黄	褐色	黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック微量
11	に	ぶ	黄褐色	23	暗	赤	焼土ブロック少量、炭化物微量
			黄褐色粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	24	暗	褐色	焼土ブロック少量
				25	黄	褐色	黄褐色粘土ブロック多量、炭化粒子微量
				26	黄	褐色	黄褐色粘土ブロック多量、焼土粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ36～72cmで、配置から支柱穴である。P2・P3は、柱あたり痕が2か所ずつ確認できたことから、柱の立て替えが行われた可能性がある。P5は深さ24cmで、支柱穴との位置関係から、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 24層に分層できる。第1～24層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第25～28層は、貼床の構築土である。第26～28層上面には平坦面が築かれている。

土層解説

1	黒	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	9	暗	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2	暗	褐色	焼土ブロック・炭化物微量	10	黒	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・細礫微量
3	黒	褐色	ロームブロック少量	11	黒	褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
4	黒	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	12	黒	褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
5	黒	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	13	極	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
6	黒	褐色	ロームブロック微量	14	黒	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・細礫微量
7	黒	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	15	黒	褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量
8	黒	褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	16	黒	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
				17	黒	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量



第35图 第15号住居跡・出土遺物実測図

18	黒	色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	25	黒	褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土ブロック・黄灰色粘土ブロック微量
19	黒	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	26	黒	色	ロームブロック・焼土ブロック・黒色土ブロック少量、黄褐色粘土ブロック・炭化材微量
20	黒	褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	27	黒	色	ロームブロック・黒色土ブロック中量
21	黒	褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	28	褐色	色	ロームブロック・黒色土ブロック・焼土粒子中量
22	暗	褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・細礫微量	29	褐色	色	ロームブロック多量、焼土ブロック・灰白色粘土ブロック・黒色土ブロック・炭化粒子少量
23	暗	褐色	炭化粒子微量				
24	暗	褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック微量				

遺物出土状況 土師器片 137 点(壺)、須恵器片 29 点(坏 20、蓋 1、甕 8)が出土している。また、混入した縄文土器片 9 点(深鉢)、弥生土器片 1 点(壺)も出土している。104 は北部、105 は南部の覆土下層から出土している。102 は南部の覆土上層、101・103 は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 床下に平坦面が築かれていることから、床面の貼り替えが行われた可能性がある。時期は、出土土器から 9 世紀前半と考えられる。

第 15 号住居跡出土遺物観察表 (第 35 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
101	須恵器	坏	[13.0]	(3.7)	-	長石・石英・針状鉱物	黄灰	良好	ロクロナデ	覆土中	5%
102	須恵器	坏	[13.0]	(3.6)	-	長石・石英・細礫	黄灰	良好	体部下端手持ちヘラケズリ	覆土上層	5% PL14
103	須恵器	坏	[13.2]	(3.7)	-	長石・石英・針状鉱物・赤色粒子	黄灰	良好	ロクロナデ	覆土中	10%
104	土師器	壺	[22.6]	(2.3)	-	長石・石英・雲母・細礫・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 胴部ヘラナデ後、ナデ	覆土下層	5%
105	土師器	壺	-	(1.9)	[8.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	胴部ヘラミガキ・工具痕 内面ヘラナデ後、ナデ	覆土下層	5%

第 17 号住居跡 (第 36 図)

位置 調査区北部の G 2 d3 区、標高 26.8 m の台地緩斜面に位置している。

重複関係 第 3・4 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北東部を除く部分が調査区域外に延びていたため、南北軸は 3.12 m、東西軸は 0.70 m しか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向は N-75°-E である。壁高は 36~40 cm で、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、硬化面は確認できなかった。貼床は、不定形に掘りくぼめた部分に、ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック等を含む暗褐色土や黒褐色土を埋土して構築されている。

竈 東壁に付設されている。規模は焚き口部から煙道部まで 66 cm で、燃焼部幅は 94 cm である。袖部は、粘土ブロックを含む暗褐色土を積み上げて構築されている。左袖部からは一部が構築土中に埋まった状態で泥岩の切石が出土しており、補強材として用いられたと考えられる。火床部は床面より 5 cm ほど高まっており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に 36 cm 掘り込まれ、火床部から外傾し、ほぼ直立して立ち上がっている。第 5 層は火床部の構築土である。

覆土層解説

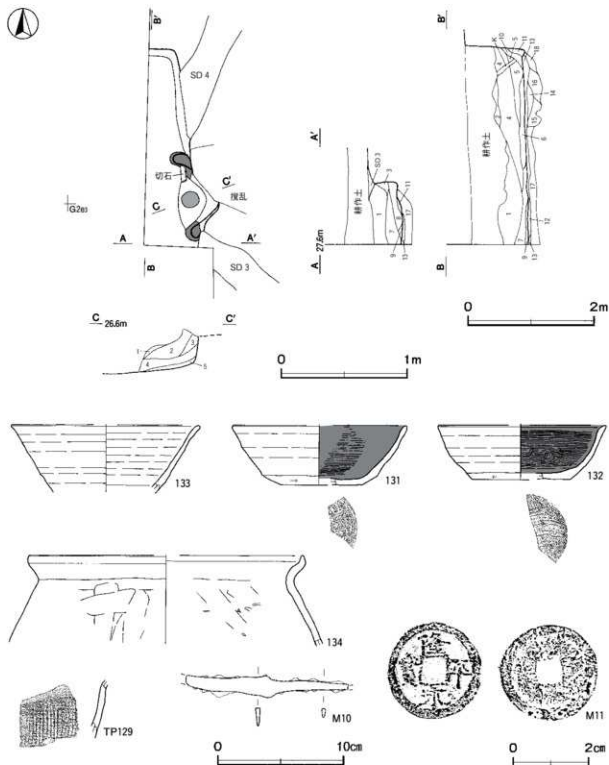
1	暗	褐色	焼土ブロック微量	4	褐	色	焼土ブロック微量
2	黒	褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量	5	黒	褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量
3	暗	褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック微量				

覆土 11 層に分層できる。第 1 層は、均質な粒子が堆積していることから、自然堆積である。第 2~11 層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第 12~18 層は、貼床の構築土である。

土層解説

1	黒	色	炭化物・ローム粒子微量	2	黒	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
---	---	---	-------------	---	---	----	------------------

- | | | | | | |
|----|-----|-----------------------|----|-----|----------------------------------|
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 | 黒褐色 | 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 黒褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化材料微量 | 13 | 黒褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 | 黒褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 14 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 6 | 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 15 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 7 | 黒色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 16 | 暗褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 8 | 黒色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 17 | 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 9 | 黒色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 18 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 10 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | | | |
| 11 | 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | | | |



第36図 第17号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片194点(坏2、甕192)、須恵器片30点(坏20、高台付坏1、甕9)、鉄製品1点(刀子)、銭貨1点(隆平永宝)、焼成粘土塊1点が出土している。また、混入した縄文土器片1点(深鉢)、瓦片1点も出土している。134は甕の覆土中、131・132・133・TP129・M10・M11は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から、9世紀後半と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表(第36図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地質	手法の特徴ほか	出土位置	備考
131	土師器	坏	[13.8]	4.8	[6.6]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下通回転ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 底面回転ヘラケズリ	覆土中	10%
132	土師器	坏	[13.3]	4.3	[7.7]	長石・石英・赤母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下通回転ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 底面回転ヘラケズリ 13排葉状	覆土中	30% PL14
133	須恵器	坏	[15.0]	(5.3)	-	長石・石英・緑輝・片状鉱物	黄灰	良好	ロカロナデ	覆土中	15%
134	土師器	甕	[21.8]	(7.1)	-	長石・石英・細礫	明赤黄	普通	口縁部外・内面撫ナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラケズリ後ナデ	甕覆土中	5%

番号	種類	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP129	須恵器	甕	長石・石英・赤母	橙	椅子状叩き	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M10	刀子	(13.0)	1.9	0.3	(13.0)	鉄	刃部・基部欠損 両面 刃部・基部断面三角形	覆土中	PL19

番号	器種	銭名	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	銭貨	隆平永宝	2.6	0.65	0.15	1.5	銅・鉛	初踏796年(延暦15年)	覆土中	PL19

表4 平安時代堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形状	主軸方向	規模		壁高 (cm)	床面	構造	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新) P18→本跡
				長軸×短軸 (m)	厚さ (cm)				土坑	土坑	貯蔵	貯蔵				
7	J 215	方形	N-25°-W	(2.12) × (0.80)	29-66	平照	-	-	-	-	-	人為	土師器片、須恵器片、刀子、陶器片	9世紀中葉		
9	M343	方形	N-13°-E	3.74 × [3.6]	12	平照	全開	-	-	-	機1	1	自然	土師器片、須恵器片、刀子、陶器片	9世紀中葉	
15	H244	方形	N-14°-W	(3.82) × 3.81	50-64	平照	ほぼ全開	4	1	-	機1	-	人為	土師器片、須恵器片	9世紀前半	
17	G 241	方形	N-75°-E	(3.12) × (0.70)	36-40	平照	-	-	-	-	機1	-	人為	土師器片、須恵器片、刀子、銭貨	9世紀後半	本跡→SD3・4

(2) 土坑

第1号土坑(第37図)

位置 調査区南部のK 2 d5区、標高25.9mの台地緩斜面部に位置している。

確認状況 大部分が調査区域外に位置しており、南東コーナー部のみを確認した。平面形状や掘り込みの深さから住居跡のコーナー部の可能性もあるが、硬化面は確認できず、全体像が不明確なため、土坑とした。

重複関係 第5号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南東コーナー部を除いた大部分が調査区域外に延びているため、南東・北西軸は1.3m、南西・北東軸0.8mしか確認できなかった。平面形状は方形もしくは長方形と推定され、南東・北西軸方向はN-62°-Wである。深さは106cmで、壁面はほぼ直立している。

覆土 6層に分層できる。第1層は、均質な粒子が堆積していることから、自然堆積である。第2-5層は、

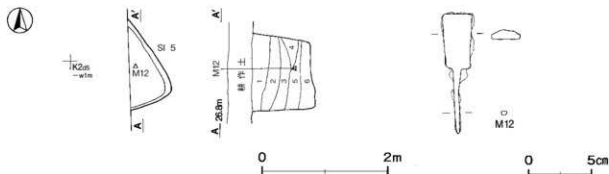
ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第6層は内容物にロームブロックが目立ち、上面が平坦であることから、意図的な埋土と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片2点(甕), 鉄製品1点(鎌)が出土している。また、混入した縄文土器片1点(深鉢)も出土している。M12は覆土下層から出土している。

所見 硬化面は確認できなかったが、埋土により平坦面を築いていることから、人の出入りを想定した遺構と考えられる。時期は、鉄鎌の形状や重複関係から平安時代と考えられるが、土器が細片のため、詳細は不明である。



第37図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表 (第37図)

番号	形種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M12	鎌	9.5	2.5	0.5	21.0	鉄	方頭斧型式 基部・鎌身部断面長方形	覆土下層	PL19

6 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明らかでない堅穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟、道路跡1条、土坑20基、溝跡3条、柱列跡4列、ピット群3か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 堅穴住居跡

第6号住居跡(第38図)

位置 調査区南部のM2c5区、標高25.4mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第1号住居に掘り込まれている。

規模と形状 西コーナー部は調査区域外に延びており、東部から中央部にかけては第1号住居に掘り込まれている。残存部から、長軸4.5m、短軸3.0mのほどの長方形と推定される。主軸方向はN-30°-Wである。壁高は13~36cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、硬化面は確認できなかった。

炉 中央部北西寄りに位置している。東部を第1号住居に掘り込まれているため、長径は58cmで、短径は

23cmしか確認できなかった。平面形は円形もしくは楕円形と推定され、床面とほぼ同じ高さの地床炉である。炉床は赤変硬化している。第1～7層は、掘方への埋土である。

炉土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	5 褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	6 褐色	焼土粒子・ローム粒子少量
3 黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量	7 褐色	ローム粒子微量
4 暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量		

ピット 2か所。P1・P2は深さ18cm・20cmで、性格不明である。

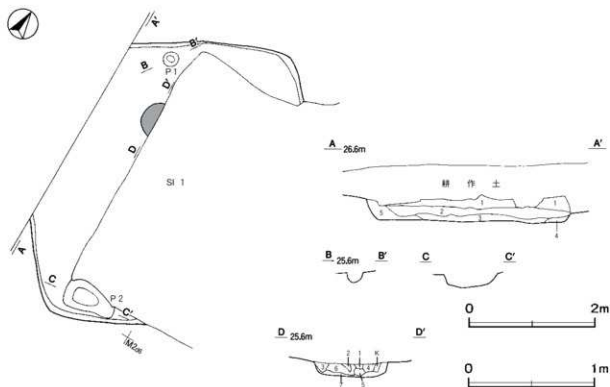
覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
2 黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	5 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量		

遺物出土状況 縄文土器片16点(深鉢)、弥生土器片11点(壺), 土師器片19点(甕18, 小形甕1)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 出土土器や住居の形状、重複関係から弥生時代から古墳時代と考えられるが、土器が細片のため、詳細は不明である。



第38図 第6号住居跡実測図

第11号住居跡 (第39図)

位置 調査区南部のL3区、標高25.8mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、南北軸は3.03mで、東西軸は1.07mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、南北軸方向はN-21°-Wである。壁高は12cmで、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、墾際を除く部分が踏み固められている。

ピット 2か所。P1・P2は深さ21cm・37cmで、配置から主柱穴である。

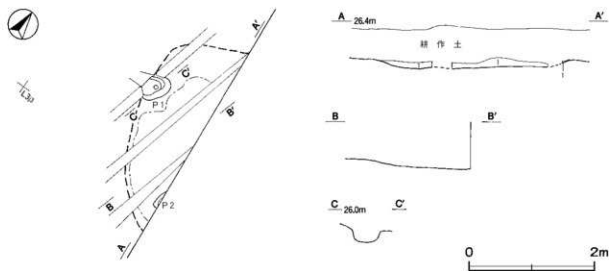
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片1点(壺),土師器片1点(甕)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、根拠となる遺物が出土していないため、不明である。



第39図 第11号住居跡実測図

表5 時期不明堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規模		壁高 (cm)	床面 種類	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 遺構関係 (古→新)
				長軸×短軸 (m)	厚			土坑	出入口	ピット	伊・甕				
6	M 2の	[長方形]	N-30°-W	[45] × [30]	16~36	平坦	-	-	2	伊1	-	人為	彌生土器片、 弥生土器片、土師器片	弥生-古墳	本跡→51
11	L 313	[方形 長方形]	N-21°-W	[303] × [1,007]	12	平坦	-	2	-	-	-	人為	弥生土器片、土師器片	不明	

(2) 掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡 (第40図)

位置 調査区南部のL 313~L 313区、標高25.8mの台地緩斜面部に位置している。

規模と構造 南北軸N-15°-Eの側柱建物跡で、北部から東部にかけて調査区域外に延びているため、南北軸は3間、東西軸は1間しか確認できなかった。規模は、確認できた部分で南北軸4.95m、東西軸1.80mで、面積は891㎡である。柱間寸法は南北軸が1.65m(5.5尺)で、均等に配置されている。

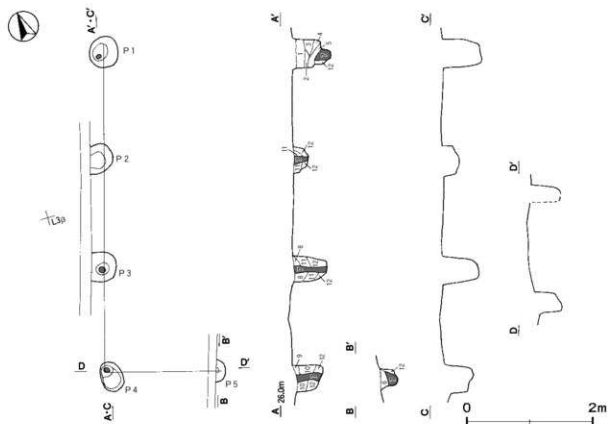
柱穴 5か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径は35~52cm、短径は35~40cmである。深さは26~64cmで、断面形はU字状である。第1~6層は柱抜き取り後の覆土である。第7層は柱痕跡、第8~12層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

1 黒褐色	ロームブロック少量、黒色土ブロック微量	7 黒褐色	黒色土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・黒色土ブロック微量	8 黒褐色	黒色土ブロック・ローム粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量、黒色土ブロック微量	9 黒褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック微量
4 褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量	10 褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量
5 暗褐色	黒色土ブロック・ローム粒子少量	11 褐色	ローム粒子中量、黒色土ブロック少量
6 黒褐色	ローム粒子少量、黒色土ブロック微量	12 暗褐色	ロームブロック少量、黒色土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片3点(亮)が各柱穴から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 遺構全体が確認できておらず、土器が細片のため、時期・性格ともに不明である。



第40図 第6号掘立柱建物跡実測図

第7号掘立柱建物跡 (第41図)

位置 調査区北部のH2b3～H2c4区、標高27.0mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第8号掘立柱建物跡・第4号柱列跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 南北軸N-6°-Wの掘立柱建物跡で、西部が調査区域外に延びているため、南北軸は2間で、東西軸は1間しか確認できなかった。規模は、確認できた部分で南北軸4.20m、東西軸1.80mで、面積は7.56㎡である。南北軸の柱間寸法は、南から1.80m(6尺)・2.40m(8尺)で、ばらつきがある。

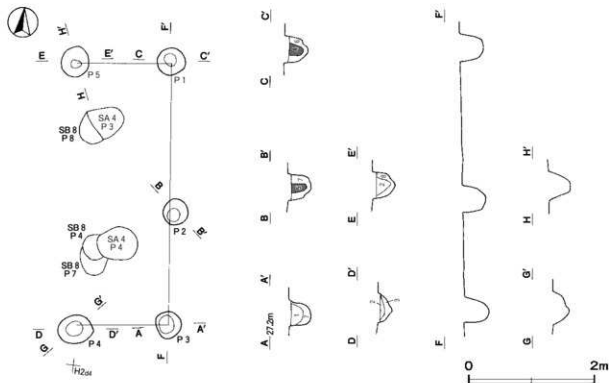
柱穴 5か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径は42～58cm、短径は40～48cmである。深さは24～45cmで、断面形はU字状である。第1～3層は柱抜き取り後の覆土である。第4・5層は柱痕跡、第6～8層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック中量	7 黒褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ローム粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片1点(甕)が出土しているが、細片のため図示できない。

所見 遺構全体が確認できておらず、土器が細片のため、時期・性格ともに不明である。



第41図 第7号掘立柱建物跡実測図

第8号掘立柱建物跡 (第42図)

位置 調査区北部のH2b3～H2c4区、標高27.0mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第4号柱列に掘り込まれている。第7号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 南北軸N-16°-Wの総柱建物跡で、西部が調査区域外に延びているため、南北軸は2間で、東西軸は1間しか確認できなかった。規模は、確認できた部分で南北軸3.90m、東西軸1.80mで、面積は7.02㎡である。柱間寸法は南北軸が1.95m(6.5尺)で、ほぼ均等に配置されている。

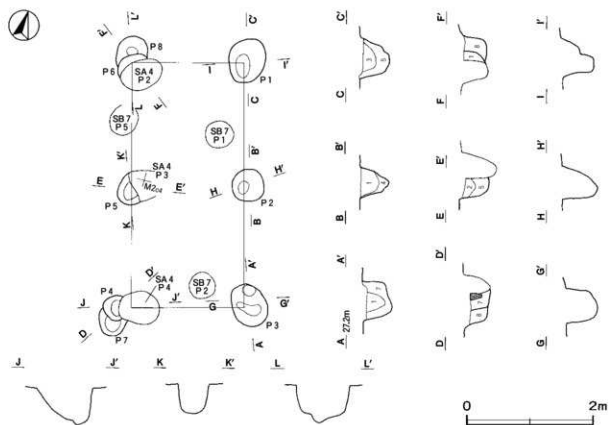
柱穴 8か所。土層断面から、P8からP6、P7からP4へと柱の立て替えが行われたものと考えられる。平面形は円形もしくは楕円形で、長径は42～76cm、短径は52～56cmである。深さは37～60cmで、断面形はU字状である。第1～5層は柱抜き取り後の覆土である。第6層は柱痕跡、第7層は掘方への埋土である。第8層は柱の立て替えが行われる以前の柱穴の覆土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

1 黒色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	5 黒色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック中量	6 黒色	ローム粒子極微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	7 黒色	ロームブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック少量	8 黒色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片4点(甕)、須恵器片1点(蓋)が各柱穴から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 全体が確認できていないため、性格は不明である。時期は、出土土器から8世紀以降と考えられるが、いずれも細片のため、詳細は不明である。



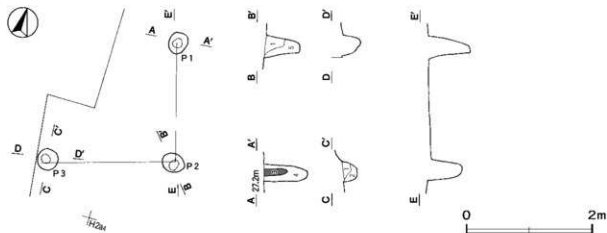
第42図 第8号掘立柱建物跡実測図

第10号掘立柱建物跡 (第43図)

位置 調査区北部のG2j3～G2j4区、標高27.0mの平坦な台地上に位置している。

規模と構造 南北軸N-15°-Wの掘立柱建物跡で、北西部が調査区域外に延びているため、南北軸・東西軸ともに1回しか確認できなかった。規模は、確認できた部分で南北軸1.80m、東西軸2.10mである。

柱穴 3か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径は34～48cm、短径は30～34cmである。深さは30～66cmで、断面形はU字状である。第1・2層は柱抜き取り後の覆土である。第3層は柱痕跡、第4・5層は掘方への埋土である。



第43図 第10号掘立柱建物跡実測図

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

1 黒色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 黒色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	5 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒色	ローム粒子・焼土粒子少量		

遺物出土状況 土師器片3点(甕), 須恵器片1点(坏)が各柱穴から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 全体が確認できていないため、性格は不明である。時期は、出土土器から8世紀以降と考えられるが、いずれも細片のため、詳細は不明である。

表6 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	南北軸方向	柱間数	規模 (間)	面積 (㎡)	柱間寸法		柱穴		主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)	
						南北 (m)	東西 (m)	構造	柱穴				平面形
6	L303 L303 L303	N-15°-E	3 × (1)	4.95 × (1.80)	(891)	1.65	1.80	欄柱 (5)	円形・楕円形	25~44	土師器片	不明	
7	H203 H203 H203	N-6°-W	2 × (1)	4.20 × (1.80)	(756)	1.80	2.40	欄柱 (5)	円形・楕円形	25~45	土師器片	不明	本跡・S0 8・ SA 4
8	H203 H203 H203	N-16°-W	2 × (1)	3.90 × (1.80)	(702)	1.95	1.80	総柱 (8)	円形・楕円形	35~40	土師器片・ 須恵器片	8世紀以降	S0 7・本跡→ SA 4
10	G203 G203 G203	N-15°-W	(1) × (1)	(1.80) × (2.10)	(378)	1.80	2.10	欄柱 (3)	円形・楕円形	30~46	土師器片・ 須恵器片	8世紀以降	

(3) 道路跡

第1号道路跡 (第44図)

位置 調査区中央部のI2e3~I2e4区、標高26.9mの台地緩斜面部に位置している。

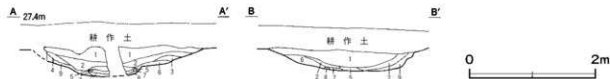
規模と形状 北東方向(N-43°-E)に直線的に延びている。両端が調査区域外に延びているため、長さは5.56mしか確認できなかった。土幅1.45~1.72m、下幅0.90~1.14m、深さ0.34~0.48mの溝状の掘り込みの底面を道路として使用している。掘り込みの断面は浅いU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 9層に分層できる。第1・2層は、黒色土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第5・7・8層の上面及び地山面がそれぞれ硬化しており、路面は4面存在したものと考えられる。第5・7・8層は締まりが強く、上面が硬化していることから路面の構築土と考えられる。第3・4・6・9層はロームブロックが含まれており、壁面の形状を維持するための意図的な埋土と考えられる。

土層解説

1 黒色	黒色土ブロック少量、ローム粒子微量	7 黒色	黒色土ブロック・ローム粒子・暗赤褐色粒子少量、 細礫微量
2 黒色	黒色土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量	8 黒色	ロームブロック・暗赤褐色粒子中量、黒色土ブロック 少量、細礫微量
3 黒色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量	9 黒褐色	ローム粒子中量、ロームブロック少量
4 黒色	ロームブロック、黒色土ブロック少量		
5 黒色	ロームブロック、黒色土ブロック少量		
6 黒褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック少量		

遺物出土状況 土師器片16点(甕), 須恵器片6点(蓋4, 甕2)が覆土中から出土している。いずれも細片であり、混入したものと考えられる。

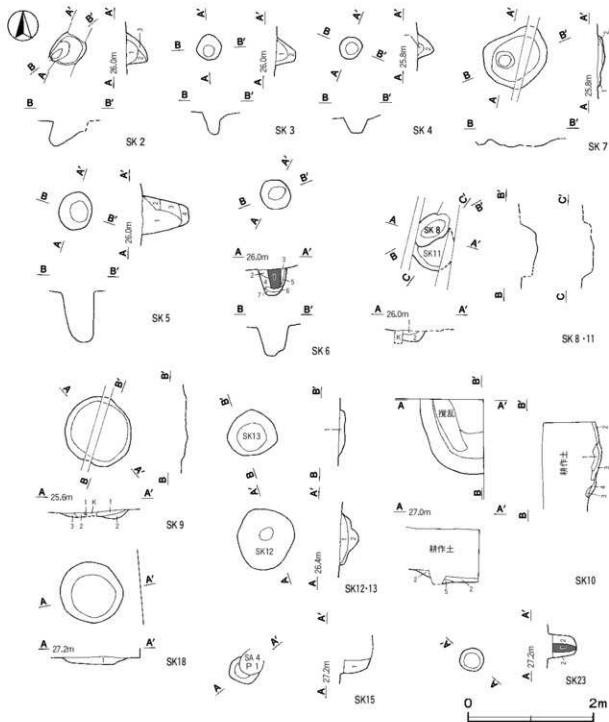


第44図 第1号道路跡実測図

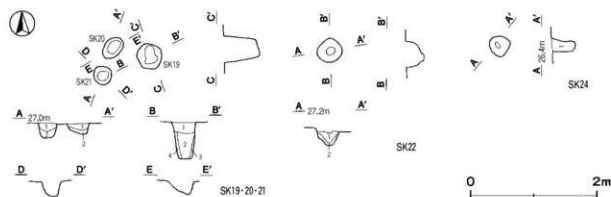
所見 路面と地表面の高低差が廃絶時まで維持されていることから、道路に加えて区画のための溝としての機能も有していた可能性がある。時期は、根拠となる遺物が出土していないため、不明である。

(4) 土坑

ここでは、時期・性格ともに不明な土坑 20 基について、実測図と土層解説、一覧表を掲載する。なお、形状や土層から柱穴と考えられるものに関しても、ここに掲載する。



第 45 図 その他の土坑実測図 (1)



第46図 その他の土坑実測図(2)

第2号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

第3号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
- 2 黒色 ロームブロック少量

第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

第5号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
- 2 黒色 ロームブロック中量
- 3 黒色 ローム粒子少量
- 4 黒色 ロームブロック中量

第6号土坑土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量(柱状跡)
- 2 黒色 ロームブロック中量
- 3 黒色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・黒色土粒子少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、黒色土粒子微量
- 6 黒褐色 ロームブロック中量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量

第7号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック、黒色土ブロック、炭化粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、黒色土粒子微量

第9号土坑土層解説

- 1 黒色 黒色土ブロック少量、ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、黒色土ブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第10号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量
- 4 明黄褐色 ロームブロック多量
- 5 濃い黄褐色 ローム粒子多量

第12号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第13号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第15号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

第18号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第19号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第20号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第21号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第22号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子少量

第23号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量、焼土粒子微量(柱状跡)
- 2 黒褐色 ロームブロック中量

第24号土坑土層解説

- 1 黒色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

表7 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重層関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	L 2b5	N-68°-E	楕円形	0.56 × 0.30	35	皿状	縦斜	人為	土師器片	
3	L 2b5	-	円形	0.44 × 0.42	33	皿状	外傾・ 縦斜	人為	土師器片	
4	L 2a5	-	円形	0.38 × 0.36	25	皿状	外傾	人為	染土器片	
5	L 2a5	N-18°-E	楕円形	0.62 × 0.55	82	皿状	直立	人為	土師器片	
6	L 2f3	-	円形	0.48 × 0.48	47	皿状	直立	人為	土師器片	
7	M3d3	N-67°-E	楕円形	1.05 × 0.86	12	凸凹	縦斜	人為	土師器片	
8	L3d3	N-39°-E	楕円形	(0.80) × 0.40	28	平皿	縦斜	自然	土師器片	SK11 → 本跡
9	M3a3	-	円形	1.12 × 1.04	6	平皿	縦斜	人為		
10	K3a1	-	[楕円形]	(1.20) × (1.00)	22	皿状	縦斜	人為	土師器片、須恵器片	
11	L3d3	N-52°-E	楕円形	(0.60) × (0.40)	18	平皿	縦斜	不明		本跡 → SK 8
12	K 2b5	N-12°-W	楕円形	0.99 × 0.92	30	皿状	縦斜	人為	土師器片、須恵器片	
13	K 2b5	N-38°-E	楕円形	0.80 × 0.73	10	平皿	外傾・ 縦斜	人為	土師器片、須恵器片	
15	H 2b3	N-40°-W	楕円形	0.50 × 0.38	55	皿状	直立	人為		
18	H 2a4	-	円形	1.00 × 1.00	8	平皿	縦斜	人為	土師器片、須恵器片	
19	G 2e4	-	円形	0.43 × 0.40	56	皿状	直立	人為		
20	G 2e3	N-46°-E	楕円形	0.40 × 0.28	20	楕円	外傾	人為		
21	G 2e3	-	円形	0.30 × 0.30	24	皿状	外傾	人為		
22	H 2c3	-	円形	0.40 × 0.38	30	凸凹	外傾	人為→ 自然		
23	H 2e4	-	円形	0.40 × 0.36	45	皿状	直立	人為		
24	J 2e5	N-54°-W	不整形円形	0.32 × 0.30	37	平皿	直立	人為		

(5) 溝跡

第1号溝跡 (第47図)

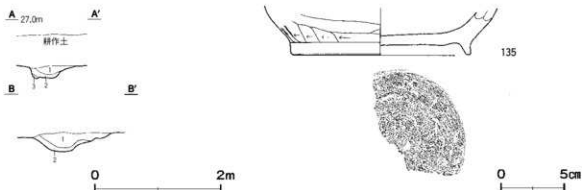
位置 調査区中央部のJ 2c4～J 2e5区、標高26.3mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 北西方向(N-38°-W)に直線的に延びている。両端が調査区域外に延びているため、長さは7.50mしか確認できなかった。上幅0.39～0.60m、下幅0.12～0.38m、深さ18～32cmである。断面は浅いU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は、北西部・南東部ともに26.06mである。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒 色 ロームブロック・黒色土ブロック微量
2 黒 褐色 色 ロームブロック・黒色土ブロック少量
3 褐 色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量



第47図 第1号溝跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 瓦質土器片1点(鉢)、馬歯1点が出土している。また、混入した弥生土器片1点(壺)、土師器片45点(坏4、甕41)、須恵器片12点(坏10、高台付坏2)も出土している。135は覆土上層、B1は覆土中から、それぞれ出土している。

所見 底面の標高が均一であることから、区画のための溝と考えられる。出土遺物から中世以降と考えられるが、根拠となる遺物が少ないため、詳細は不明である。

第1号溝跡出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地質	手法の特徴ほか	出土位置	備考
135	瓦質土器	鉢	-	(38)	[14.0]	長石・石英・細礫	黄灰	普通	体部下端ヘラケズリ	覆土上層	10% PL14
番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	特 徴			出土位置	備考	
B1	馬歯	(61)	(23)	(17)	(12.8)	一部欠損			覆土中	PL17	

第3号溝跡(第48図)

位置 調査区北部のG2e3～G2e4区、標高26.8mの台地緩斜面部に位置している。

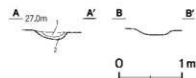
重複関係 第17号住居跡を掘り込んでいる。第4号溝跡との新旧関係は、攪乱により確認できなかった。

規模と形状 北西方向(N-68°-W)に直線的に延びている。両端が調査区域外に延びているため、長さは4.85mしか確認できなかった。上幅0.46～0.59m、下幅0.12～0.23m、深さ5～13cmである。断面は浅いU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は、北西部が26.750m、南東部が26.677mで、北西部から南東部に向かって、緩やかに傾斜して深くなっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 照 陽 色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 2 濁 色 ロームブロック中量、焼土粒子微量



所見 底面が斜面に沿って傾斜していることから、排水のための溝と考えられる。時期は、重複関係から9世紀後半以降と考えられるが、遺物が出土していないため、詳細は不明である。

第48図 第3号溝跡実測図

第4号溝跡(第49図)

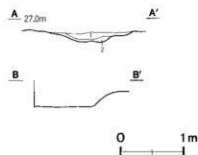
位置 調査区北部のG2c4～G2d3区、標高26.8mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第17号住居跡を掘り込んでいる。第3号溝跡との重複関係は、攪乱により確認できなかった。

規模と形状 北東方向(N-28°-E)に直線的に延びている。両端が調査区域外に延びているため、長さは7.61mしか確認できなかった。上幅1.14～1.46m、下幅0.22～0.48m、深さ16～23cmである。断面は浅いU字状で、壁は外傾して立ち上がっている。底面の標高は、南西部が26.635m、北東部が26.572mで、南西部から北東部に向かって、緩やかに傾斜して深くなっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

- 土層解説**
- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 遺物出土状況** 土師器片 10点 (坏1、甕9) が出土しているが、いずれも細片であり、混入したものと考えられる。
- 所見** 地形に逆行して傾斜しているため、特殊な用途が想定されるが、詳細は不明である。時期は、重複関係から9世紀後半以降と考えられるが、根拠となる遺物が出土していないため、不明である。



第49図 第4号溝跡実測図

表8 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模			断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)						深さ(cm)
1	J 2e4-J 2e5	N-38°-W	(直線)	(7.50)	0.39~0.60	0.12~0.38	18~32	赤土質土	外傾	人為	瓦質土器片、瓦片	
3	G 2e3-G 2e4	N-68°-W	(直線)	(4.85)	0.86~0.59	0.12~0.13	5~13	赤土質土	外傾	人為	-	SI17→本跡・SD 4
4	G 2e4-G 2e5	N-28°-E	(直線)	(7.61)	1.14~1.46	0.22~0.48	16~23	赤土質土	外傾	人為	-	SI17→SD 3・本跡

(6) 柱列跡

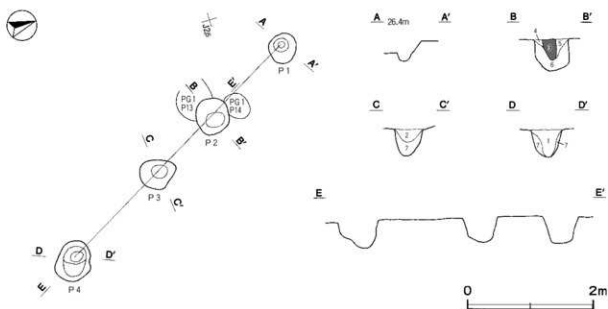
第1号柱列跡 (第50図)

位置 調査区南部のJ 2 i5~J 2 j5区、標高26.0mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第1号ピット群P 13・P 14を掘り込んでいる。

規模と構造 5.38mの間に柱穴4か所を確認した。列方向はN-29°-Wで、柱間は南から1.95m (6.5尺)、1.20m (4尺)、1.65m (5.5尺)とばらつきがある。

柱穴 4か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径は44~66cm、短径は44~56cmである。深さは21~



第50図 第1号柱列跡実測図

50cmで、断面形はU字状である。第1・2層は柱抜き取り後の覆土である。第3層は柱痕跡、第4～7層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 黒色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 | 5 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量 | 6 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 3 黒色 ローム粒子・炭化物少量 | 7 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片1点(甕)がP3から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 柱間が不揃いであるが、掘立柱建物跡の一部の可能性がある。時期は、土器が細片のため不明である。

第2号柱列跡（第51図）

位置 調査区中央部のJ25区～J25区、標高262mの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第2号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 3.30mの間に柱穴3か所を確認した。列方向はN-24°-Wで、柱間寸法は1.50m（5尺）で、ほぼ均等に配置されている。

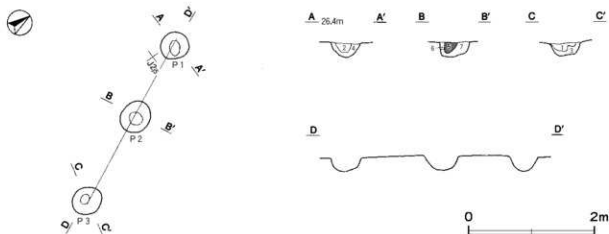
柱穴 3か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径は48～50cm、短径は40～46cmである。深さは24cmで、断面形はU字状である。第1～4層は柱抜き取り後の覆土である。第5層は柱痕跡、第6・7層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量 | 5 黒色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 6 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子中量 | 7 極暗褐色 ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 土師器片3点(甕)がP1から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 柱間がほぼ均等であることから掘立柱建物跡の一部と考えられる。時期は、土器が細片のため不明である。



第51図 第2号柱列跡実測図

第3号柱列跡 (第52図)

位置 調査区南部のJ2h5～J2i5区、標高26.1mの台地緩斜面部に位置している。

規模と構造 4.61mの間に柱穴4か所を確認した。列方向はN-26°-Wで、柱間は南から0.90m(3尺)、1.80m(6尺)、1.20m(4尺)とばらつきがある。

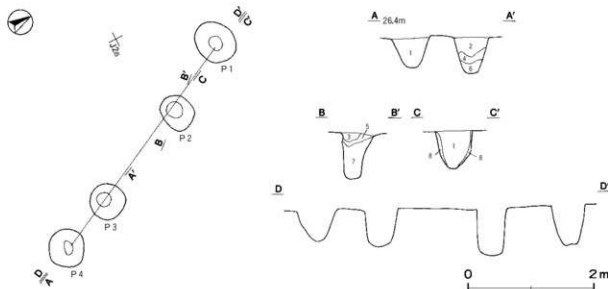
柱穴 4か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径は60～70cm、短径50～56cmである。深さは58～76cmで、断面形はU字状である。第1～7層は柱抜き取り後の覆土である。第8層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

1 黒色 ローム粒子微量	5 暗褐色 ロームブロック中量
2 黒色 ロームブロック少量、焼土粒子微量	6 暗褐色 ロームブロック少量
3 黒褐色 ロームブロック少量	7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	8 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片14点(甕)、須恵器片4点(坏2、高台付坏1、蓋1)が各柱穴から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 柱間が不揃いであるが、掘立柱建物跡の一部の可能性がある。時期は、出土土器から8世紀中葉以降と考えられるが、いずれも細片のため、詳細は不明である。



第52図 第3号柱列跡実測図

第4号柱列跡 (第53図)

位置 調査区北部のH2b3～H2c3区、標高27.0mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第8号掘立柱建物跡・第15号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 6.00mの間に4か所の柱穴を確認した。列方向はN-15°-Wで、柱間寸法は1.80m(6尺)で、ほぼ均等に配置されている。

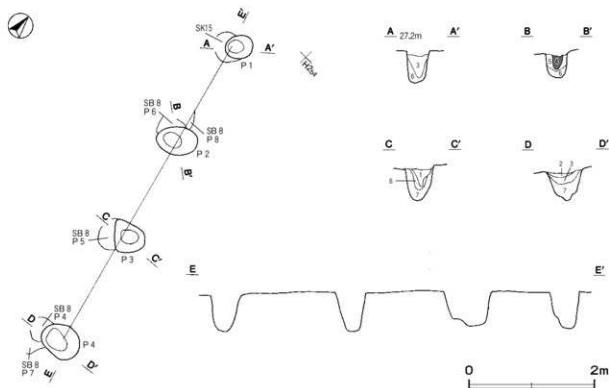
柱穴 4か所。平面形は円形もしくは楕円形で、長径は50～66cm、短径38～50cmである。深さは42～66cmで、断面形はU字状である。第1～3層は柱抜き取り後の覆土である。第4層は柱痕跡である。第5～7層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

1 黒色 ロームブロック微量	5 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック少量	6 黒褐色 ロームブロック微量
3 黒色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 黒色 ロームブロック少量
4 黒褐色 ローム粒子少量	

遺物出土状況 縄文土器片2点(深鉢)、土師器片4点(甕)、須恵器片1点(坏)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 柱間がほぼ均等であることから、掘立柱建物跡の一部と考えられる。時期は、出土土器から8世紀以降と考えられるが、いずれも細片のため、詳細は不明である。



第53図 第4号柱列跡実測図

表9 柱列跡一覧表

番号	位置	列方向	柱穴数	柱穴平面形	長さ(m)	柱間(m)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	時期	備考 重複関係(古→新)
1	J 215 ~ J 215	N-29°-W	4	円形・楕円形	5.28	1.95・1.20・1.65	44~66	44~56	21~50	土師器片	不明	PG 1 - P13・P14 → 本跡
2	J 215 ~ J 215	N-24°-W	3	円形・楕円形	3.20	1.50	48~50	40~46	24	土師器片	不明	本跡・PG 2
3	J 215 ~ J 215	N-26°-W	4	円形・楕円形	4.61	0.90・1.80・1.20	60~70	50~56	58~76	土師器片・須恵器片	8世紀中葉	
4	H 213 ~ H 213	N-15°-W	4	円形・楕円形	6.00	1.80	50~66	38~50	42~66	土師器片・須恵器片	8世紀以降	SK 8・SK15 → 本跡

(7) ビット群

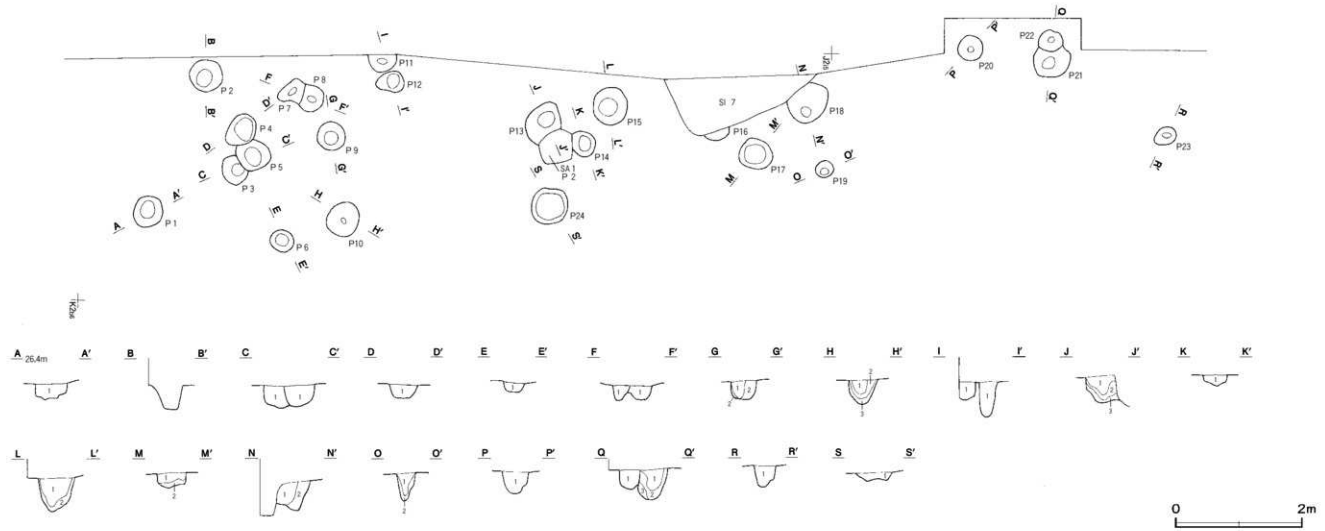
第1号ビット群 (第54図)

位置 調査区南部のJ 2h4 ~ K 2a5区、標高26.1 ~ 26.2mの台地上緩斜面部に位置している。

確認状況 西部の大部分が調査区域外に延びている。本跡は掘立柱建物跡を伴う複数の遺構が混在している可能性が高いが、現時点ではセト関係を明確にできないため、ビット群として報告する。

重複関係 P 13・P 14は第1号柱列に、P 16・P 18は第7号住居に、それぞれ掘り込まれている。

規模と形状 東西3.78m、南北14.82mの長方形の範囲にビット24か所を確認した。形状は長径30 ~ 72cm、



第54図 第1号ピット群実測図

P 1 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

P 3 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

P 4 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

P 5 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

P 6 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック中量

P 7 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック少量

P 8 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

P 9 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子微量
2 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

P 10 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子少量
2 黒 褐色 ロームブロック少量
3 黒 褐色 ロームブロック少量

P 11 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子中量

P 12 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック中量

P 13 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
2 黒 褐色 ロームブロック少量
3 黒 褐色 ロームブロック中量

P 14 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

P 15 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子中量
2 暗 褐色 ローム粒子中量

P 17 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

P 18 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック少量
2 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

P 19 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
2 黒 褐色 ロームブロック微量

P 20 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子微量

P 21 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子微量
2 黒 褐色 ローム粒子少量
3 暗 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

P 22 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子少量

P 23 土層解説
1 黒 褐色 ローム粒子微量

P 24 土層解説
1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

径径 26～63cmの円形または楕円形である。深さは17～60cmで、断面形はU字状である。

覆土 明確な柱痕跡は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器片6点(甕)、須恵器片1点(坏)が、各柱穴から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期・性格ともに土器がいずれも細片であり、柱穴同士のセット関係も不明確なため、不明である。

第1号ピット群計測表

番号	形状	規 格 (cm)			出土遺物	番号	形状	規 格 (cm)			出土遺物
		長径	短径	深さ				長径	短径	深さ	
1	楕円形	52	46	38		13	楕円形	52	46	34	
2	円形	52	50	39	土師器片2(甕)	14	楕円形	44	38	17	
3	楕円形	48	42	41		15	楕円形	59	53	-	
4	楕円形	58	44	33		16	[円形・楕円形]	42	(15)	-	
5	楕円形	55	48	45		17	円形	48	46	27	
6	楕円形	40	36	23		18	[円形・楕円形]	72	(55)	-	土師器片1(甕)
7	不整形	46	36	39	土師器片1(甕)	19	楕円形	30	26	45	
8	楕円形	42	34	27		20	円形	40	40	37	
9	円形	44	44	33		21	円形	62	38	52	須恵器片1(甕) 土師器片1(甕)
10	楕円形	58	48	40		22	楕円形	38	34	38	
11	[円形・楕円形]	44	(28)	32		23	楕円形	39	27	35	土師器片1(甕)
12	楕円形	46	36	60		24	円形	58	56	14	

第2号ピット群 (第55図)

位置 調査区中央部のJ25区、標高26.1mの台地緩斜面部に位置している。

確認状況 本跡は、ピットの位置関係から住居跡の柱穴の可能性はあるが、周囲に根拠となる痕跡を確認できなかったため、ピット群として報告する。

重複関係 第2号柱列跡との重複関係は不明である。

規模と形状 東西1.95m、南北2.02mの方形の範囲にピット4か所を確認した。形状は長径54～66cm、短径48～62cmの円形または楕円形である。深さは53～88cmで、断面形はU字状である。

覆土 第1～5層は柱抜き取り後の覆土である。第6層は柱痕跡、第7～9層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

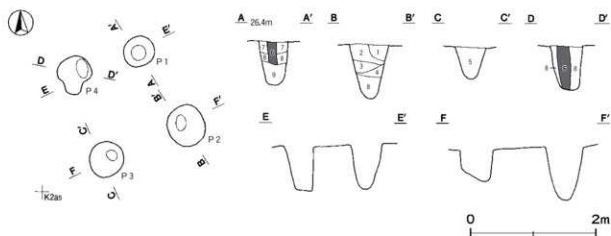
1 黒褐色	ローム粒子中量	6 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
2 黒色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ローム粒子多量、黒色土粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック中量	8 暗褐色	ローム粒子多量
4 黒色	ロームブロック微量	9 黒色	ローム粒子少量
5 黒色	ローム粒子少量		

遺物出土状況 土師器片1点(甕々)がP4から出土しているが、細片のため図示できない。

所見 配列状況から住居跡の柱穴の可能性はある。時期は、土器が細片のため、不明である。

第2号ピット群計測表

番号	形状	規 格 (cm)			番号	形状	規 格 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
1	円形	50	48	73	3	円形	58	54	53
2	円形	66	62	88	4	楕円形	60	54	72



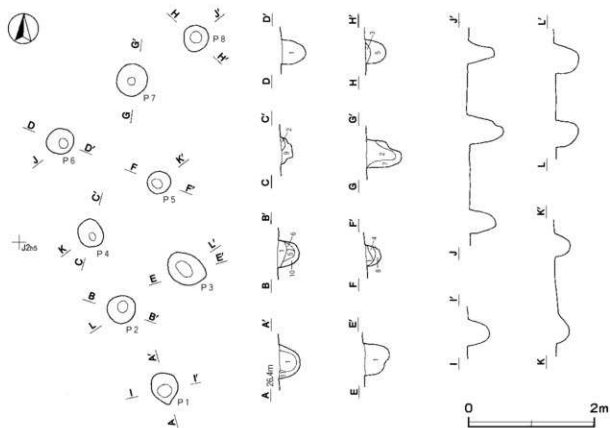
第55図 第2号ピット群実測図

第3号ピット群 (第56図)

位置 調査区中央部のJ 2g5～J 2h5区、標高26.3mの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 東西3.17m、南北5.42mの長方形の範囲にピット8か所を確認した。形状は長径36～66cm、短径36～48cmの円形または楕円形である。深さは18～58cmで、断面形はU字状である。

覆土 第1～6層は柱抜き取り後の覆土である。第7～11層は掘方への埋土である。



第56図 第3号ピット群実測図

柱穴土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | | | |
|---|-----|----------------|----|-----|------------------|
| 1 | 黒色 | ローム粒子微量 | 7 | 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 2 | 黒色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | 8 | 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 9 | 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック少量 | 10 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 | 黒褐色 | ロームブロック微量 | 11 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 | 黒色 | ロームブロック微量 | | | |

遺物出土状況 縄文土器片2点(深鉢)、弥生土器片1点(壺)、須恵器片1点(坏)が各柱穴から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器から8世紀以降と考えられるが、細片のため、詳細は不明である。

第3号ビット群計測表

番号	形状	縦 横 (cm)			番号	形状	縦 横 (cm)		
		長径	短径	深さ			長径	短径	深さ
1	楕円形	54	40	33	5	円形	36	26	26
2	円形	45	45	36	6	楕円形	46	40	42
3	楕円形	66	48	42	7	円形	52	48	58
4	楕円形	46	38	18	8	円形	42	38	48

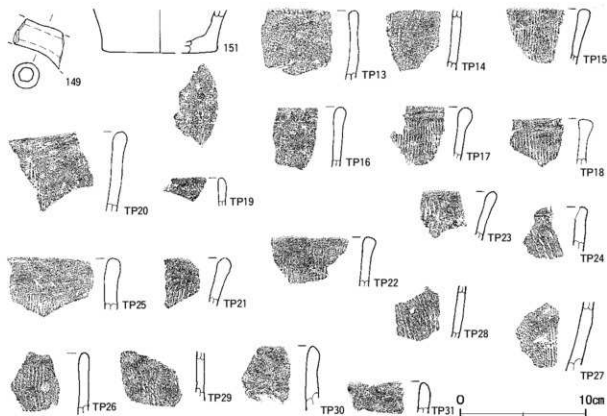
表 10 ビット群一覧表

番号	位 置	柱穴	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備 考 (重複関係 古→新)
1	J 2b4~K 2a5	24	円形・楕円形	30~72	26~63	17~60	土師器片、須恵器片	本跡・S7・SA 4
2	J 2j5	4	円形・楕円形	56~66	48~62	53~88	土師器片	本跡・SA 2
3	J 2d5~J 2h5	8	円形・楕円形	36~66	36~48	18~58	縄文土器片、須恵器片	

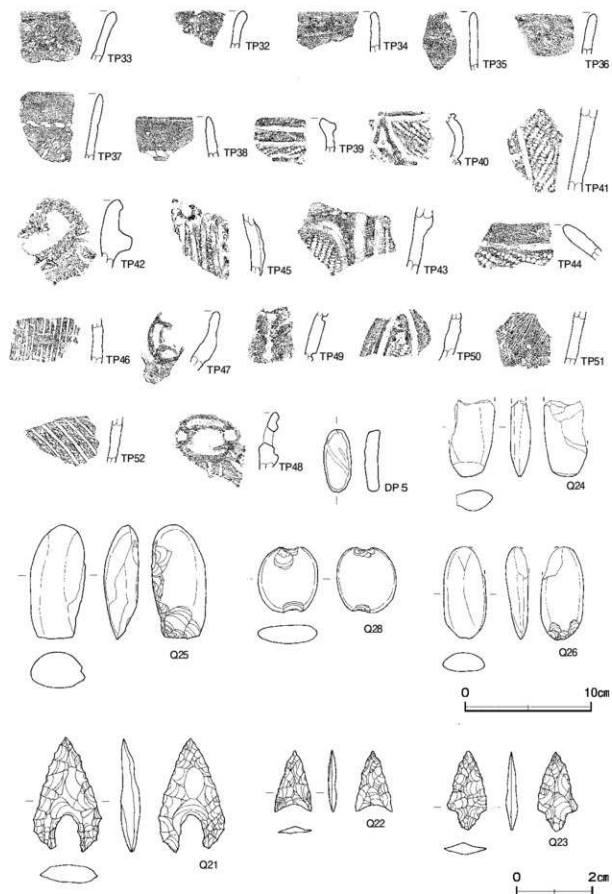
(8) 遺構外出土遺物 (第57~63図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。

ア 縄文時代の遺物 (第57・58図)



第57図 遺構外縄文出土遺物実測図(1)



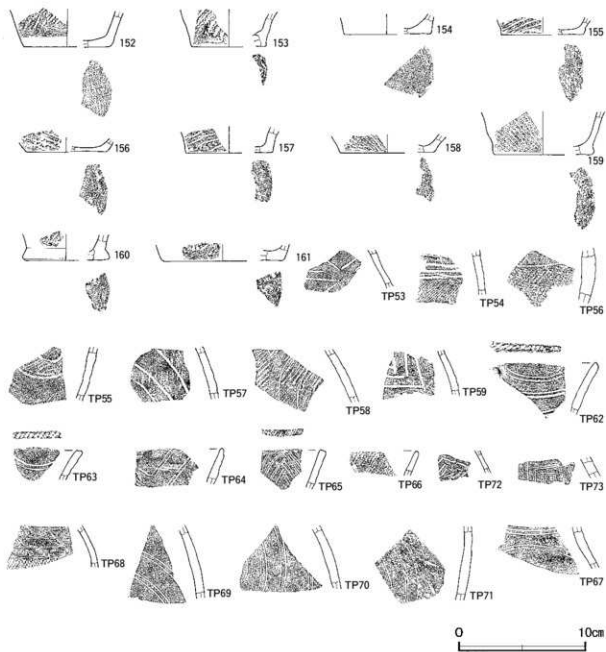
第58図 遺構外縄文出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物（縄文時代の遺物）観察表（第 57・58 図）

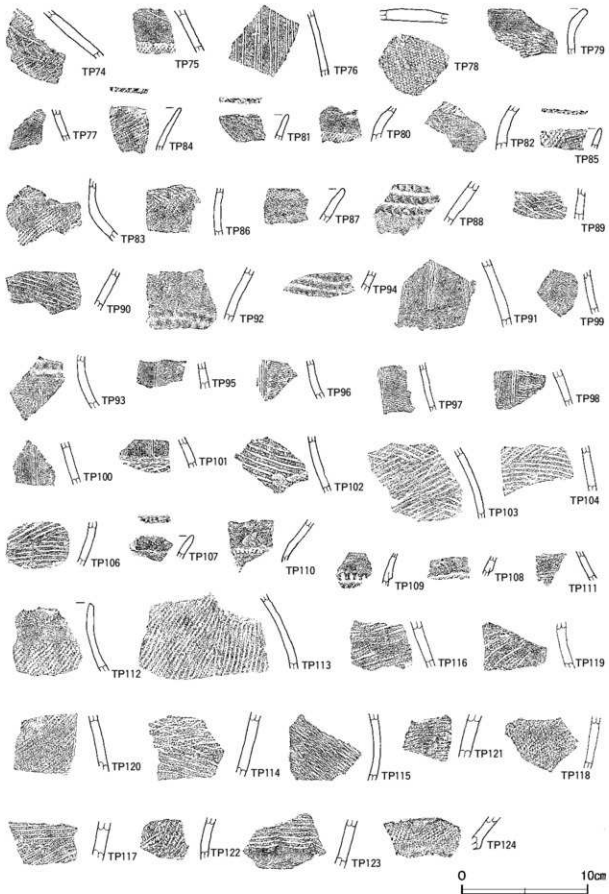
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
149	縄文土器	口口器	—	(40)	—	長石・石英	橙	普通	ナガ調整	Bプロック表土	5%
151	縄文土器	深鉢	—	(34)	[94]	長石・石英・細礫	橙	普通	ナガ調整	SI 2	5%
番号	種別	器種	胎土			色調	手法の特徴ほか			出土位置	備考
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	—			靑灰	熱赤文系土器	縄文LR施文	SI 2	縄文中層 PL15
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	—			灰黄緑	熱赤文系土器	縄文LR施文	SI 6	縄文中層 PL15
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫、赤色粒子	—			にぶい靑	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 2	縄文中層 PL15
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・黒色粒子	—			にぶい黄橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 1	縄文中層 PL15
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	Aプロック表土	縄文中層 PL15
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 1	縄文中層 PL15
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	—			橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 1	縄文中層
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	Aプロック表土	縄文中層 PL15
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			靑灰	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 1	縄文中層
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			にぶい黄橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 2	縄文中層 PL15
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			にぶい黄橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 3	縄文中層
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	—			にぶい橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	Aプロック表土	縄文中層 PL15
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			にぶい橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	Aプロック表土	縄文中層 PL15
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			靑灰	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 2	縄文中層
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英・黒色粒子	—			橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 2	縄文中層 PL15
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			にぶい橙	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 2	縄文中層
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			灰黄	熱赤文系土器	熱赤R施文	SI 6	縄文中層 PL15
TP30	縄文土器	深鉢	長石・石英・黒色粒子	—			靑	熱赤文系土器	無文	SI 6	縄文中層 PL15
TP31	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	—			橙	熱赤文系土器	無文	SI 6	縄文中層 PL15
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			にぶい黄橙	熱赤文系土器	無文	SI 1	縄文中層 PL15
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	—			橙	熱赤文系土器	無文	SI 1	縄文中層 PL15
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			橙	熱赤文系土器	無文	SI 6	縄文中層 PL15
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			にぶい靑	熱赤文系土器	無文	SI 6	縄文中層
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			灰黄緑	熱赤文系土器	無文	Aプロック表土	縄文中層
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			灰黄緑	熱赤文系土器	口縁部無文 縄文原形 LR・LR 押圧	Aプロック表土	縄文中層
TP38	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母、赤色粒子	—			にぶい靑	熱赤文系土器	口縁部無文 縄文原形 LR 押圧	Aプロック表土	縄文中層
TP39	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	—			にぶい靑	縄文LR施文後 隆帯胎付	隆帯胎付	SI 3	胎付胎付
TP40	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	—			靑灰	縄文LR施文後 隆帯胎付	隆帯胎付沈線	Bプロック表土	胎付胎付
TP41	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫、赤色粒子	—			にぶい橙	縄文LR施文後 沈線	—	PG 3 P 6	胎付胎付
TP42	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	—			にぶい橙	高急状隆帯	表採	胎付胎付 PL15	胎付胎付
TP43	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	—			明赤靑	縄文LR施文後 隆帯胎付	—	—	胎付胎付
TP44	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	—			にぶい靑	縄文LR施文 口縁部無文	—	SI 2	胎付胎付
TP45	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			橙	隆帯胎付後 円形刺突文・縦位の沈線	—	SI 15	胎付胎付 PL15
TP46	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	—			にぶい黄橙	縦位の沈線	—	SI 1	胎付胎付
TP47	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			灰黄緑	円形刺突文 沈線	—	Aプロック表土	胎付胎付 PL15
TP48	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			にぶい橙	円形刺突文 沈線	—	SI 2	胎付胎付 PL15
TP49	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			にぶい黄橙	円形刺突文	—	Aプロック表土	胎付胎付
TP50	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	—			にぶい橙	縄文LR施文後 沈線	—	SI 9	胎付胎付
TP51	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫、赤色粒子	—			橙	沈線文	—	SI 2	胎付胎付
TP52	縄文土器	深鉢	長石・石英	—			靑灰	縄文施文後 沈線	—	SI 2	胎付胎付
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴			出土位置	備考
DP 5	土器片断	50	22	1.1	14.5	長石・石英・赤色粒子・細礫	縄文施文後 2条の沈線			SI 9	PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 21	石皿	3.0	1.7	0.4	1.5	頁岩	両基無茶線 両面押圧痕跡 基部にU字状の欠入	SI 2	PL18
Q 22	石皿	2.1	1.1	0.35	0.3	チャート	両基無茶線 両面押圧痕跡	SI 3	PL18
Q 23	石皿	1.6	1.0	0.2	0.7	チャート	有茶線 両面押圧痕跡	Aフロック 表土	PL18
Q 24	磨製石斧	6.2	3.6	1.6	83.0	砂岩	先端部研削 一部欠損	Aフロック 表土	PL18
Q 25	磨製石斧	9.1	4.4	2.8	(167.2)	砂岩	先端部打撃による欠損	Aフロック 表土	PL18
Q 26	磨製石斧	7.4	3.4	1.8	(62.2)	砂岩	先端部打撃による欠損	SI 3	PL18
Q 28	石鉢	5.2	4.8	1.5	52.3	砂岩	上・下部部に押圧痕跡	SI 2	PL18

イ 弥生土器 (第59・60図)



第59図 遺構外弥生出土遺物実測図(1)



第60図 遺構外弥生出土遺物実測図(2)

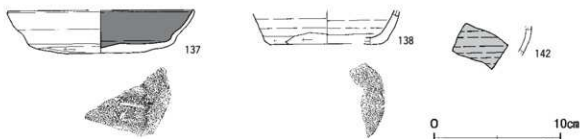
遺構外出土遺物（弥生土器）観察表（第59・60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
132	弥生土器	甕	-	(29)	(70)	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	附加糸1種縄文 下濶ナデ	底部布目痕	Fプロック表土 5% 粘り強	
133	弥生土器	甕	-	(28)	(60)	長石・石英・針状鉱物	にぶい褐色	普通	附加糸1種縄文	底部本巻痕	SI 2 5% 粘り強	
134	弥生土器	甕	-	(16)	(69)	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	附加糸2種縄文	底部布目痕	SI 1 5% 粘り強	
135	弥生土器	甕	-	(14)	(66)	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	附加糸縄文	底部布目痕	SI 1 5% 粘り強	
136	弥生土器	甕	-	(11)	(34)	長石・石英・赤球・黒色粒子	明褐色	普通	附加糸2種縄文	底部布目痕	Aプロック表土 5% 粘り強	
137	弥生土器	甕	-	(21)	(70)	長石・石英	褐色	普通	附加糸2種縄文	底部布目痕	Fプロック表土 5% 粘り強	
138	弥生土器	甕	-	(14)	(74)	長石・石英・雲母	褐色	普通	附加糸縄文	底部砂痕	SI 2 5% 粘り強	
139	弥生土器	甕	-	(34)	(78)	長石・石英・赤球・黒色粒子	灰褐色	普通	附加糸1種縄文	底部砂痕*	Fプロック表土 5% 粘り強	
160	弥生土器	甕	-	(21)	(68)	長石・石英・赤球・黒色粒子	にぶい褐色	普通	附加糸1種縄文	下濶に工具痕	底部本巻痕	SI 2 5% 赤り差
161	弥生土器	甕	-	(13)	(96)	長石・石英・赤球・針状鉱物	明赤褐色	普通	附加糸1種縄文*	底部ナデ	SI 2 5% 赤り差	

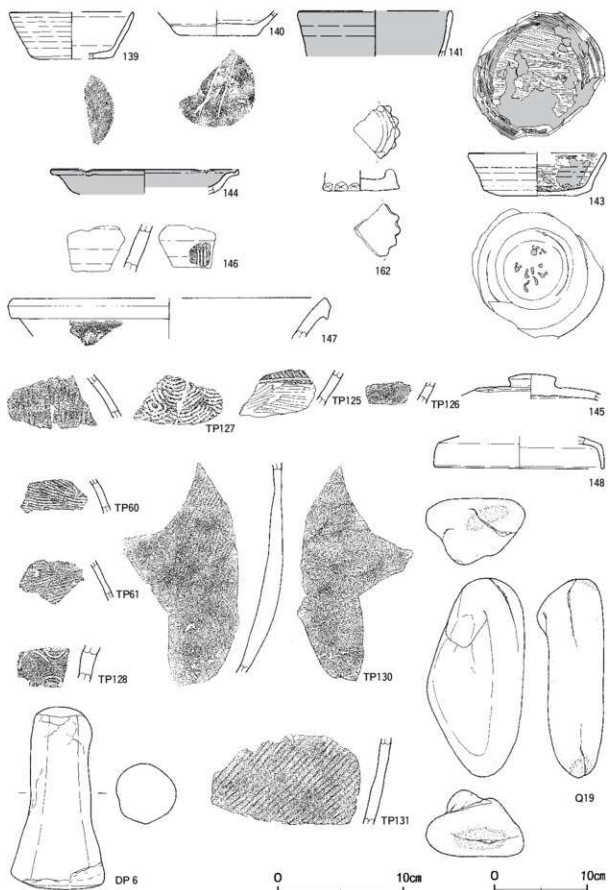
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T153	弥生土器	甕	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	沈殿区画内に磨消縄文穴痕	SK 5	粘り強付 PL16
T154	弥生土器	甕	雲母・針状鉱物・黒色粒子	浅黄褐色	縄文施文後、3本の沈殿 穿孔1ヶ所	SI 2	粘り強付 PL16
T155	弥生土器	甕	長石・雲母・針状鉱物	黒褐色	沈殿区画された磨消文内にて磨消縄文穴痕	SI 3	粘り強付 PL16
T156	弥生土器	甕	長石・雲母・針状鉱物	褐色	沈殿区画内は無文	SI 9	粘り強付 PL16
T157	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物・赤色粒子	褐色	1本沈殿による磨消文	SI 3	粘り強付 PL16
T158	弥生土器	甕	長石・石英	褐色	附加糸1種縄文施文後、1本沈殿による磨消文	SI 3	粘り強付 PL16
T159	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい黄褐色	東西向文	Aプロック表土	粘り強付 PL16
T162	弥生土器	甕	石英・針状鉱物	にぶい褐色	口唇部に原形押圧 口縁部2本同時施文具による重畳施文 施文1ヶ所	SI 3	粘り強付 PL16
T163	弥生土器	甕	石英・雲母	にぶい褐色	口唇部に原形押圧 口縁部2本同時施文具による重畳文	SI 3	粘り強付 PL16
T164	弥生土器	甕	石英・細粒・黒色粒子	褐色	2本同時施文具による重畳山形文	SI 3	粘り強付 PL16
T165	弥生土器	甕	石英・針状鉱物	褐色	口唇部に原形押圧 2本同時施文具による重畳山形文	SI 5	粘り強付 PL16
T166	弥生土器	甕	石英・針状鉱物	にぶい黄褐色	口唇部に原形押圧 外面縄文施文 内面2本同時施文具による沈殿	Dプロック表土	粘り強付 PL16
T167	弥生土器	甕	長石・石英・雲母・針状鉱物・細粒	にぶい褐色	2本同時施文具による重畳文と隣接する沈殿	SI 3	粘り強付 PL16
T168	弥生土器	甕	石英・針状鉱物・赤色粒子	灰褐色	2本同時施文具による重畳する沈殿3本 下部は附加糸1種縄文文*	SI 2	粘り強付 PL16
T169	弥生土器	甕	石英・雲母・針状鉱物	明赤褐色	2本同時施文具による磨消文	SI 3	粘り強付 PL16
T170	弥生土器	甕	長石・石英・雲母・針状鉱物・黒色粒子	にぶい黄褐色	2本同時施文具による磨消文	SI 3	粘り強付 PL16
T171	弥生土器	甕	長石・石英・雲母・針状鉱物・細粒	褐色	2本同時施文具による磨消文	SI 3	粘り強付 PL16
T172	弥生土器	甕	長石・石英	灰黄褐色	三角文を囲む重畳文	Fプロック表土	粘り強付 PL16
T173	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物	にぶい赤褐色	2本同時施文具による東西向文	SI 16	粘り強付 PL16
T174	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物	にぶい赤褐色	磨消文施文後、2本同時施文具による沈殿	SI 2	粘り強付 PL16
T175	弥生土器	甕	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	2本同時施文具による沈殿	Bプロック表土	粘り強付 PL16
T176	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物	灰褐色	2本同時施文具による縦位の沈殿	SI 3	粘り強付 PL16
T177	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物	褐色	2本同時施文具による重畳山形文	SI 3	粘り強付 PL16
T178	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物・黒色粒子	にぶい褐色	布目痕	SI 1	粘り強付 PL16
T179	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物・黒色粒子	褐色	口唇部に原形押圧 口縁部横ナデ	Fプロック表土	粘り強付 PL16
T184	弥生土器	甕	石英	褐色	口唇部に原形押圧 附加糸1種縄文	SI 1	粘り強付 PL16
T181	弥生土器	甕	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	口唇部に原形押圧	Fプロック表土	粘り強付 PL16
T185	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい黄褐色	口唇部に原形押圧	SI 6	粘り強付 PL16
T180	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい褐色	口縁部外横ナデ 附加糸1種縄文	SI 1	粘り強付 PL16
T182	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい黄褐色	附加糸1種縄文	SI 3	粘り強付 PL16
T183	弥生土器	甕	長石・石英・赤色粒子	褐色	附加糸1種縄文	SI 5	粘り強付 PL16
T186	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい赤褐色	附加糸1種縄文 羽状磨痕	SI 3	粘り強付 PL16
T187	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい赤褐色	口唇部に原形押圧 2～3本同時施文具による波状文	SI 3	粘り強付 PL16
T192	弥生土器	甕	石英・針状鉱物・細粒	にぶい赤褐色	6本同時施文具による波状文 隆帯2条	Dプロック表土	粘り強付 PL16

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP94	弥生土器	甕	長石・石英	橙	流状文 段帯3条	SI 1	付随品
TP98	弥生土器	甕	長石・石英・雲母	にぶい橙	段帯3条 大形品の可能性	SI 3	付随品
TP89	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい橙	附加条2種縄文 大形品の可能性	SI 2	付随品
TP90	弥生土器	甕	長石・石英・細礫	にぶい橙	附加条2種縄文 ^々 大形品の可能性	SI 2	付随品
TP91	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい橙	6本同時施文具による縦位の沈線と流状文	Fプロック表土	付随品
TP93	弥生土器	甕	石英・赤色粒子	にぶい赤褐	6本同時施文具による縦位の沈線と流状文 段帯3条 ^々	Fプロック表土	付随品
TP95	弥生土器	甕	長石・石英・細礫	にぶい橙	6本同時施文具による縦位の沈線と流状文	Fプロック表土	付随品
TP96	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい赤褐	複数本同時施文具による縦位の沈線と流状文	SI 1	付随品
TP97	弥生土器	甕	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	6本同時施文具による縦位の沈線と流状文	SI 1	付随品
TP98	弥生土器	甕	長石・石英・細礫	にぶい褐	4本同時施文具による縦位の沈線と流状文	SI 3	付随品
TP99	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	6本同時施文具による流状文	Fプロック表土	付随品
TP103	弥生土器	甕	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	7本同時施文具による縦位の沈線と流状文	SI 9	付随品
TP101	弥生土器	甕	長石・石英・細礫	にぶい橙	6本同時施文具による縦位の沈線と流状文	SI 1	付随品
TP102	弥生土器	甕	長石・石英・赤色粒子・雲母	にぶい赤褐	附加条2種縄文	SI 3	付随品 PL16
TP103	弥生土器	甕	長石・石英	明褐	附加条2種縄文	SI 10	付随品 PL16
TP104	弥生土器	甕	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	附加条縄文 羽状構成	SI 6	付随品 PL16
TP106	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	附加条縄文 羽状構成	SI 1	付随品
TP107	弥生土器	高坏	長石・石英・細礫	橙	複合口縁 口唇部にキザミ 流状文	SI 10	付随品
TP110	弥生土器	甕	長石・赤色粒子	にぶい橙	研究文	SI 1	弥生直展 PL16
TP109	弥生土器	甕	長石・石英・細礫	にぶい橙	複合口縁 口縁部下端に原形押圧	Fプロック表土	弥生直展 PL16
TP108	弥生土器	甕	長石・石英	橙	複合口縁 口唇部に原形押圧 附加条1種縄文	表土	弥生直展
TP111	弥生土器	甕	長石・細礫	にぶい橙	連続突による施文	SI11	弥生直展 PL16
TP112	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい褐	縄文施文後 ナテ	Fプロック表土	弥生直展
TP113	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物・細礫	明赤褐	附加条1種縄文	Fプロック表土	弥生直展 PL16
TP116	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物・細礫	橙	附加条1種縄文	SI 3	弥生直展
TP119	弥生土器	甕	長石・石英	明赤褐	附加条1種縄文	SI 1	弥生直展
TP120	弥生土器	甕	長石・石英・雲母	橙	附加条2種縄文	Fプロック表土	弥生直展
TP115	弥生土器	甕	長石・石英・細礫	にぶい褐	附加条縄文	SI 2	弥生直展 PL16
TP114	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物	橙	飾点文	SI 3	弥生直展
TP117	弥生土器	甕	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	附加条1種縄文	SI 3	弥生直展
TP118	弥生土器	甕	長石・石英・細礫	にぶい橙	附加条1種縄文	SI 2	弥生直展
TP121	弥生土器	甕	長石・石英	橙	附加条2種縄文	SI 1	弥生直展
TP122	弥生土器	甕	長石・石英・細礫	にぶい橙	附加条2種縄文	SI 1	弥生直展
TP123	弥生土器	甕	長石・石英	にぶい橙	附加条1種縄文	SI 3	弥生直展 PL16
TP124	弥生土器	甕	長石・石英・針状鉱物・細礫	明赤褐	底部に押状印痕	SI 3	弥生直展

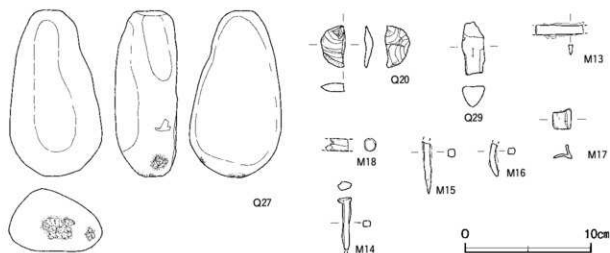
ウ その他の遺物 (第 61 ~ 63 図)



第 61 図 遺構外その他出土遺物実測図 (1)



第 62 図 遺構外その他出土遺物実測図 (2)



第 63 図 遺構外その他出土遺物実測図 (3)

遺構外出土遺物 (その他) 観察表 (第 61 ~ 63 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
137	土師器	坏	[14.8]	3.4	[11.6]	長石・石英・赤色粒子	灰黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ 底部ヘラケズリ後、ナ	Bフロック 表土	10%
138	須恵器	坏	-	(2.6)	[9.0]	長石・石英・細礫	灰黄	良好	体部下端・底部回転ヘラケズリ	Aフロック 表土	10%
139	須恵器	坏	[9.8]	3.8	[6.6]	長石・石英・細礫・黒色粒子	灰白	良好	体部下端無調整 底部回転ヘラケズリ後、扇縁ナデ	Eフロック 表土	10%
140	須恵器	坏	-	(2.1)	6.4	長石・石英・針状石英・細礫・赤色粒子	灰ナマリヤ	良好	底部回転ヘラケズリ後、ナデ・ヘラ書き	Aフロック 表土	10%
141	陶器	瓶	[12.0]	(3.7)	-	精製	■ 黒 ■ 白 ■ 赤	良好	外・内面施釉	Fフロック 表土	5%
142	陶器	碗	-	(2.4)	-	精製	■ 黒 ■ 白 ■ 赤	良好	外・内面施釉	Fフロック 表土	5%
143	土師器	高台付坏	[30.8]	3.5	6.2	長石・石英・針状石英・細礫・赤色粒子	■ 黒 ■ 白 ■ 赤	普通	体部下端回転ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 高台潤滑 内面・底部部・高台直縁部に漆付着	Fフロック 表土	70% PL14
144	陶器	皿	[15.0]	(2.0)	-	精製	■ 黒 ■ 白 ■ 赤	良好	外・内面施釉	Aフロック 表土	5%
145	須恵器	蓋	-	(2.1)	-	長石・石英・細礫	明赤陶	普通	天井部回転ヘラケズリ後、つまみ貼り付け	Bフロック 表土	25%
146	陶器	障鉢	-	(3.8)	-	長石・石英・黒色粒子	■ 黒 ■ 白 ■ 赤	良好	曜日目4条以上	Bフロック 表土	5%
147	須恵器	甕	[25.0]	(3.3)	-	長石・細礫	暗灰	良好	外面磨輪状工具による波状文	Bフロック 表土	5%
148	須恵器	甕	[13.6]	(2.6)	-	長石・細礫	灰	良好	口ロナデ	SA 2 P.3	15%
162	不明	不明	-	(1.8)	[6.2]	長石・石英	にぶい陶	普通	体部下端に突起4か所 輪縁部縁部にキザミ	Eフロック 表土	5% PL14

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP125	土師器	壺	長石・石英・細礫	灰陶	縄文乱、施文後、沈積・ヘラミガキ	Dフロック 表土	内壇前期
TP126	土師器	壺	長石・石英・赤色粒子	橙	捺糸し施文後、ナデ	Aフロック 表土	内壇前期
TP127	須恵器	甕	長石・石英・黒色粒子	黄灰	縦位の平行叩き 同心円文の当具痕	Aフロック 表土	
TP128	須恵器	甕	長石	灰陶	磨輪状工具による波状文	Bフロック 表土	
TP130	須恵器	甕	長石	灰	平行叩き 無文の当具痕	Bフロック 表土	
TP131	須恵器	甕	長石・石英・黒色粒子	灰黄陶	平行叩き 内面ヘラナデ	Bフロック 表土	
TP60	不明	不明	長石・石英・黒色粒子	明赤陶	染灰文もしくはハケ目	SI 3	
TP61	不明	不明	長石・石英・黒色粒子	明赤陶	染灰文もしくはハケ目	SI 3	

番号	器種	種別	最大径	高さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考	
DP 6	支脚	支脚	3.8	7.6	14.5	61.9	長石・石英	ナデ調整 底部に布目痕	Eフロック 表土	PL17

番号	器種	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 19	磨石	磨石	20.9	10.4	7.0	1.838	安山岩	磨面2面	SK 9	
Q 20	使用痕跡	使用痕跡	3.3	1.9	0.7	3.4	チャート	磨面1か所 微細な月こぼれ	SI 5	
Q 27	磁石	磁石	13.3	7.4	5.0	65.8	砂岩	縦行痕3か所	Fフロック 表土	PL18
Q 29	砥石	砥石	4.2	1.8	1.9	1.55	燧灰岩	砥面1面	Bフロック 表土	

番号	形種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M13	刀子	(3.9)	0.8	0.3	(4.8)	鉄	刃部・基部欠損	Fブロック表土	PL19
M14	釘	(4.2)	1.1	0.5	(2.5)	鉄	先端部欠損 断面方形	Aブロック表土	PL19
M15	釘	(4.2)	0.6	0.6	(2.4)	鉄	頭部欠損 断面方形	Bブロック表土	PL19
M16	釘	(2.5)	0.5	0.5	(1.7)	鉄	頭部欠損	Bブロック表土	PL19
M17	鎌*	(1.8)	(1.5)	1.1	(2.2)	鉄	刃部・柄付部欠損	Bブロック表土	PL19
M18	磨骨	(1.9)	0.9	1.0	(1.2)	銅	磨骨	Eブロック表土	PL19

第4節 ま と め

1 はじめに

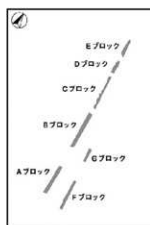
宮後遺跡は、中丸川と本郷川の合流点の北東部に位置し、標高26mの南北に伸びる台地の緩斜面部に立地している。今回の調査区は、遺跡範囲のほぼ中央部を南北に細く貫いている。今回の調査により、縄文時代から平安時代にかけての遺構と遺物を確認した。ここでは、遺構や遺物にみられる特徴について時期ごとに概観し、まとめたい。

2 縄文時代・弥生時代

縄文時代の遺構は、草創期の陥し穴1基（第1号陥し穴）、中期の土坑1基（第17号土坑）を確認した。第1号陥し穴については、遺物が出土していないため時間的な位置付けが困難であるが、遺構の埋没状況から、草創期のものと推定される。

当時代の遺構に伴う遺物は出土していないが、新しい時代の遺構や表土から遺物が出土している。土器は、早期・中期・後期のものがみられ、中でも早期摺系文系土器の出土量が突出して多い点が特徴である。同様の傾向は、本郷川右岸の向野A遺跡にもみられる。摺系文系土器については、縄文による施文がみられるもの、摺系による施文がみられるもの、無文のものに大別した。これら摺系文系土器の出土はAブロック内（調査区南部）の遺構及び表土には限定されており、台地南部の緩斜面地周辺に当時の生活域を想定できる。石器類については、石鎌（Q21～Q23）、石斧（Q24～Q26）、石錘（Q28）が出土している。Q21は、基部にU字状の深い挿入が見られ、摺系文系土器に伴う時期のものとみられる。石斧は、Q26が局部磨製石斧であり、Q24・Q25は打撃による破損のため先端部の研磨の有無が確認できなかったが、これと同質の石材を用いていることから、同時期の所産である可能性が高い。また、全体数が少ないため詳述はできないが、中期の遺物に関しては、第17号土坑（フラスコ状土坑）と近接した時期の可能性があり、周辺に集落跡の存在が想定される。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡1軒（第12号住居跡）を確認した。第12号住居跡から出土した土器は細片が多いが、識別可能なものは中期後半（足洗式期）の時期である。しかし、現状では周辺地域における当該期の住居形態について不明な部分が多く、今後の検討が必要である。本跡から出土した壺（41）は、頭部に突帯が巡っており、特徴的である。頭部と口縁部の境に突帯が巡る土器については、板井式や宮ノ台式などの中期の壺に類例がみられ、他地域との交流を想起させる遺物である。このほか、新しい時代の遺構や表



第64図 調査区呼称略図

土からは土器片が出土している。これらの土器には、中期前半（猪式期）から後期後半（十玉台式期）までのものがみられる。このうち、中期後半と後期後半の土器が大部分を占めており、中期前半、後期前半（東中根式期）のものは少量である。また、このほかTP60・TP61についても、器面の調整が条痕文の可能性はある。この場合は当時代に位置付けられが、細片のため詳細は不明である¹⁾。

3 古墳時代

竪穴住居跡5軒（第2・3・8・10・13号住居跡）を確認した。このうち、第2・3・8・10号住居跡は6世紀後葉、第13号住居跡は重複関係から6世紀中葉以前である。これらの住居跡は、いずれも調査区南部（Aブロック・Fブロック）に集中しており、集落が台地緩斜面部の南部を中心として展開していた可能性を示唆している。

まず、住居跡の規模に目を向けてみたい。ここで注目されるのが、第2号住居跡の規模である。本跡の規模は南北軸8.20mで、他の住居跡と比較しても傑出している。市域における古墳時代後期の住居跡で長軸が8mを超えるものについては、武田西端遺跡、三反田下高井遺跡、部田野山崎1遺跡、半分山遺跡、船窪遺跡で確認されているほか、鷹ノ巣遺跡からも同程度の規模と推定される住居跡が確認されており、地域内や集落内において格別の立場にあった人物の住居であった可能性がある。

次に、特徴的な遺物についてみていきたい。

第65図3は土師器で、第2号住居跡から出土している。本遺物は、当遺跡において普遍的にみられる土器群とは異なった特徴を有し、色調はやや白味が強く、口縁部外面及び内面にはヘラミガキが施されている。これに加え、黒色処理にも他の遺物との差異が認められる。破損面を観察すると、表面から1mmほどの厚さで黒色化が層を成している。視覚的には平安時代の土師器に施されている黒色処理に近く、炭素吸着によるものとみられる。ここで挙げた特徴のうち、外面のヘラミガキと炭素吸着による黒色処理は、後期後半の福島県会津地方の土師器群に多くみられる特徴であり、製作にあたり、福島県会津地方の土器工人が関与した可能性がある²⁾（第65図）。この土師器群が搬入品であるのか、「製作技法を熟知した者」が当遺跡周辺で製作したものであるのかについては、胎土観察において在地の遺物との明確な差異が認められなかったため、明言はできない。ただ、同様の遺物が当遺跡において1点³⁾しか確認できなかった

点を鑑みれば、工人の移動よりもモノの移動と捉えておくのが自然であろう。今後、周辺遺跡の事例を含め、改めて検討したい。なお、第2号住居跡からは鉛を素材とした耳環¹⁾も出土しており、他地域の特徴を持つ土器とともに大形の住居跡から出土したことは、特筆できる。

このほか、当遺跡からは土師器の製作技法を知る上で興味深い資料がいくつか出土しているため、ここで触れておきたい。第2号住居跡出土の14、第3号住居跡出土の25は、当初、手捏土器と考えたが、当遺跡から出土した手捏土器に口縁部や内面に横ナデが施された個体は皆無であり、特に内面の横ナデに関しては、

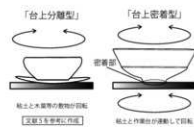
表 11 古墳時代後期の大型住居跡一覧表（長軸8m以上）

遺跡名	遺構名	時期	規模(㎡)	特徴・事項	
武田西端遺跡	第2号住居跡	後期	8.2	7.9	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第3号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第8号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第10号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第13号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
半分山遺跡	第1号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第2号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第3号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
船窪遺跡	第1号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第2号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第3号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
鷹ノ巣遺跡	第1号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第2号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。
	第3号住居跡	後期	8.1	8.1	長軸・短軸ともに、ほぼ正方形に近い形状。中層・下層ともに、ほぼ正方形に近い形状。



第65図 他地域の特徴を持つ土器と類似資料

実生活において内容物を入れることを前提とした調整とみなされることから、区別する必要があると判断した。しかし、これら2点は土師器環としても調整や器形が特徴的である。口縁部外面及び内面には横ナデが施されているが、体部外面には通常見られるようなヘラズリがみられず、ヘラミガキや指捌によるナデが隙間を空けて施されている。器内は分厚く、底部は平坦で木葉痕が残っている。これら2点については、土師器環の未成品を焼成したものの可能性があり、この場合、器内はヘラズリを施すことを前提とし、厚みをもって作られたものと推定される⁵⁾。土師器の製作技法をうかがい知ることができる遺物は、第3号住居跡からも出土している。22は土師器環で、底面に施されたヘラズリの合間に静止糸切痕に類似した痕跡が残っている。土器成形時における土器と作業台の関係について、台と素材である粘土の間に木葉等を敷いて成形を行う場合は「台上分離型」、台に直接粘土を設置した状態で成形を行う場合は「台上密着型」とそれぞれ呼ばれており⁶⁾ (第66図)、特に「台上密着型」で用いられる作業台については、これまでに回転台やロクロであるとの見地から考察がなされている。また、「台上密着型」での成形は、台と粘土が密着した状態で行われるため、成形を終えた土器を取り外す必要がある。この際、土器を持って引き剥がしては器形を損なう恐れがあり、ヘラや糸状のものを用いて取り外しが行われたものと考えられ、22の底面にはその際の痕跡が残ったものとみられる。以上の点から、当遺跡から出土した14・25は「台上分離型」、22は「台上密着型」で制作されたと考えられ、環のサイズによって「台上分離型」と「台上密着型」を使い分けて成形が行われた可能性がある。なお、「台上密着型」で製作されたと考えられる土師器環については、当遺跡の北西に位置する鷹ノ巣遺跡第50号住居跡からも出土しており、こちらの土師器環は、底部に「バリ」のような状態で粘土円板が残り、静止糸切痕に似た痕跡が確認されている。当遺跡や鷹ノ巣遺跡から出土したこれらの遺物は、土師器の製作技法を考察する上で貴重な資料と言える。



第66図 「台上分離型」、「台上密着型」概念図



第67図 「台上分離型」で成形された土師器環(昇線左)と「台上密着型」で成形された土師器環(昇線右)

以上、特徴的な遺構と遺物について述べたが、このほ少数ではあるが前期の土器片(TP125・TP126)が表土から出土しており、周囲に当該期の集落跡の存在が予想される。周辺遺跡においても、部田野山崎I遺跡や鷹ノ巣遺跡から前期の集落跡が確認されており、関連が想定される。続く中期に関しては、三反田下高井遺跡において鍛冶工房跡を擁する大集落が営まれた時期であるが、当遺跡周辺においては、当該期の集落の様相が不鮮明である。今後の調査により、集落や人々の移動の様相が明確になることに期待したい。

3. 奈良時代・平安時代

奈良時代の遺構は、竪穴住居跡5軒（第1A・1B・5・14・16号住居跡）を確認した。このうち、第5号住居跡は8世紀中葉、第1A・14・16号住居跡は8世紀後葉である。第1B号住居跡は、第1A号住居跡へと建て替えが行われる以前の住居跡である。これらの住居跡は、調査区の北部から南部（A・C・Eブロック）の広い範囲に分布しており、古墳時代と比べて集落の広い占地が想定される。

当遺跡において確認した住居跡の規模は、第16号住居跡のみ長軸5m台である可能性を残し、ほかは長軸3m台と4m台である。その中で、第5号住居跡は長軸7.14mと規模において明らかに傑出している。これに加え、間仕切り溝も本跡でのみ確認されており、この点からも特徴的な住居跡と言える。市域において第5号住居跡と近い規模であり、間仕切り溝が確認された住居跡としては、三反田下高井遺跡第166A号住居跡（8世紀前半）があげられる。また、このほか市域において長軸が7m以上の住居跡としては、武田石高遺跡第73号住居跡、（8世紀第3四半期）、武田西端遺跡第235号住居跡（8世紀第2四半期）・第259B号住居跡（8世紀第1四半期）、鷹ノ巣遺跡第32号住居跡（8世紀第2四半期）、船窪遺跡第12号住居跡（8世紀第2四半期）があげられる。これらの住居跡の分布を古代那賀郡の郷範囲⁷¹と比較すると、8世紀代を通じて武田郷に3軒、岡田郷に1軒、幡田郷に3軒という状況である。特に、三反田下高井遺跡からは中丸川を挟んだ対岸、当遺跡と鷹ノ巣遺跡からは本郷川を挟んだ対岸にあたる位置に十五郎穴横穴群が存在する。また、部田野地区には部田野横穴群が存在したことも伝わっており、これらの造営主体の観点から注目されることである。

当時代の住居跡は全て廃絶時に埋め戻されており、それに伴う遺物の廃棄にも特徴的な状況が見られた。前述した大形住居跡である第5号住居跡の北東コーナー部からは、粘土ブロックを多く含む土⁸¹が検出され、その付近から土師器坏、須恵器坏、須恵器蓋がまとまって出土している。特に須恵器蓋については、その多くが逆位で出土しており、作為的である。この出土状況が何を示すのかについては想像の域を出ないが、粘土が土器などの「生産」に関わる点から、祭祀行為の可能性も想定されるため、ここで触れておきたい。また、このほか遺構に関しては、竪に特徴がある住居跡も存在する。この点については、平安時代の住居跡にもみられるため、合わせて後述したい。

次に、特徴的な遺物についてみていきたい。84は須恵器蓋で、前項であげた第5号住居跡の北東コーナー部から出土している。内面には顕著な擦痕が残されており、ツマミの縁には摩擦によるわずかな平坦面が観察できることから、内面を上にして何かを擦る用途として使用された可能性が高い。転用履の可能性もあるが、黒痕は確認できなかった。ちなみに、鷹ノ巣遺跡第32号住居跡からは擦痕のある須恵器坏、第67号住居跡からは擦痕のある須恵器蓋が出土しており、特に第32号住居跡は大形住居跡である点が共通しており、興味深い事例である。130は須恵器円面観で、第16号住居跡から出土している。このほかにも第16号住居跡からは2点の墨書土器（119外面「三川」・内面「孝々」、120内面「□□」⁹²）や、刀子、砥石も出土しており、識字層の存在を示唆している。市域において奈良時代の住居跡³⁰から円面観が出土した例は、原の寺瓦窯跡第4号工房跡、三反田下高井遺跡第197号住居跡に次いで3例目であり、貴重な資料である。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡4軒（第7・9・15・17号住居跡）、土坑1基（第1号土坑）を確認した。このうち、第7・9号住居跡は9世紀前半、第15号住居跡は9世紀中葉、第17号住居跡は9世紀後半である。第1号土坑については、住居跡の可能性も残るが、現時点では明確にできない。当時代の住居跡は、調査区の南部から北部（B・D・E・Fブロック）の広い範囲に分布しており、奈良時代と同様に集落の広い占地が想定される。

遺構については、当遺跡の住居跡において全形を把握できたものが少ないため評述はできないが、9世紀後半の第17号住居跡のみ竈が東壁に付設されている。本跡は、当遺跡における最も新しい時期の住居跡であり、これ以前の竈は全て北壁に付設されている。平安時代に竈の付設方向の統一性が失われていく傾向は県内全域でみられ、当遺跡もその例にもれないようである。

遺物については、第17号住居跡から出土した皇朝十二銭の隆平永寶が目目される。隆平永寶の出土例は市域においては初で、茨城県内においても5例目である。県内における古代の遺構からの出土例としては、結城市下り松遺跡第55B号住居跡・第82号住居跡（各1点）、行方市木工台遺跡第10号掘立柱建物跡（1点）などが知られており、このほか龍ヶ崎市泉町から出土した中世の埋納銭の中から1点確認されている。遺構の年代に関しては、全て9世紀後半かそれ以降であり、初跡である延暦15（796）年から実に半世紀以上の時期差がある。9世紀後半には県内における皇朝十二銭の出土例が増加しており、その背景には貞観9（867）年の蓄銭禁止の厳制化に関わっていた可能性がある。古代における県内の皇朝十二銭の出土傾向として、金沢悦男氏は「地域における拠点的な集落とされる遺跡が多い」ことや、「官衙の様相の強い集落」、「仏教信仰・村堂」との関連が想定される遺跡からの出土があることを述べている¹¹⁰。現段階で当遺跡の性格を明確にすることはできないが、その一端を示す重要な遺物である。

次に、奈良時代の項で述べた奈良時代・平安時代の特徴的な竈について触れておきたい。ここで述べる「特徴的な竈」とは、袖部の補強材として泥岩の切石（以下、切石）が用いられた竈と、竈2基が並存する竈である。第1A・1B号住居跡の竈は、左袖部の焚き口部からやや煙道部寄りの部分に切石が用いられている。第16号住居跡の竈は、比較的大きい竈（竈2）と比較的小さい竈（竈1）が袖部を共用して2基が並存している。竈2の右袖部および竈1の右袖の焚き口部には切石が用いられており、竈1の焚き口部は両側が切石で補強された状態になっている。第9号住居跡の竈は、第1A・1B号住居跡と同様に左袖の焚き口部からやや煙道部寄りの部分に切石が用いられている。第17号住居跡の竈は、極端に短い袖部を有しており、左袖部の構築土中に一部が埋まった状態で、横たわった切石を確認した。櫻村宣行氏は、切石が用いられた竈のうち、特に「両袖部の先端部にピットを掘り、そこに凝灰岩や泥岩等の縦長の切石を立て、焚き口の上に横長の切石を架設して、「□」状に組み、その後ろ側になる袖や天井は黄白色砂質粘土で構築したもの」について「切石組み竈」と定義し、分析を行っている。その上で、それらの性格について、「二掛け横並びの裏を据えても耐久性のある竈にすることに主眼があったものと思われる。」¹¹²と述べている。当遺跡の例に目を向けてみた時、「切石組み竈」に該当する可能性があるのは第16号住居跡の竈1のみで、それ以外の例は、切石が焚き口部からやや煙道部寄りに埋置されていることから、強固な焚き口の構築よりも、むしろ袖部の補強に主眼を置いていたものとみられる。第16号住居跡の竈については、袖部を共有して2基が並存している点が特徴的である。竈1と竈2の新旧関係については、その可否が不明である。これら2基の竈に時期差がある場合と、ない場合、つまり「生活の変化により、竈が1基では足りなくなり、竈を付け足した場合」と、「当初から袖部を共有した竈2基を作る予定であった場合」とでは、解釈が変わってくる。後者であった場合は、袖部を共有する竈の構築方法が既に成立していた可能性がある¹¹³。目的としては、二掛け以上¹¹⁴で横並びの竈を構築することにあつたと考えられ、共有した袖部が支点となることにより、天井部の崩落防止という利点も生まれる。この、袖部を共有した2基並存の竈について、管見では部田野西原遺跡第1号住居跡の竈を除いて、周辺遺跡における類例を見出すことができなかった。ちなみに、当遺跡の第17号住居跡は8世紀後葉、部田野西原遺跡第1号住居跡は9世紀前半であり、若干の時期差がある。このことは、両遺構にみられる竈の構築方法が、時間幅を持って伝播されたことを想像させるが、類例の存在に乏しいため、現段階

で明確にすることは困難である。

最後になるが、8世紀代・9世紀代のほぼ全ての時期の住居跡が確認できたことからは、当遺跡の立地する台地が、長きにわたって集落の舞台であったことがうかがえる。周辺遺跡では鷹ノ巣遺跡や部田野西原遺跡からも同時期の住居跡が確認されており、広範囲にわたった同一の集落跡である可能性も残る。今後の調査に注目していきたい。

4 おわりに

今回の調査区は、遺跡の範囲をみればごく限られた部分であったが、特徴的な遺構や遺物を確認することができた。当遺跡の立地を目を向けたとき、南部には中丸川の蛇行によってもたらされた肥沃な沖積地が広がっており、生産基盤としては絶好の立地にあるということが言えよう。また、古墳時代後期には埴輪、奈良時代・平安時代には瓦や鉄などの生産遺跡が本郷川の支流に位置し、当遺跡が水運の分岐点とも考えられる中丸川と本郷川の合流地点にほど近い立地にあることを鑑みれば、生産物の流通における関連¹⁵⁾も想定され、このような環境を背景とする当遺跡から、古墳時代・奈良時代の大形住居跡、奈良時代の円面硯、平安時代の隆平永寶など、拠点的な集落にみられる遺構や遺物が出土したことにより、当遺跡の持つ性格の一端を垣間見ることができたものと考えらる。今後の調査により、当遺跡の性格が明確になっていくことに期待したい。

註

- 1) 縄文時代の遺物の年代観、弥生時代の土器の器種・年代観について、鈴木素行氏に御教示いただいた。御厚意に謝意を表したい。
- 2) 3 (土師器坏) については、植田健一氏・早川肇司氏に東北地方の影響がみられる点についてご教示いただいた。また、本遺物については菅原祥夫氏に実見いただき、御教示いただいた。菅原氏の所見によれば、「調整技法に加え色画(焼き上りの色)も似通っており、福岡朝の土器と混せてしまえば判別がつかないほど」とであるという。ただし、他地域にあっても、「製作技法を熟知した者」が、材料である粘土から精選を行えば、同様の土器が製作可能かもしれないとのことであった。諸氏の御教示と御厚意に、謝意を表したい。
- 3) このほか、第3号住居跡出土の26、遺構外出土の137に関して、器形が特徴的であり、東北地方の影響を受けている可能性がある。
- 4) 第2号住居跡出土の耳環については、成分分析を行った。詳細は付章を参照されたい。
- 5) 25が製作中途段階で焼成された土師器坏である可能性について、植田健一氏にご指摘いただいた。
- 6) 文献5より
- 7) 文献14より
- 8) ちなみにこの粘土は、当遺跡において甕の構築材として用いられている砂質粘土とは異なる青灰色の粘土であるため、別の用途が想定される。
- 9) これら2点は同一個体の可能性もあるが、接点がないため詳細は不明である。
- 10) 工房跡も含んでいる。
- 11) 文献18より抜粋
- 12) 文献19より抜粋
- 13) 部田野山崎1遺跡第27号住居跡(古墳時代後期前半)から、2基並設の甕が確認されている。
- 14) 二掛け「以上」としたのは、甕2のみであっても、既に二掛けで使用可能な規模であることに起因している。部田野西原遺跡第1号住居跡の甕についても、同様である。
- 15) 鷹ノ巣遺跡からは布目瓦が多く出土している。細片であることから固化されていないが、当遺跡からも布目瓦が出土している。このほか、第2号住居跡出土のDP 3についても、形象埴輪片である可能性がある。

引用・参考文献

- 1 齋木勝ほか「市原市菊間遺跡」財団法人千葉県都市公社 1974年3月
- 2 大塚初重ほか「十五部穴横穴群発掘調査報告書」茨城県勝田市教育委員会 1981年3月
- 3 川崎純徳ほか「原の寺瓦葺跡発掘調査報告書」茨城県勝田市教育委員会 1981年3月
- 4 丹波茂ほか「今熊野遺跡1 一本杉遺跡 馬越石塚遺跡」宮城県文化財調査報告書 第104集 宮城県教育委員会 1985年3月
- 5 大塚道則「相模型環の成立過程－調整・整形手法の検討から－」『土曜考古』第14号 土曜考古学研究会 1989年5月
- 6 井上義安ほか「那珂湊市部田野山崎遺跡」山崎遺跡群発掘調査会 1990年3月
- 7 鈴木道之助『図録・石器入門事典（縄文）』柏書房株式会社 1991年2月
- 8 茨城県立歴史館『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』1991年3月
- 9 福島県立博物館『東北からの弥生文化』1993年10月
- 10 井上義安ほか「那珂湊市鷹ノ巣遺跡」那珂湊市鷹ノ巣遺跡発掘調査会 1994年3月
- 11 石本弘「福島県における律令成立以前の土器様相とその背景」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会 1995年5月
- 12 宮崎修士「常陸那珂有科道路事業地内埋蔵文化財調査報告書 山崎遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第105集 1995年9月
- 13 田所剛夫ほか「一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 三反田下高井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第128集 1998年3月
- 14 佐々木義樹ほか「武田石高遺跡 奈良・平安時代編」『財』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第19集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2000年1月
- 15 三上喜孝「古代貨幣から中世貨幣へ－平安時代の銭貨流通の検討を中心に－」『第10回貨幣史研究会・東日本部会配付資料』2002年7月
- 16 安田徳ほか「阿武隈川右岸築堤遺跡調査報告2 高木・北ノ脇遺跡」『福島県文化財調査報告書』第401集 2002年11月
- 17 上高津貝塚ふるさと歴史の広場「“おかわ”はじめて物語－地方における古代銭貨の受容－」2003年3月
- 18 金沢悦男「茨城県内出土古代銭貨の歴史的背景」『“おかわ”はじめて物語－地方における古代銭貨の受容－』上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2003年3月
- 19 櫻村宣行「那珂川以北を中心とする「切石組み籠」の一考察」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年4月
- 20 白石真理ほか「武田西端遺跡 古墳時代編」『財』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第29集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2004年3月
- 21 小玉秀成「玉里村の弥生時代遺跡群」『玉里村立史料館報』第9号 玉里村立史料館 2004年3月
- 22 鈴木素行ほか「平分山遺跡」『財』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第30集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2004年3月
- 23 鈴木素行ほか「船窪遺跡」『財』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第32集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2005年3月
- 24 東北古代土器研究会福島・宮城支部『東北古代土器集－古墳時代後期－奈良・集落編－（福島）』2005年10月
- 25 東北学院大学文学部「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究」2007年5月
- 26 辻秀人「栗岡式土器の成形方法」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部 2007年5月
- 27 色川順子ほか「向野遺跡群」『財』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第36集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2007年1月
- 28 鈴木素行ほか「鷹ノ巣－第2次調査の結果－」財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2008年3月
- 29 石本弘「栗岡式土器器環製作技法に関する一試案－製作体験による報告－」『福島県文化財センター白河館 研究紀要2008』福島県文化財センター白河館 2009年3月
- 30 松本太郎「東高系の系譜と歴史的背景」『古代社会と地域間交流－土師器からみた関東と東北の様相－』国士館大学考古学会 2009年6月

第4章 部田野西原遺跡

第1節 調査の概要

部田野西原遺跡は、ひたちなか市の東部に位置し、中丸川と本郷川の合流点の北東部、南北に細く延びる標高27mの台地上平坦部に立地している。調査区は遺跡の東部にあたり、調査面積は35㎡である。調査前の現況は荒蕪地である。

調査の結果、平安時代の堅穴住居跡1軒、時期不明の土坑1基を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナに1箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・甕）、須恵器（坏、高台付坏、盤、甕）などである。

第2節 遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、住居跡1軒が確認できた。以下、遺構と遺物について記述する。

堅穴住居跡

第1号住居跡（第68～70図）

位置 B2e6区、標高27.5mの平坦な台地上に位置している。

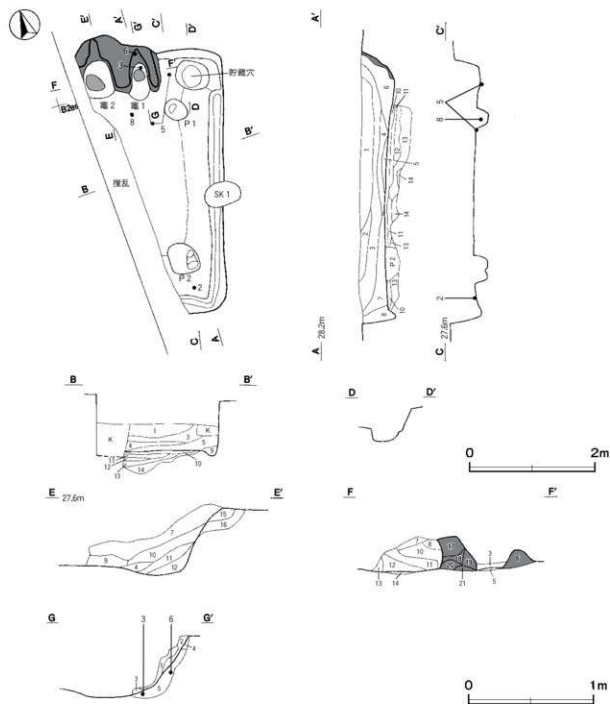
重複関係 第1号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため、南北軸は4.64mで、東西軸は2.10mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-15°-Eである。壁高は40～42cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、東壁及び南東コーナー部を除いて踏み固められている。貼床は、ロームブロック・黒色土ブロック・炭化物を含む第11～14層を埋土して構築されている。北東コーナー部を除く壁下に壁溝を確認できた。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、長径58cm、短径48cmの楕円形で、深さは24cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

竈 2基。北壁に併設されている。これらの新旧関係は不明であるが、竈1・竈2とも袖部が遺存していることから、住居の廃絶まで併用されていたものとみられる。竈1の規模は、焚口部から煙道部まで81cmで、燃焼部幅は24cmである。右袖部は、黄褐色粘土ブロックを主体とした第6層を積み上げて構築されている。火床部は床面より6cmほどくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に8cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第4・5層は、火床部及び煙道部の構築土である。竈2の規模は、西部が調査区域外に延びているため、焚口部から煙道部までは96cmで、燃焼部幅は47cmしか確認できなかった。右袖部は、ロームブロック・黄褐色砂質粘土ブロックを含む第17～21層を積み上げて構築されている。火床部は床面より6cmほどくぼんでおり、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に21cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第14～16層は、火床部及び煙道部の構築土である。



第 68 図 第 1 号住居跡実測図

瓦土層解説

- | | | | |
|-----------|-------------------------------|-----------|------------------------------------|
| 1 黒 褐色 | 色 黄褐色砂質粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 | 10 黒 褐色 | 黄褐色砂質粘土ブロック・焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化材微量 |
| 2 暗 赤 褐色 | 色 焼土粒子多量、ローム粒子微量 | 11 暗 褐色 | 焼土ブロック・炭化材少量、ロームブロック・黄褐色砂質粘土ブロック微量 |
| 3 黒 褐色 | 色 焼土ブロック・炭化材中量、ロームブロック微量 | 12 暗 褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化材少量 |
| 4 にんべん黄褐色 | 色 黄褐色砂質粘土ブロック多量、竈煙少量 | 13 黒 褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・黄褐色粘土粒子微量 |
| 5 明 赤 褐色 | 色 焼土ブロック多量 | 14 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 6 にんべん黄褐色 | 色 黄褐色砂質粘土ブロック多量、竈煙少量、焼土粒子微量 | 15 暗 褐色 | 焼土ブロック中量、黄褐色砂質粘土ブロック・ローム粒子少量 |
| 7 黒 褐色 | 色 明黄褐色砂質粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化物少量 | 16 黒 褐色 | 焼土ブロック中量、黄褐色粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 8 黒 褐色 | 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | | |
| 9 黒 褐色 | 色 黒色土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | | |

- 17 濃い黄褐色 黄褐色砂質粘土ブロック多量
 18 明赤褐色 焼土ブロック多量(砂質粘土ブロックが焼熟した土)
 19 赤褐色 焼土ブロック多量(砂質粘土ブロックが焼熟した土)
 20 濃い黄褐色 黄褐色砂質粘土ブロック多量、焼土粒子微量
 21 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量

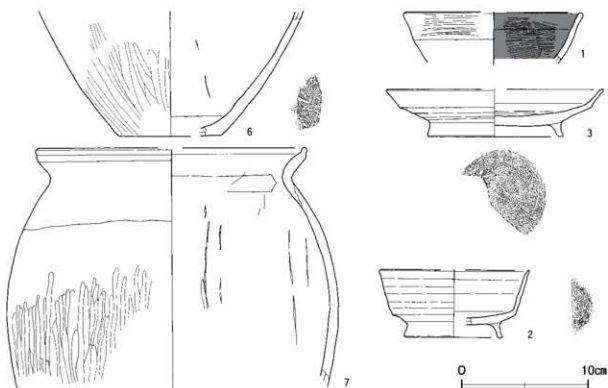
ビット 2か所。P1・P2は深さ20cm・22cmで、配置から主柱穴である。

覆土 9層に分層できる。第1～9層は、多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されており、覆土中から焼土ブロックと炭化材を確認した。第10～14層は貼床の構築土である。第11・13層上面には平坦面が築かれている。

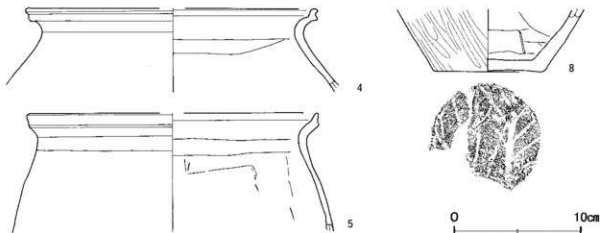
土層解説

- | | | | |
|-------|---|--------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | 黒色土ブロック・ローム粒子少量、焼土ブロック・灰白色粘土粒子微量 | 8 黒色 | ロームブロック少量、黒色土ブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・黒色土ブロック微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・黒色土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック・黒色土ブロック少量、ロームブロック・灰白色粘土ブロック・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、炭化物微量 |
| 4 黒褐色 | 黒色土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック多量、黒色土ブロック中量、炭化物微量 |
| 5 黒色 | 焼土ブロック・灰白色粘土ブロック・ローム粒子微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 6 黒色 | 黒色土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・灰白色粘土ブロック・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック多量、黒色土ブロック中量、炭化物少量 |
| 7 黒褐色 | 黒色土ブロック少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 褐色 | ロームブロック多量、黒色土ブロック少量 |

遺物出土状況 土器片328点(坏1, 甕323, 瓶4), 須恵器片14点(坏6, 高台付坏4, 盤2, 甕2)が、竈周辺の覆土下層から床面を中心に出土している。また、混入した縄文土器片4点(深鉢)も出土している。3は竈火床部の構築土中, 6は竈煙道部の構築土中から出土しており, 補強材として使用された可能性がある。8は北部, 5は北東部, 2は南東部の床面から出土している。1・4・7は覆土中から, それぞれ出土している。所見 覆土中から, 焼土ブロックと部材の一部と考えられる炭化材が確認できたことから, 廃絶に伴い部材を焼却し, それらを埋め戻した可能性がある。また, 床下に平坦面が築かれていることから, 床面の貼り替えが行われた可能性がある。時期は, 出土土器から9世紀前葉に比定できる。



第69図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)

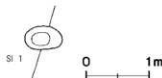


第70図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表(第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[14.1]	(41)	-	灰石・石英・雲母・褐色粘土	にぶい焼	普通	口縁部外面・内面ヘラミガキ	覆土中	10%
2	須恵器	高台付	[11.8]	5.8	[7.8]	灰石・石英・雲母・褐色粘土	灰	良好	底部回転ヘラケズリ後、高台船付	床面	30% P1,20
3	須恵器	壺	[17.2]	40	10.6	灰石・石英・雲母	明赤陶	良好	底部回転ヘラケズリ後、高台船付	織物盛土	50% P1,20
4	土師器	甕	[23.3]	(66)	-	灰石・石英・雲母	明赤陶	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土中	10%
5	土師器	甕	[21.1]	(9.5)	-	灰石・石英・雲母	明赤陶	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面ヘラナデ	床面	10%
6	土師器	甕	-	(100)	[8.6]	灰石・石英・雲母	明赤陶	普通	外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ 底部工具痕	織物盛土	10%
7	土師器	甕	[21.6]	(190)	-	灰石・石英・雲母・褐色粘土	にぶい焼	普通	口縁部外・内面横ナデ 外部外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ	覆土中	30% P1,20
8	土師器	甕	-	(4.9)	8.6	灰石・石英・雲母	にぶい焼	普通	外部ヘラミガキ 内面ヘラナデ 底部本葉痕 二次焼成痕	床面	30% P1,20

2 土坑



今回の調査で、時期・性格ともに明らかでない土坑1基を確認した。ここでは、実測図と土層解説、計測表を掲載する。

第1号土坑土層解説
1 黒色 ロームブロック少量

第71図 第1号土坑実測図

表12 第1号土坑計測表

番号	位置	長短方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複図録(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	日2e6	N-89°-W	楕円形	0.61 × 0.36	40	皿状	外傾	人為		SI 1→本誌

第3節 ま と め

9世紀前半の住居跡1軒、時期不明の土坑1基を確認した。宮後遺跡の調査区北部に同時期の遺構が見られることや、竈の構築方法が同様の系譜を引いている可能性があることから、今回の調査区で確認した住居跡に関しては、宮後遺跡と同一集落のものである可能性が残る。しかし、35mという狭小な範囲の調査であるため、遺跡の全容解明は今後の調査に委ねたい。

付 章

茨城県宮後遺跡第2号住居跡出土金属製品の成分分析調査

榎吉田生物研究所

1 はじめに

茨城県に所在する宮後遺跡第2号住居跡で出土した金属製品1点について、以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

2 資料

調査した資料は表1に示す耳環1点である。箔の有無を確認する為の表面と地金の2箇所を計測した(写真1)。

表1 調査資料一覧

No.	資料名	概 要
1	耳環 (表面)	全体が白い物質に覆われている。実体顕微鏡下での観察では箔の有無は不明である。
2	耳環 (地金)	

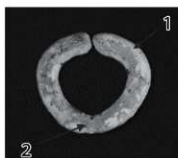


写真1 (←サンプル採取箇所)

表2 宮後遺跡出土金属製品の成分分析結果一覧表

元素	No.1 (wt%)	No.2 (wt%)
Pb	98.89	98.53
Si	0.83	1.20
Al	0.25	0.25
S	0.01	—

3 方法

資料を用いて蛍光X線分析を行い、金属元素を同定した。装置はRIGAKU製の波長分散型蛍光X線分析装置ZSX-PRIMUS IIを用いた。

4 分析結果

成分分析結果のスペクトルを付し(図1,2)、その結果を表2に示す。分析値から、No.1,2は共に鉛(Pb)が主成分として検出された。珪素(Si)、アルミニウム(Al)、硫黄(S)は土壤成分由来と考えられる。

5 考察

資料の耳環は、検出された成分データから鉛製である。表面の成分データからは金(Au)や銀(Ag)など箔に使用される金属成分が検出されていない。箔の有無は不明であり、無垢の鉛製品であった可能性も考えられる。表面の白い物質もデータから主成分が鉛なので、鉛の白い化合物である塩基性炭酸鉛(2PbCO3Pb(OH)2)と考えられる。

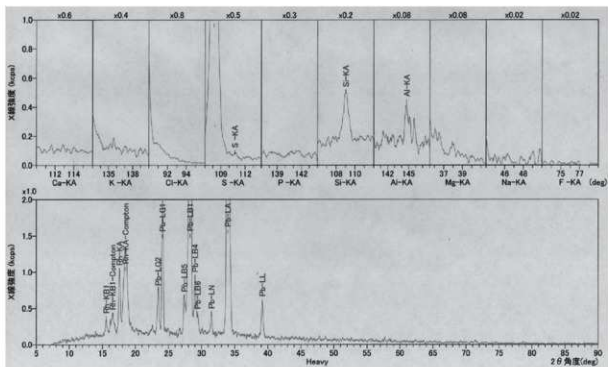


图1 No. 1 耳環表面

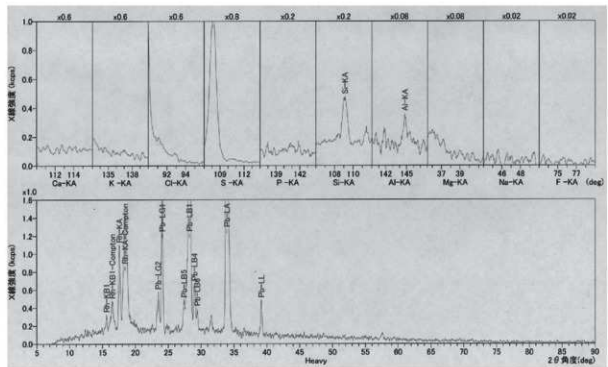


图2 No. 2 耳環地金

写 真 図 版



宮後遺跡・部田野西原遺跡遠影（南東方向から）

第 1 号 陥し 穴
土 層 断 面



第 1 号 陥し 穴
完 掘 状 况



第 17 号 土 坑
完 掘 状 况



PL2



第12号住居跡
遺物出土状況



第12号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
完掘状況

第3号住居跡
竈遺物出土状況



第3号住居跡
完掘状況



第10号住居跡
遺物出土状況



PL4



第1A号住居跡
完掘状況



第5号住居跡
遺物出土状況



第5号住居跡
完掘状況

第14号住居跡
完掘状況



第16号住居跡
竈完掘状況



第16号住居跡
完掘状況



PL6



第9号住居跡
完掘状況



第15号住居跡
完掘状況



第17号住居跡
完掘状況



第6号掘立柱建物跡完掘状況



第7・8号掘立柱建物跡完掘状況



第10号掘立柱建物跡完掘状況



第1号道路跡完掘状況



第1号溝跡完掘状況



第3号溝跡完掘状況

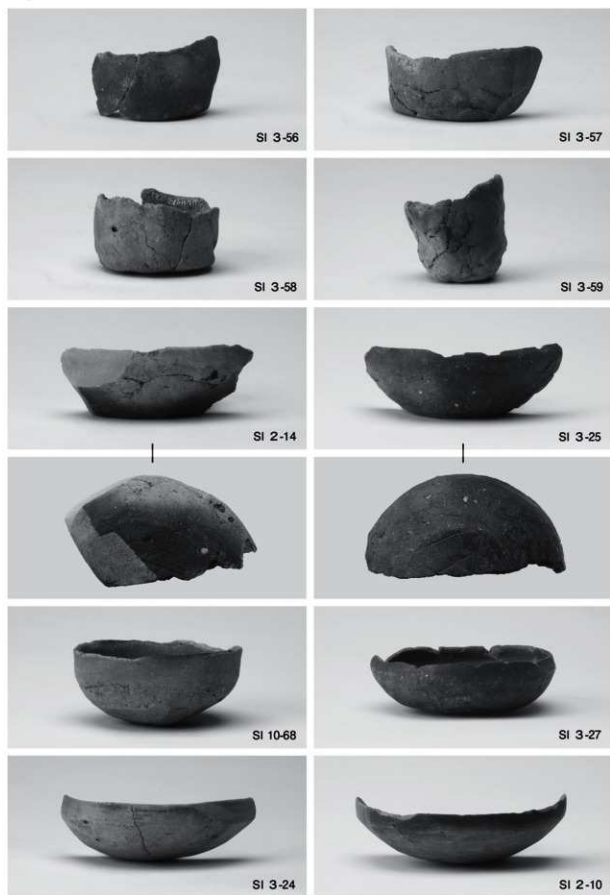


第4号溝跡完掘状況



第1号ピット群完掘状況

PL8



第2・3・10号住居跡出土土器



PL10



SI 3-32



SI 3-37



SI 3-39



SI 3-34



SI 3-35



SI 3-36

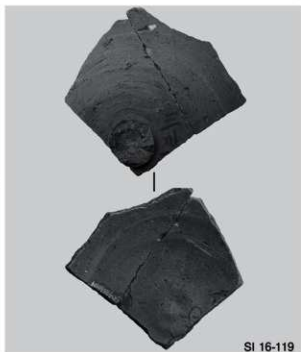
第3号住居跡出土土器



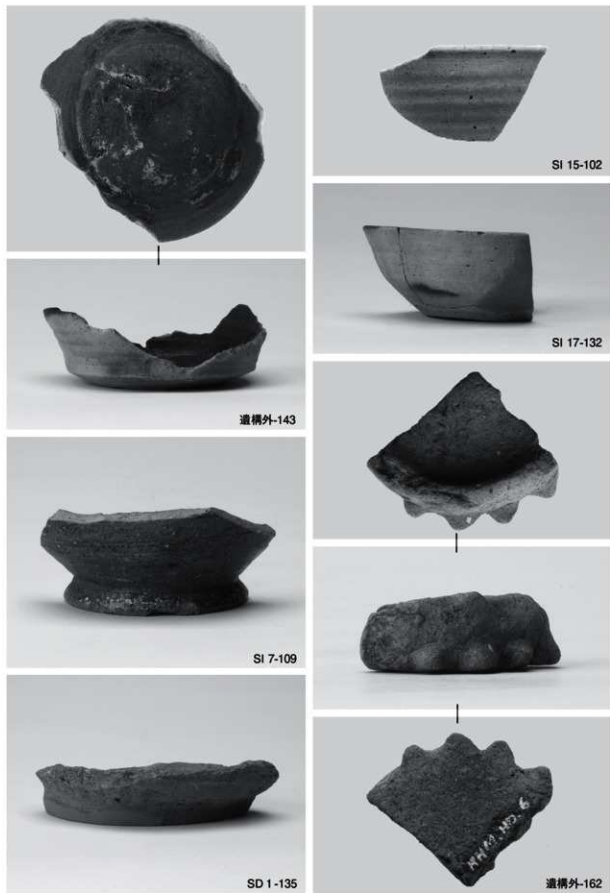
PL12



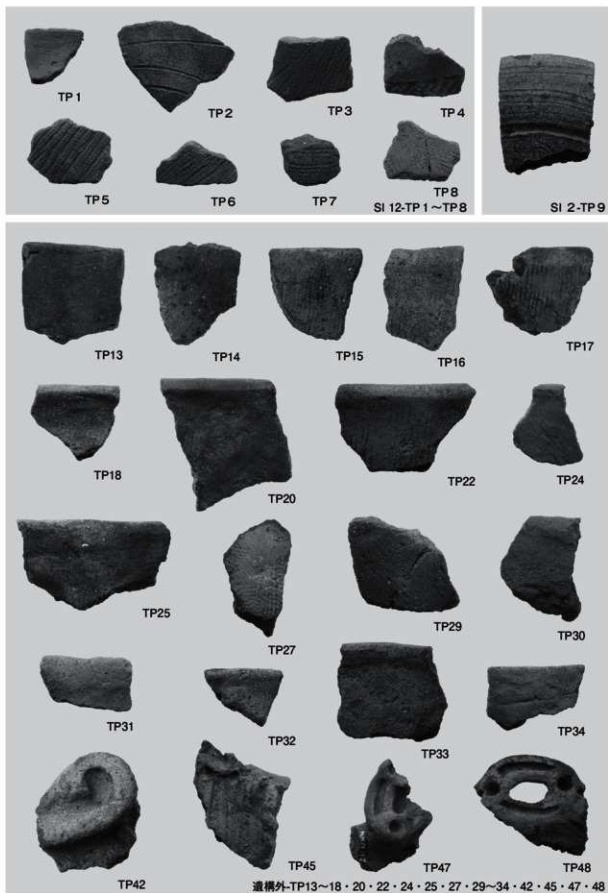
第1A・5・14・16号住居跡出土土器



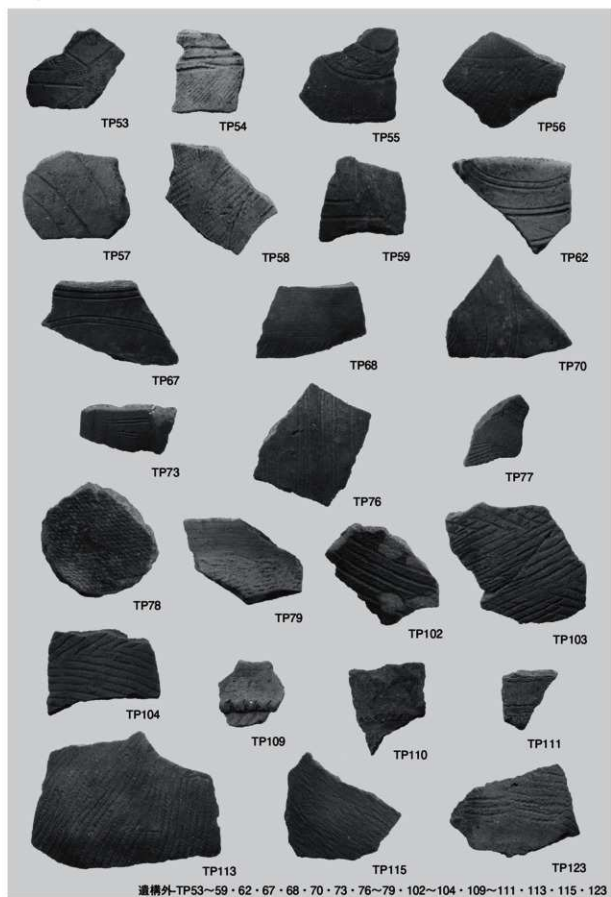
PL14



第7・15・17号住居跡，第1号溝跡，遺構外出土土器



第2・12号住居跡，遺構外出土縄文土器



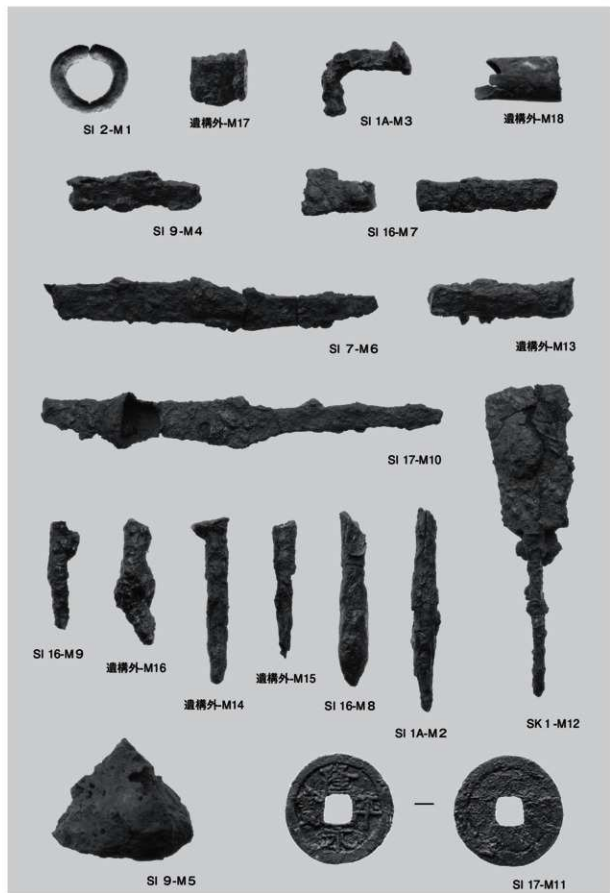
遺構外出土弥生土器



第2・3・12号住居跡，第1号溝跡，遺構外出土土製品，馬歯



第1A・2・3・10・16号住居跡，遺構外出土石器・石製品



第1A・2・7・9・16・17号住居跡，第1号土坑，遺構外出土金属製品

部田野西原遺跡

PL20



部田野西原完掘全景



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡電調査状況



第1号住居跡調査状況



SI 1-7



SI 1-2



SI 1-8



SI 1-3

第1号住居跡出土土器

抄 録

ふりがな	みやごいせき へたのにしほらいせき							
書名	宮後遺跡 部田野西原遺跡							
副書名	一般国道245号道路拡幅事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第354集							
著者名	大久保 隆史							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2012(平成24)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査 面積	調査原因
宮後遺跡	茨城県ひたちなか市部田野2860番地ほか	08221 - 229	36度 22分 18秒	140度 34分 32秒	26 m ～ 27 m	20100401 ～ 20100630	1900 m ²	一般国道245号道路拡幅事業に伴う事前調査
部田野西原遺跡	茨城県ひたちなか市部田野1576番地の2ほか	08221 - 247	36度 22分 27秒	140度 34分 32秒	27 m	20100401 ～ 20100630	35 m ²	一般国道245号道路拡幅事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮後遺跡	狩猟場	縄文時代	陥し穴	1基				古墳時代・奈良時代の大形住居跡が確認されている。
	集落跡	弥生時代	堅穴住居跡	1軒	弥生土器(壺)、土製品(紡錘車)			平安時代の第17号住居跡からは、皇朝十二銭(隆平永寶)が出土している。
			古墳時代	堅穴住居跡	5軒	土師器(坏・高坏・器台・鉢・小形甕・甕・小形甕・甕・把手・手控土師)、須恵器(甗)、土製品(支脚)、石器・石製品(磨石・砥石・砥石・白石・碧玉・白玉)、金属製品(耳環)		
	奈良時代	平安時代	堅穴住居跡	5軒	土師器(坏・甕・甕)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・甕・甕・長頸瓶・円面甕・甕)、石器・石製品(磨石・砥石・紡錘車)、鉄製品(刀子)			
			堅穴住居跡	4軒	土師器(坏・甕・甕)、須恵器(坏・甕・甕)、鉄製品(刀子・鐵)、錢貨(隆平永寶)、腕伏洋			
その他	時期不明	堅穴住居跡	2軒	縄文土器(深鉢・注口土器)、弥生土器(高坏・甕・甕)、土師器(坏・高台付坏)、須恵器(坏・甕・甕)、陶器(甗・皿・深鉢)、瓦質土器(鉢)、土製品(土器片・支脚)、石器・石製品(磨石・砥石・磨石・磨石・砥石・砥石・砥石)、鉄製品(刀子・釘)、金属製品(釵管)				
部田野西原遺跡	集落跡	平安時代	堅穴住居跡	1軒	土師器(坏・甕)、須恵器(高台付坏・甕)			2基が並存した甗が確認されている。
	その他	時期不明	土坑	1基				
要約	宮後遺跡は、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡で、幅広い時代の遺構と遺物が出土している。今回の調査で古墳時代・奈良時代の大形住居跡、平安時代の銭貨等が確認されており、周辺地域における拠点的な集落跡の可能性が高い。 部田野西原遺跡は、平安時代の集落跡である。宮後遺跡からも同時期の住居跡が確認されており、関連が想定される。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows XP Professional Version2002ServicePack3
	編集	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS5
	Scanning	6×7film Nikon SUPER COOLSCAN9000 図面類 EPSON ofilio ES-1000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第354集

宮後遺跡 部田野西原遺跡

一般国道245号道路拡幅事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成24（2012）年 3月14日 印刷

平成24（2012）年 3月16日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 富士オフセット印刷株式会社

〒310-0067 水戸市根本3-1534-2

TEL 029-231-4241

